

神奈川県 海老名市

国分尼寺北方遺跡

—昭和 63 年発掘調査の報告—

令和 4 年 3 月

海老名市国分尼寺所在遺跡調査団

神奈川県 海老名市

国分尼寺北方遺跡

—昭和 63 年発掘調査の報告—

海老名市国分尼寺所在遺跡調査団

序 文

本書は神奈川県海老名市に所在する国分尼寺北方遺跡の発掘調査報告書です。調査開始時点では、「海老名市 35 遺跡」と呼称されていて、そのことが示すように遺跡の実態については必ずしも詳細を得てはいませんでした。

ところが発掘調査により火葬墓、土葬墓、地下式土坑墓からなる中世墓群の存在が明らかとなり、縄文時代の堅穴住居、建物を構成する数多くの柱穴とそれを囲む溝などの近世期の遺構が発見されました。さらに灯塚と呼ばれる墳丘の裾を捉えることができ、その周辺から弥生時代末とも古墳時代初頭とも決めがたい土器が出土したことでも重要な発見となりました。

このように、この発掘調査においては数多くの貴重な成果を得ましたが、諸般の事情により調査報告書の刊行を果たさないまま長い時間が過ぎてしまいました。しかし発掘調査を実施した調査団として、記録保存の成果公開という責務への思いは調査終了直後からも搖らぐことなく、昭和六十三年の発掘調査より三十余年を経てこのたび報告書の刊行に至ることができました。成果の公開が遅れたことを改めてお詫びするとともに、この報告書が遺跡や周辺地の歴史的実像の解明に寄与することとなれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで関係諸機関および関係各位にはご助力、ご指導を賜りましたことに厚くお礼を申し上げます。

令和四年三月

海老名市国分尼寺所在遺跡調査団

団長 伊東 秀吉

例 言

- 1) 本書は、神奈川県海老名市国分北1丁目3004番1ほかに所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告書である。調査時点では散布地として「海老名市 35遺跡」と名称されていたが、その後に遺跡名は「国分尼寺北方遺跡」となった。
- 2) 発掘調査は集合住宅建設に伴う記録保存調査である。発掘調査および整理作業にかかる費用は日本ゼネラルサービス株式会社が負担した。
- 3) 発掘調査は昭和63年7月から12月、出土遺物や図面・写真等の整理作業は平成元年1月から5月に行つた。
- 4) 調査で作成した図面、写真等の記録資料と出土遺物は海老名市教育委員会で保管している。
- 5) 発掘調査にあたり、下記の業務を委託した（社名は調査時点）。
株式会社渋谷興業（発掘調査協力）、コクサイ航測株式会社（墳丘測量）
- 6) 本書の編集、執筆は、伊東秀吉の監修のもと、三木弘が行つた。

- 7) 調査は伊東秀吉を団長とする「海老名市国分尼寺所在遺跡調査団」を組織して実施した。その主な構成は下記のとおりである。

団長	伊東秀吉	副団長	大坪宣雄
顧問	小出義治	主任調査員	三木 弘

凡 例

- 1) 本書で表示するグリッドは調査地点の形状に沿って設定した任意なものであるが、日本測地系および世界測地系（平面直角座標系第9系）との対応を第2図に示した。
- 2) 本書で示す標高値はすべて東京湾平均海水位を用いている。なおすべての計測値が海拔0m以上であったことから、標高値の前の「+」を省略しT.P. ○. ○mと表示した。
- 3) 本書の遺構番号は、遺構の種類ごとに改めて付した（Ⅲ章2節を参照）。アルファベット大・小文字で遺構種類を表示し、種類ごとに1から通し番号を与えた。
- 4) 遺物番号は挿図ごとに1から番号を付している。したがって文中などで個体を指す場合、○-△（○：挿図番号、△：第○図内の遺物個体番号）となる。
- 5) 第1図には国土地理院地形図（1/25000「座間」 昭和61年9月30日発行）を使用した。

本文目次

序文

例言

凡例

I	発掘調査の経緯と経過	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の経過	2
II	調査地点の位置	6
1.	地理・地形	6
2.	調査地点周辺の歴史	6
III	発掘調査の成果	8
1.	基本土層	8
2.	発掘調査の成果概要	11
3.	検出した遺構・遺物	16
IV	調査の総括	66
1.	調査地点の時代変遷	66
2.	灯塚の位置付け	74
3.	中世の墓群	76
4.	溝と柱穴（近世前半期の土地利用）	80
参考文献		91
報告書抄録		

図目次

第1図	調査地点と周辺の遺跡	1
第2図	調査地点の座標	3
第3図	試掘調査時のトレンチ	4
第4図	調査地点の位置	5
第5図	基本土層（1）	9
第6図	基本土層（2）	10
第7図	遺構分布状況（全体）	12
第8図	遺構分布状況（除柱穴）	13
第9図	Aa 1 壁穴住居（平面、土層）	17
第10図	Aa 1 壁穴住居の炉（平面、断面、土層）	18
第11図	Aa 1 壁穴住居出土縄文土器（1）	19
第12図	Aa 1 壁穴住居出土縄文土器（2）	20
第13図	Ab 1 地下蔵（平面、土層）	22
第14図	Ba 1 火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土検出状況）	25
第15図	Ba 2 火葬墓（平面、土層、骨片検出状況）	26
第16図	Ba 3 火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土・錢貨検出状況）	27

第17図	Ba 4 火葬墓（平面、土層、焼土検出状況）	28
第18図	Ba 5 火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土検出状況）	29
第19図	Ba 6 火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土検出状況）	30
第20図	Ba 7 火葬墓（平面、土層、炭化物検出状況）	31
第21図	火葬墓検出の錢貨	32
第22図	副納された土師器皿、鉄製品	34
第23図	Bb 1 土葬墓（平面、土層、頭骨・錢貨検出状況）	35
第24図	Bb 2 土葬墓（平面、土層、頭骨検出状況）	36
第25図	Bb 3 土葬墓（平面、人骨・錢貨・鉄芯検出状況）	37
第26図	Bb 4 土葬墓（平面、人骨・錢貨検出状況）	38
第27図	Bb 5 土葬墓（平面、土層、歯牙検出状況）	39
第28図	土葬墓検出の錢貨	40
第29図	Bc 1 地下式土坑墓（平面、土層）	44
第30図	Bc 2 地下式土坑墓（平面、土層）	45
第31図	Bc 3 地下式土坑墓（平面、断面、土層）	46
第32図	Bc 3 地下式土坑墓（断面、土層）	47
第33図	Bc 4 地下式土坑墓（平面、断面、土層）	48
第34図	灯塚墳丘（写真測量図）	51
第35図	灯塚墳丘裾	52
第36図	灯塚周辺の堆積土状況	53
第37図	灯塚周辺の土器出土状況	54
第38図	灯塚周辺出土の土器（1）	55
第39図	灯塚周辺出土の土器（2）	56
第40図	調査地点の縄文時代	68
第41図	調査地点の弥生時代後期～古墳時代初頭	69
第42図	調査地点の中世	70
第43図	調査地点の近世	71
第44図	調査地点の近世（時期不詳遺構含む）	72
第45図	調査地点の中世墓群	78
第46図	Ca 1・3 槽（土層）	81
第47図	Ca 3・4・5・6 槽（土層）	82
第48図	柱穴分布状況	83
第49図	柱穴（深30cm～）分布状況	85
第50図	柱穴（土層）（1）	87
第51図	柱穴（土層）（2）	88
第52図	柱穴（土層）（3）	89

表 目 次

表1	発掘調査に係る届出等	2
表2	地下式土坑墓数の比較	7
表3	検出遺構	11

表 4	調査地点出土遺物	14
表 5	遺構別出土遺物	14
表 6	Aa 1 壁穴住居の出土縄文土器	16
表 7	Aa 1 壁穴住居出土縄文土器観察表	20
表 8	Ba 1 火葬墓出土土師器皿観察表	24
表 9	火葬墓出土錢貨	24
表 10	土葬墓出土錢貨	41
表 11	灯塚周辺の土器出土状況	57
表 12	土器観察表	58
表 13	土坑、廐棄土坑、集石、溝	61
表 14	小穴	63
表 15	遺構・包含層出土の縄文土器 (Aa 1 壁穴住居を除く)	66
表 16	調査地点の時代変遷	73
表 17	灯塚の推定される墳形と規模	75
表 18	墳丘規模の比較	75
表 19	火葬墓	76
表 20	土葬墓	76
表 21	地下式土坑墓	77
表 22	地下蔵	77
表 23	「尼寺遺跡」の地下式土坑墓（地下式壙）	79
表 24	周辺の中世墓形成	79
表 25	分析柱穴の属性	84
表 26	柱穴の長径と深度	86
表 27	柱痕の直径（柱径）	86

写 真 目 次

写真 1	調査地点と周辺の状況	5	写真 12	Ba 5 火葬墓全景	33
写真 2	調査地点全景	7	写真 13	Bb 3 土葬墓全景	41
写真 3	Aa 1 壁穴住居全景	18	写真 14	Bb 1 土葬墓頭骨	41
写真 4	Aa 1 壁穴住居炉	18	写真 15	Bb 2 土葬墓頭骨	41
写真 5	Ab 1 地下蔵全景	23	写真 16	Bb 4 土葬墓全景	41
写真 6	Ab 1 地下蔵全景	23	写真 17	Bc 2 地下式土坑墓主室内	49
写真 7	Ba 1 火葬墓全景	32	写真 18	Bc 3 地下式土坑墓開口部	49
写真 8	Ba 2 火葬墓全景	32	写真 19	Bc 3 地下式土坑墓主室内堆積土	49
写真 9	Ba 2 火葬墓掘方全景	32	写真 20	Bc 3 地下式土坑墓主室内	49
写真 10	Ba 3 火葬墓全景	32	写真 21	灯塚墳丘裾	60
写真 11	Ba 4 火葬墓全景	33	写真 22	灯塚周辺の土器出土状況	60

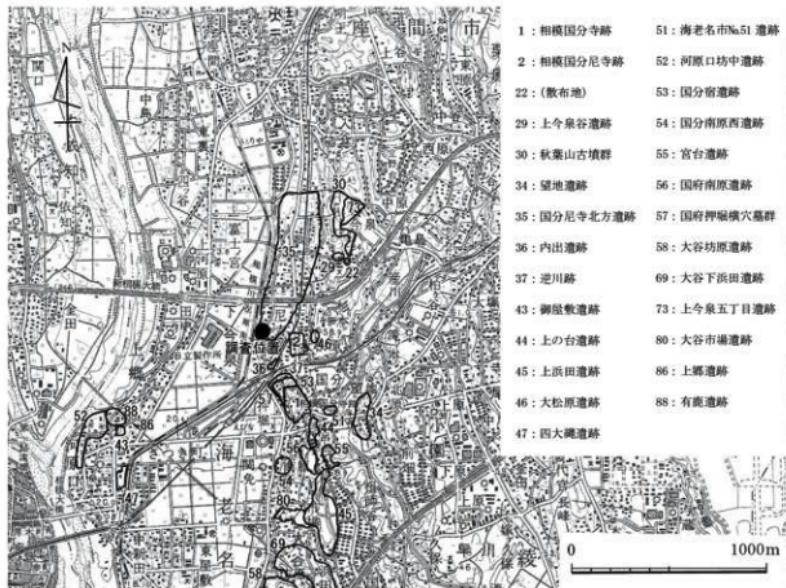
I 発掘調査の経緯と経過

1. 調査に至る経緯

神奈川県海老名市国分北1丁目（調査時点では国分寺尼寺）3004番1ほか地内における集合住宅建設設計画に関する埋蔵文化財の取り扱いについて、昭和62年度に小出、伊東のもとに相談があった。

昭和62年度当時、当該地の大半は「海老名市 35 遺跡」（散布地）とする周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、遺跡の実態は明瞭ではなかった。しかし東約200mに相模國分尼寺跡が位置し、平安時代前期に國分尼寺を移したとされる湧河寺の推定地とも近接していて、さらに事業予定地の北に隣接する「灯塚」（かがりづか）と呼ばれる墳丘状の盛土が塚あるいは古墳の可能性があるなどのことから、事業予定地全体に遺跡が広がることが予測された。また源頼朝と関わる清水寺が調査地周辺に建立されたとの見解もある。

そこで神奈川県教育委員会および海老名市教育委員会と協議を行い、まず遺構・遺物の有無を確認するための試掘調査を実施し、その存在が認められた場合は開発計画に対応した発掘調査を行うこと、調査にあたっては調査団を結成することなどを取り決めた。



第1図 調査地点と周辺の遺跡

I 発掘調査の経緯と経過

表1 発掘調査に係る届出等

文書種別・内容	文書番号	日付	免信者	受信者	備考
1 文化財保護法第57条2に基づく土木工事等の届出					
土木工事等の届出	—	昭和62年 9月7日	事業主	文化庁長官 神奈川県教育委員会教育長	海老名市教育委員会を経由
土木工事等の届出に対する通知	文第6-132号	昭和62年 9月26日	神奈川県教育委員会教育長	事業主	海老名市教育委員会を経由
2 文化財保護法第57条1に基づく発掘調査の届出					
発掘調査の届出	—	昭和63年 6月10日	伊東秀吉	文化庁長官	海老名市教育委員会 神奈川県教育委員会を経由
発掘調査の届出に対する文化庁通知	委保第5号 1229号	昭和63年 7月27日	文化庁長官	伊東秀吉	海老名市教育委員会 神奈川県教育委員会を経由
3 出土品の手続き					
埋蔵物発見届	—	平成元年 1月19日	伊東秀吉	座間警察署長	
埋蔵物の文化財認定について	文第5-83号	平成元年 3月7日	神奈川県教育委員会教育長	座間警察署長 海老名市教育委員会教育長	

2. 調査の経過

(1) 試掘調査

昭和63年7月30日より試掘調査を開始した。試掘調査では、土層や遺構を詳細に確認し、遺物の見落としを回避するために、掘削にあたっては重機（バックホウ）は使用せず、すべて人力で行った。

試掘は、東西に長い事業予定地に平行するトレント3本、それらに直交する南北方向のトレント1本を設定して行った。トレントの規模は、幅がいずれも2m、長さは東西トレントが44～48m、南北トレントが24m、深さはローム層上面あるいはそれから若干下がったレベルまでの1.0～1.5mであった。

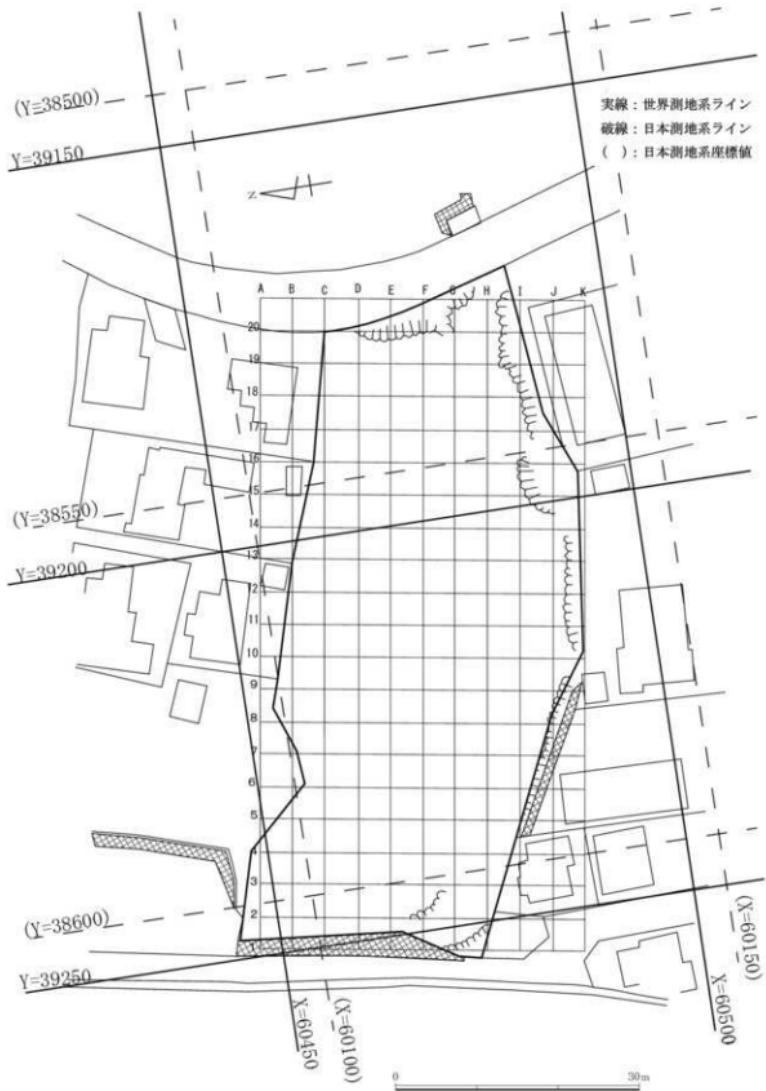
試掘調査開始の翌日には包含層から銭貨や土器類が出土はじめ、その後もトレント掘削に伴って多数の遺物が出土した。試掘調査は、降雨による中断もあったため当初の計画すべてが完了したのは8月23日であった。

遺構・遺物の存在が試掘調査の初期段階から明らかになっていたことから、発掘調査が必要であること、試掘調査の結果に基づき調査範囲を設定すること、そして試掘調査と本調査（発掘調査）の間の空白期間を最短にするため事前の諸準備に努めることなどを試掘期間中に開発事業者との間で確認した。

(2) 発掘調査

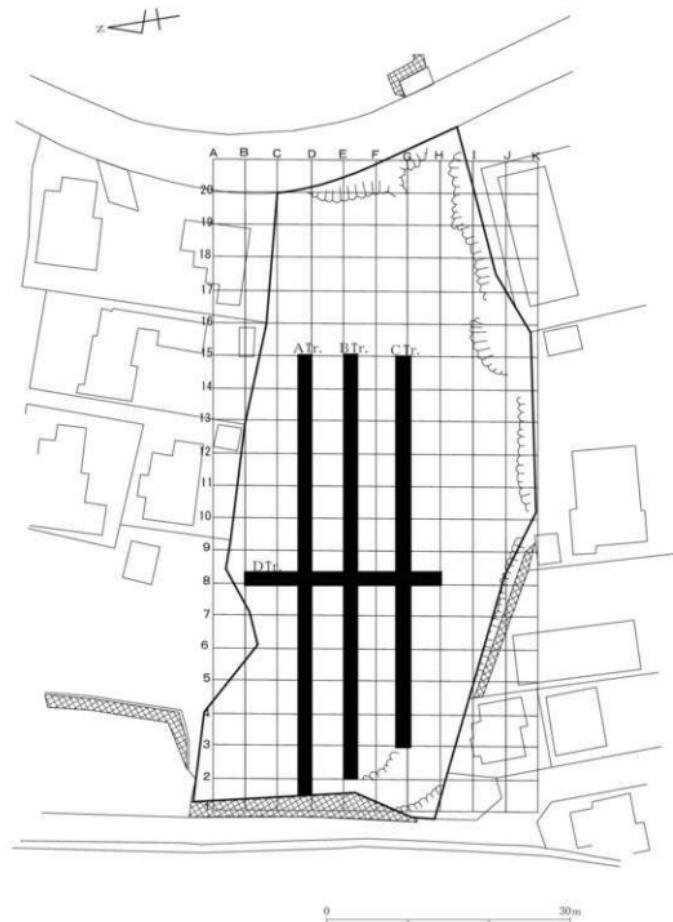
発掘調査は8月25日より開始した。調査範囲については、試掘調査で設定したトレントの全域で遺構が認められ、遺物も出土したことから、開発される全域を調査対象としたが、現実には排水施設や安全対策上のために対象範囲から外れた部分もあった。

調査開始にあたり、調査地点に平行する3本の東西トレントのうちの中央トレント（B Tr.）北長辻



第2図 調査地点の座標

I 発掘調査の経緯と経過



第3図 試掘調査時のトレンチ

を基軸として、4 m単位でグリッドを設定した。東西方向は1～20グリッド、南北はA～Jグリッドとし、さらに1～20グリッドの西軸をそれぞれ1-line～21-line、A～Kグリッドの北軸をA-line～K-lineとした。基点を15-lineとC-lineの交点に設定した。

本調査（発掘調査）では、試掘調査とは異なり表土や旧耕作土の除去に重機（バックホウ）を用いた。その機械掘削は9月1日に終了し、それまで仮置きしていた堆土を搬出したのち重機を回送した。

その後の発掘調査にあたっては、人力掘削のみで進めた。なお調査により生じる堆土を場外へ搬出す



写真1 調査地点と周辺の状況（南から）

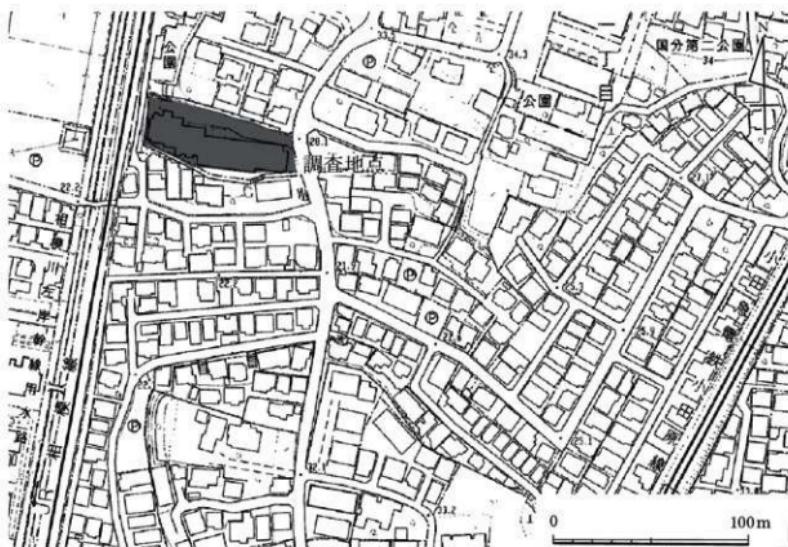
るダンプカーの停車位置確保のため、調査範囲の東端の一部分を現状で残さざるを得なかった。

機械掘削開始の翌日には火葬墓1基が検出され、9月初旬には火葬墓3基、土葬墓2基を数えた。その後も火葬墓、土葬墓をはじめ地下式土坑墓、古墳丘塚とみられる地形の切り落とし、縄文時代の堅穴住居、さらに廐棄土坑、溝群、柱穴、土坑、小穴など多種の遺

構を発見した。

12月28日にセスナ機による調査地点の全景写真撮影を行い、昭和63年12月30日にBb4土葬墓の人骨を取り上げて現場作業を終了した。

そして調査器材を年明けの1月上旬に撤収して、現地を事業者に引き渡した。



第4図 調査地点の位置

II 調査地点の位置

1. 地理・地形

調査地点にあたる神奈川県海老名市国分北1丁目は、JR 東日本相模線「海老名駅」および小田急電鉄小田原線、相模鉄道本線の「海老名駅」から北東約 700 ~ 900 m の距離にある。

相模川の東沿いを南北に延びる河岸段丘面上に位置し、その西端に当たる。河岸段丘面は北から南へ緩傾斜し、調査地点付近の標高は約 32 m を測る。

調査地点の西端は段丘の崖線となっていて、さらに西方は相模川東岸に広がる沖積地へと下降する。一方南もまた比高差 9 ~ 10 m ほどの段丘崖となっている。この段丘崖は、相模川東岸の沖積地から東方に入り込んだ開析谷により形成されたとみられる。なおこの崖線下には湧水「浅井の水」がある。

このように段丘面縁辺部に当たる調査地点は、西と南が崖面となり張り出したような地形であり、このことが選ばれたといえる。

2. 調査地点周辺の歴史

調査地点は、既述したように発掘調査を実施した昭和 63 年当時は「海老名市 35 遺跡」（散布地）として周知されていたが、遺跡の実態は必ずしも明らかではなかった。その後、遺跡名を「国分尼寺北方遺跡」とし、現在に至っている。

その国分尼寺北方遺跡は、相模川東の河岸段丘面上に南北 1500 m、東西 400 m ほどの範囲で広がり、相模川の東西に沿った沖積地とは 10 ~ 15 m 程度の比高差がある。

発掘調査の成果は縄文時代から近世にまで及んでいるが、とくに注目されるのは火葬墓、土葬墓、地下式土坑墓などの墓葬の存在である。調査地点は、相模國分尼寺を貞觀 15 (873) 年に移したとされる湧河寺の所在推定地と近接している。この湧河寺については、詳細は不明であるが、創建が国分寺より遡るとの見解もある。国分尼寺は元慶 2 (878) 年に湧河寺から元の場所に戻っているが、湧河寺そのものは近世まで存続したといわれているので、この湧河寺と火葬墓をはじめとする様々な墓葬とが関連している可能性がひとつには考えられる。

また、源頼朝が建立、あるいは復興したとの伝えのある清水寺の所在地である可能性も指摘されていて、やはり中世墓群との関連について検討をする。

地下式土坑墓は、調査地点の東を区切る市道上でも 2 基発見されている。調査地点から北へおよそ 17 m と 40 m の距離にある。ともに南に堅穴部を付設している。

1986 年段階ではあるが、地下式土坑墓は神奈川県下で 69 遺跡・地点で 136 基が集計され、海老名市域では 20 遺跡・地点、36 基以上を数えるという（近藤 1986）。遺跡比で 29%、土坑墓比で 26% を占める。しかも海老名市域のなかでも国分尼寺周辺では 6 基を数え、市内の 17% に当たる。

さらに、調査地点の北東約 400 m の国分尼寺北方遺跡第 8 次調査区で 1 基発見されている。そして今回の報告によって 4 基が追加されたことから、市内における当該地の地下式土坑墓の集中度、そして県内における市域内での集中度はより明瞭になったといえるかも知れない。

これに対して、1995 年 3 月までに調査、報告されて図面の確認ができる「地下式坑」を対象とした分析では、65 遺跡・182 基が集計され、そのなかでも伊勢原市をはじめとする相模川西の伊勢原台地を

表2 地下式土坑墓数の比較

	神奈川県全体	海老名市	伊勢原市
近藤 1986	69 遺跡・地点、136 基	20 遺跡・地点、36 基以上	5 遺跡・地点、5 基
中世研究プロジェクトチーム 1995	65 遺跡、182 基	4 遺跡、8 基	14 遺跡、54 基

取り巻く一帯では32遺跡・106基を数え、県内の60%ほどの「地下式坑」が分布するとの見解もある（中世研究プロジェクトチーム 1995）。この集成によれば海老名市内での発見数は4遺跡・8基、全遺跡数の3.8%に留まる。

この2つの分析結果の違いは分析対象の選択に起因していて、後者の分析からは古い時期に公開された事例が除外される一方、直近の大規模調査による発見事例が積み上げられている。

後者の集計のうち海老名市での発見数を前者が示す数に置き換えると、遺跡・地点数では海老名市、基数では伊勢原市が優位となり、相模川の東西で2極化した分布状況となる。

いまひとつの注目点としては、調査区内一面に認められた多数の柱穴である。その数は500基以上を数える。建物を復元するまでには至らなかったが、建物の柱穴痕であるとみられること、柱痕の状況から角柱が使用されたと推定されること、そして中世とみられる構造を切り込んだものがあることから、近世期の屋敷地が存在していたとみられるが、一部の柱穴については中世に遡る可能性はある。

国分尼寺北方遺跡内では、上述の第8次調査区、そして調査地点の北東約250mの第7次調査区において中世の掘立柱建物や土坑墓が検出されている。

また調査地点の周辺で中世屋敷地が発見された遺跡としては、上浜田遺跡や宮久保遺跡がある。とともに調査地点の南方の目久尻川流域に位置し、前者は丘陵裾部、後者は谷状地に立地している。



写真2 調査地点全景（北から）

III 発掘調査の成果

1. 基本土層

この発掘調査においては、調査地点の長辺に沿って設定した3本のトレンチのうちの中央トレンチ（B Tr.）北壁で観察できる堆積土状況を基本土層とした。ただし、土層観察およびその記録は南北方向に設定したD Tr. を含め4トレンチすべてで行っている。そのため、各トレンチ間で確認できた土層状況に違いもみられるが、そうした差異も含めて、調査地点の基本土層について概観する。

トレンチ（B Tr.）では、現況地盤から平均0.5m掘削し、部分的にさらに0.3～0.6m掘り下げた。現況地盤以下、最大1.1m下までの範囲を大きく6層に区分した。

I層は現況地盤直下の耕作土である。調査地点のほぼ全域に広がっているが、西寄りでは約0.5mとやや厚く堆積している。中央以東では0.2mほどを測る。

I層の下には旧耕作土が認められる。これをII層とし、色調とローム土の包含状況などから3分した。そのうちIIc層は局所的な存在であるが、Ila層とIib層は上下に堆積する状況が広い範囲で認められた。中央トレンチ（B Tr.）でもそうした状況が東半で顕著にみられる。II層全体の厚さは0.1～0.2mである。

II層の下には遺物包含層であるIII層が主としてトレンチ西半に広がっている。このIII層は色調、土質、混有物の違いから3分することができるが、各層は安定的な上下堆積とはなっていない。このIII層は、全体として0.1～0.2mの堆積厚である。

このIII層を切り込んだ遺構の痕跡がトレンチ壁面の複数箇所で観察された。そしてその大半は遺構上端がIII層上面と一致、すなわちII層下面の下に当たる。こうした状況から、それらの遺構はIII層形成後からII層形成前に設けられたものであり、II層の形成により遺構上部が削平されたと推察する。さらに、そうした削平がIII層上面にも及んでいた可能性は高い。

III層に続くIV層はソフトローム層である。この層以下がいわゆる「地山」である。このIV層は中央トレンチ（B Tr.）の範囲内では確認することができず、調査地点の南端付近においてのみ存在を認めた。調査区周辺の地形が北から南に下降しているにもかかわらず、高所側にあたる北寄りでIV層が確認できないという状況からすると、後世に大掛かりな地形改変が行われたとみられる。

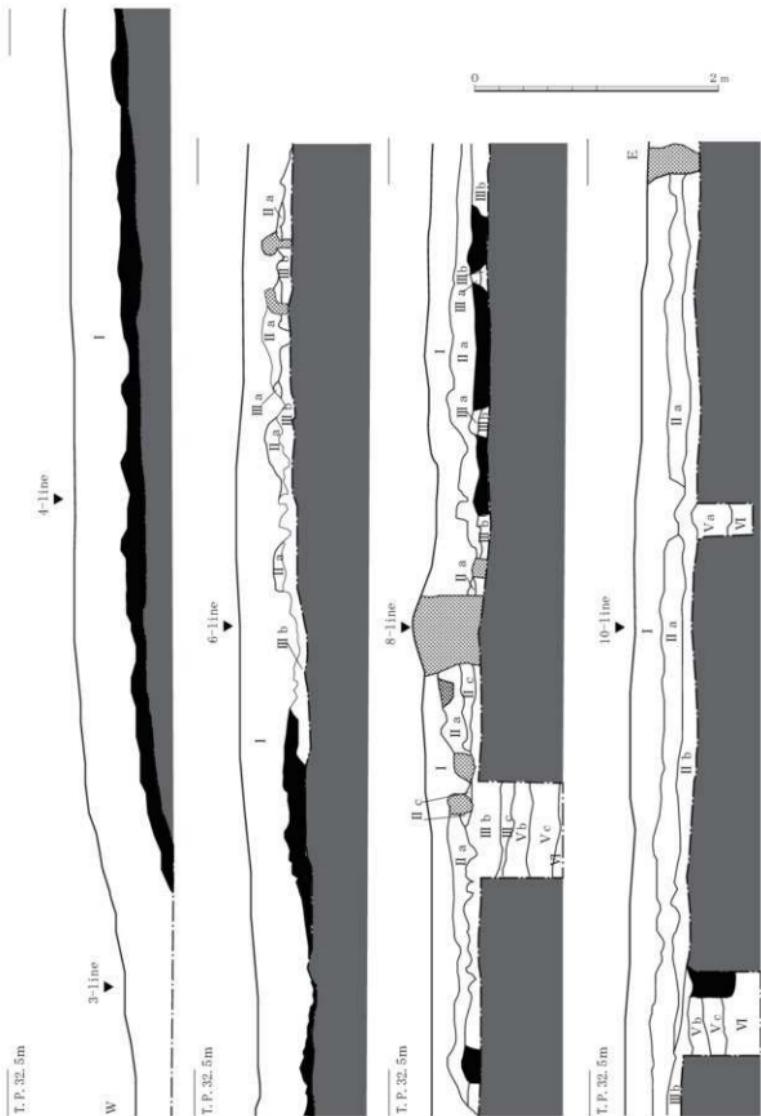
ソフトローム層（IV層）の下はハードローム層となる。これをV層とし、色調や混有物の違いにより3分した。ただしその差は小さい。

このV層、そして下に続くVI層はトレンチ内をさらに深く掘り下げた範囲でのみ確認することができた。V層下のローム層黒色帯をVI層とした。色調や土質においてV層と違いがみられるものの、その差は微妙かつ漸移的である。

こうした調査地点における基本土層の観察により、該当地周辺では旧地形が変化するほどの地形改変が少なくも2度行なわれた可能性がある。

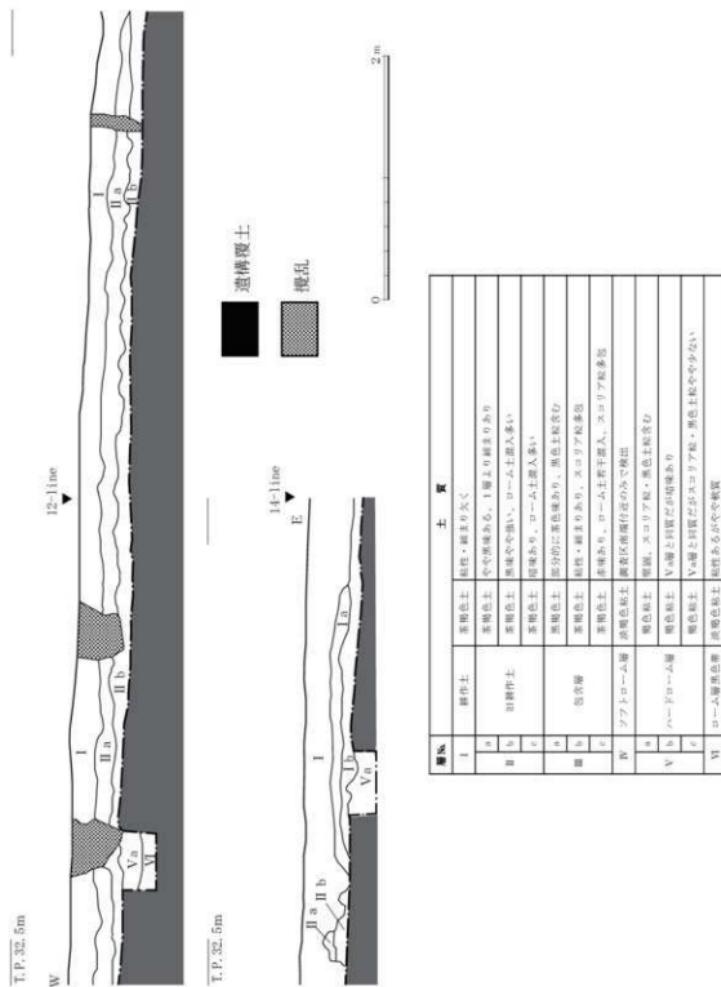
1度目はソフトローム層（IV層）の大部分にまで掘削が及んだ大規模な造成の可能性である。既述のように調査地点の大半の範囲でソフトローム層が確認されず、深掘り部分では遺物包含層（III層）下がハードローム層（V層）であった。繩文時代中期に比定できるAa1堅穴住居が遺存していることから、その時期以降に大規模な改変はなかったとも考えられるが、しかしまた堅穴住居の深さの見積もり方次第にもよる。なお現状の深度は0.2mである。

1. 基本土層



第5図 基本土層(1)

III 発掘調査の成果



第6図 基本土層 (2)

2度目は、旧耕作土（II層）の形成に伴ってなされた地表面の改変である。火葬墓や土葬墓の人骨が遺構検出面とほぼ同レベルで出土したことから、当時の地表面は0.5mほど削平を受けたとみられる。

2. 発掘調査の成果概要

(1) 検出遺構と分類

発掘調査面積は約1500m²。遺構検出はIII層を平均10cm下げたあたりで行い、遺構の把握が困難な場合にはさらに検出面を下げるが、V層を削り込むことはなかった。

検出した遺構は多種類におよんでいて、また時期もさまざまであった。遺構の種別として建物系（A類）、埋葬系（B類）、集落系（C類）、その他（D類）に分けた。さらにA類には堅穴住居（a類）、地下蔵（b類）、柱穴（c類）がある。

堅穴住居は、居住施設として使用可能な一定度の面積があり、炉などの「火処」を備えたもの指す。これに対してこの調査で検出された地下蔵には構造的な特徴がある。主体となる室部が地下にあることに加え、掘方面積が狭小、「火処」の備えがない、さらに主柱の痕跡がなく柱配列が壁に沿うなど、日常的な居住空間の建物とは異質な構造の遺構である。

柱穴は、柱を据えるための掘方を指す。基本は柱痕が観察されたもの、それと同程度の深度あるいは

表3 検出遺構

遺構種類		No. (遺構種類別)	旧遺構No.	備考
A類 建物系遺構	a 堅穴住居	1	SI-1	
	b 地下蔵	1	SX-4	
	c 柱穴	1～533	P No. 1～533	
B類 埋葬系遺構	a 火葬墓	1～7	KT-1・2・3・4・5・6, SX-3	Ba 7 (SX-3) は火葬場の可能性あり
	b 土葬墓	1～5	DT-1・2・3・4・5	
	c 地下式土坑墓	1～4	SK-1・6・4, P-33	
	d 古墳	1	MT-1	
C類 集落系遺構	a 溝	1～6	SD-1・2・3・4・5・6	
	b 土坑	1～6	SK-2・3・5・7・8・9	
	c 集石	1～3	SS-1・2・3	
	d 廃棄土坑	1～3	GM-1・2・3	
	e 小穴	1～44	P-1・4～8・10～32・35～49	
D類 その他	a 不明遺構	1～6	SX-1・2・5・6・8・9	

III 発掘調査の成果



第7図 遺構分布状況 (全体)



第8図 遺構分布状況（除柱穴）

III 発掘調査の成果

角柱を据えたとみられる平面形を呈するなどの掘方で、小穴とは規定が異なる。ただし、建物の柱穴であるとはいって、その配列は明らかにはならなかった。

埋葬系遺構は火葬墓（a類）、土葬墓（b類）、地下式土坑墓（c類）、古墳（d類）に分かれる。ただし d 類については比定時期を考慮して「墳丘墓」と呼ぶのが妥当との見解もあるが、本報告書では「古墳」と理解し、表記する。また古墳を除いても 3種類の埋葬系遺構が存在していることは、調査地点の歴史的背景を反映する状況といえる。

人骨が検出された埋葬系遺構のうち、基本的に焼土・炭化物を混在しない一群を土葬墓とした。人骨の炭化状況については、土中における酸化作用ともかかわっているので、肉眼観察からでは判断できないが、土葬墓としたものに比べると火葬墓では人骨が本来の形状をほぼ留めず、骨片はやや分散状態にある。

また地下式土坑墓は、地下蔵と類似する形状であるが、柱穴が認められないなどの複数の点で異なっていることから、埋葬系遺構として理解した。

集落系遺構とした C 類は、建物系遺構と埋葬系遺構および不明遺構を除いた残りすべてを包括するが、その中には溝（a類）、土坑（b類）、集石（c類）、廃棄土坑（d類）、小穴（e類）の 5種類がある。また溝と廃棄土坑を除くと、時代の特有性はない。

そして、A～C 類のそれぞれの遺構種類に該当しない、機能不明の遺構を「D 類 その他」とした。各遺構は凡例で示したように、遺構種類の大別と細別のそれぞれの分類記号と遺構番号で表している。したがって、種別ごとの検出遺構数は、その最終番号に示される。例えば、火葬墓（B a）は 7 基、土

表 4 調査地点出土遺物

	鉄質	土器	土師器皿	須恵器	縄文土器	炻器	陶器	磁器	瓦	鉄製品	石器・石 製品	土製品	銅製品
遺構内	23	157	52	15	178	4	36	32	11	11	16	0	0
包含層 旧耕作土	15	1033	126	52	267	18	333	207	55	21	45	9	7
計	38	1190	178	67	445	22	369	239	66	32	61	9	7

表 5-1 遺構別出土遺物

遺構の種別・No.	鉄質	土器	土師器皿	須恵器	縄文土器	炻器	陶器	磁器	瓦	鉄製品	石器・石 製品
遺構No.	旧No.										
An 1	SI-1				74						3
Ab 1	SX-4	42	4	5	19		1		5		
Ac46	P No.-46	1					1	1			1
Ac91	P No.-91				1						
Ac217	P No.-217				1						
Ac250	P No.-250							1			
Ac271	P No.-271				1						
Ba 1	KT-1	2	9	5	1	4				2	
Ba 2	KT-2		3				1				
Ba 3	KT-3	3	1								

表5-2 造構別出土遺物

造構の種別・No.		鉄貨	土器	土師器皿	須恵器	縄文土器	炻器	陶器	磁器	瓦	鉄製品	石器・石製品
造構No.	旧No.											
Ba 4	KT-4					1						
Ba 7	SX-3		5	2		5					1	
Bb 1	DT-1	6										
Bb 3	DT-3	5										
Bb 4	DT-4	6	1									
Bc 1	SK-1		20	2		2						
Bc 2	SK-6		2					1				
Bc 3	SK-4		5	1				1		1		
Bd 1	古墳		5									
Ca 1	SD-1										1	
Ca 2	SD-2			1	1	1		1			1	
Ca 3	SD-3		15	17	2	4					1	
Ca 4	SD-4		5	6		2						
Ca 5・6	SD-5・6		16	7	2	5			3	2		
Cb 1	SK-2		2								1	
Cb 3	SK-5		1									
Cb 5	SK-8				1							
Cb 6	SK-9				2							
Cc 1	SS-1					45					6	
Cc 2	SS-2					1					2	
Cd 1	GM-1	6										
Cd 2	GM-2			1			1	21	25	2	5	
Cd 3	GM-3						1	4	1		1	
Ce14	P-17		1			1		1				
Ce15	P-18		2			2						
Ce16	P-19			1							1	
Ce18	P-21	1										
Ce20	P-23	2	1									
Ce21	P-24	2	1		2							
Ce23	P-26	1										
Ce26	P-29	1										
Ce34	P-39							1				
Ba 1	SX-1		8			4		2				
Ba 2	SX-2		1			2					1	
Ba 4	SX-6					1						
Ba 5	SX-8			3			1	1			1	
Ba 6	SX-9				1			1			1	

III 発掘調査の成果

葬墓（B b）は5基、不明遺構（D a）は6基である。

（2）出土遺物

発掘調査により、総数2723点の遺物が出土した。その大半は破片資料である。完形を保っているのは一部の銭貨などであり、その数は極めて少ない。

全体を通じてみた場合、最も多いのは土器で1190点を数え、43.7%にのぼる。次いで繩文土器が445点・16.3%、陶器369点・13.6%である。この3種類で約74%となり、全体の4分の3を占める。

なお土器としたものには、弥生時代後期後半あるいは古墳時代初頭の土器から中世の土器までを含んでいて、土師質土器と表現した方が適切な中世土器を区分していない。同様のことは須恵器についても当てはまり、須恵質土器とされる中世須恵器と区別を行っていない。ただし、カワラケと呼ばれる土師質土器の小皿については、時代・時期比定の指標となることから、「土師器皿」として土器一群と区分した。

ほとんどの種類の遺物は、遺構内よりも包含層からの出土が多いが、銭貨に関しては遺構出土が包含層出土より約2倍を数える。これは、銭貨が埋葬遺体に添って納められたことを端的に示している。

出土遺物のうち2188点、80%は旧耕作土・包含層（主としてIII a層）からの出土である。残り535点が遺構内出土であるが、遺物が多数出土した遺構は少なく、50点以上を認めたのはAa 1堅穴住居（77点）、Ab 1地下蔵（76点）、Cd 2廐棄土坑（55点）、Cc 1集石（51点）に過ぎない。

3. 検出した遺構・遺物

（1）堅穴住居

Aa 1堅穴住居 炉と不規則ながら柱穴を備えていることから堅穴住居とした。長径4.4m、短径3.0m、現状の深さ0.2mほどを測る。平面形は北西-南東に長軸をとる梢円形を呈している。掘方底面はほぼ水平で、その上にローム土を含む茶褐色土（4層）が貼土されている。

炉は住居内の北東寄りに設けられている。主に長方体の河原石を横並びに据えて内法40cm程度の石垣を組み、内部に土器をやや傾けて据えている。

柱穴は7基検出された。住居の南半に分布していて、北半には認められない。柱穴の覆土は主として黒褐色土であり、大半の柱穴では色調差、あるいはローム土などの包含量の違いで上下に分層できる。ただ、いずれの柱穴においても柱痕を捉えることはできなかった。

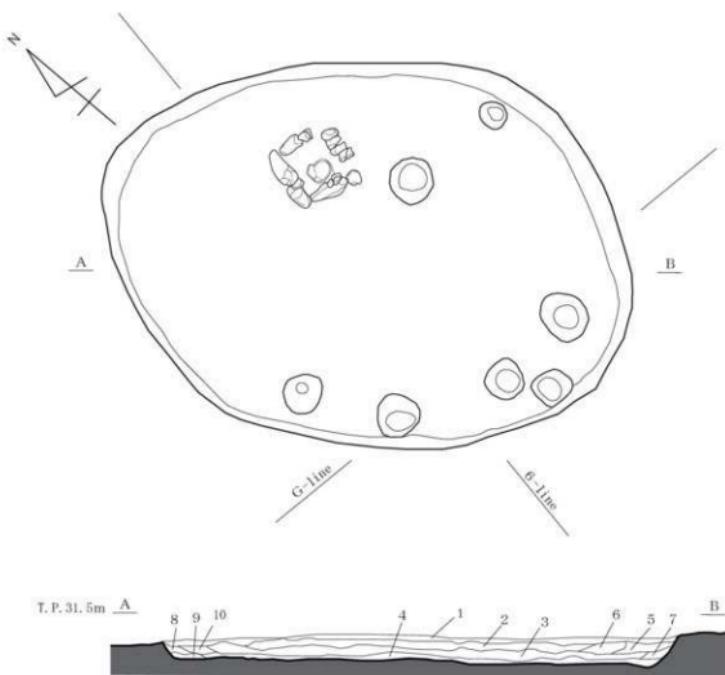
住居内からは炉体土器1点を含めて74点の繩文土器が出土した。しかし、炉体土器を除くといずれも破片であり、全形を復元できるものはなかった。また土器には時期差がある。土器型式に沿ってあげれば、夏島式、関山式、勝板式、曾利式、加曾利E式が認められる。

関山式の破片数が全体の約80%を占めているが、その破片はいずれも小さい。それに比べて加曾利E式土器の破片は比較的大きい。炉体土器が曾利式土器であることからも、この堅穴住居を加曾利E式期に位置付けることができると考える。石器については、石皿2点と黒曜石剥片41点が出土した。

出土した繩文土器のうち、炉体土器と比較的大きな破片を第11図、小さな破片を第12図に掲示した。

表6 Aa 1堅穴住居の出土繩文土器

型式	夏島	関山	勝板	曾利	加曾利E	不明	計
点数	3	59	1	1	7	3	74
%	4.1	79.7	1.4	1.4	9.5	4.1	100

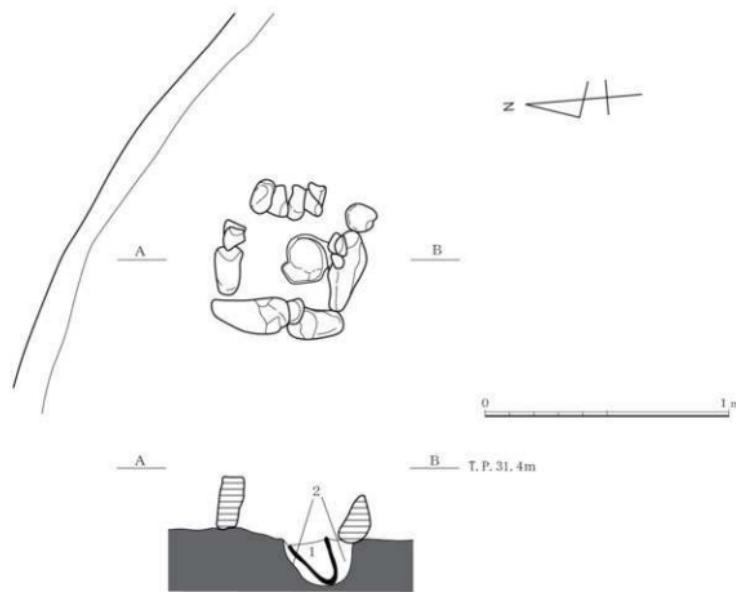


- 1 茶褐色土（暗味あり、ローム粒・スコリア粒若干含む、締まりやや欠く）
- 2 暗茶褐色土（粒径やや大きいスコリア粒若干含む、締まりやや欠く）
- 3 暗茶褐色土（スコリア粒多包、締まりやや欠く）
- 4 茶褐色土（ローム土含む、スコリア粒多包、締まりあり）
- 5 黒褐色土（やや茶色味あり、スコリア粒僅かに含む、締まりあり）
- 6 明黒褐色土（やや黄色味あり、スコリア粒若干含む、締まりあり）
- 7 明黒褐色土（スコリア粒若干・カーボン粒僅かに含む、締まりやや欠く）
- 8 暗茶褐色土（スコリア粒多包、締まりあり）
- 9 暗茶褐色土（暗味あり、スコリア粒・ローム土多包、締まりやや欠く）
- 10 明黒褐色土（スコリア粒若干含む、締まりあり）

0 2 m

第9図 Aa 1竪穴住居（平面、土層）

III 発掘調査の成果



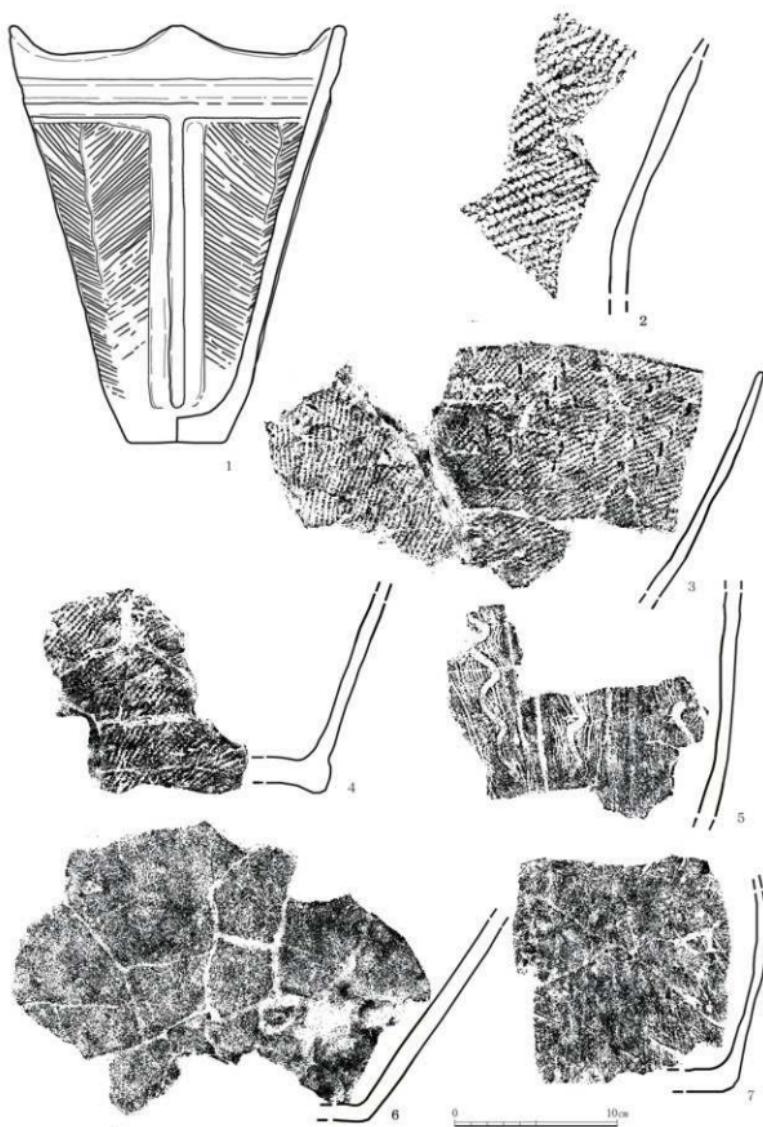
第10図 Aa 1整穴住居の炉（平面、断面、土層）



写真3 Aa 1整穴住居全景（南西から）

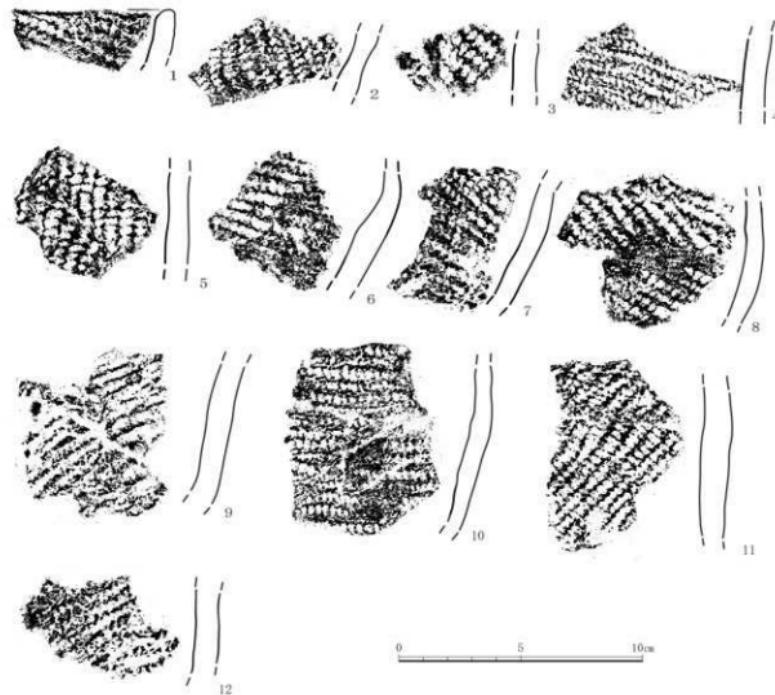


写真4 Aa 1整穴住居炉（西から）



第11図 Aa 1 竪穴住居出土縄文土器 (1)

III 発掘調査の成果



第12図 Aa 1 穫穴住居出土縄文土器 (2)

表7-1 Aa 1 穫穴住居出土縄文土器観察表

遺物番号	型式	特徴	胎土	色調
第11回	1 曾利	(外) 縞形状条縄文 (内) 研磨	砂粒多包	暗褐色
	2 関山	(外) 縄文L.R (内) 研磨	砂粒若干	橙褐色
	3 関山	(外) 縄文L.R (内) 研磨	砂粒少量	暗褐色
	4 関山	(外) 縄文L.R (内) 研磨	砂粒含む、長石	褐色
	5 加曾利E	(外) 縞位条縄文・蛇行沈縄文 (内) 摱過	砂粒含む、雲母	淡褐色
	6 加曾利E	(外) ナデ (捺過) (内) 摱過	砂粒含む、赤色粒子	淡褐色
	7 加曾利E	(外) 縞位条縄文 (内) 捺過	砂粒多包、雲母顆著	褐色

表 7-2 Aa 1 穴住居出土縄文土器観察表

遺物番号	型式	特徴	胎土	色調
第 12 回	1 開山	口縁部、(外) 縄文 (内) 研磨	砂粒若干	淡褐色
	2 開山	(外) 縄文 L.R. (内) 研磨	砂粒若干	棕褐色
	3 開山	(外) 縄文 R.L. (内) 研磨	砂粒多包	暗褐色
	4 開山	(外) 縄文 R.L. (内) 研磨	砂粒含む、長石・石英少量	褐色
	5 開山	(外) 縄文 R.L. (内) 研磨	砂粒多包、石英若干	黑褐色
	6 開山	(外) 縄文 L.R. (内) 研磨	砂粒若干、雲母少量	褐色
	7 開山	(外) 縄文 R.L. (内) 研磨	砂粒若干	棕褐色
	8 開山	(外) 縄文 R.L.、部分的に磨消し (内) 研磨	砂粒含む、長石・石英少量	黑褐色
	9 開山	(外) 縄文 L.R.、部分的に磨消し (内) 研磨	砂粒若干、雲母少量	黑褐色
	10 開山	(外) 縄文 R.L.、部分的に磨消し (内) 研磨	砂粒含む、石英少量	暗褐色
	11 開山	(外) 縄文 L.R. (内) 研磨	砂粒多包、長石若干	褐色
	12 開山	(外) 縄文、磨消し (内) 研磨	砂粒若干	淡棕褐色

(2) 地下蔵

Ab 1 地下蔵 Ab 1 は、後述する構造上の特徴から、構築し直した 2 基の地下蔵の痕跡だと考える。先行する地下蔵（地下蔵 I と仮称）が後出の地下蔵（地下蔵 II と仮称）に 4 分の 1 から半分程度切り崩されている。しかし残りの部分の遺存状況は比較的良好で、本来南北 2.1 m、東西 2.2 m 程度の規模であったことが窺える。地下蔵 II もほぼ同規模で、南北 2.4 m、東西は北東隅がやや張り出しているため北壁付近で 2.5 m、南壁で 2.3 m を測る。

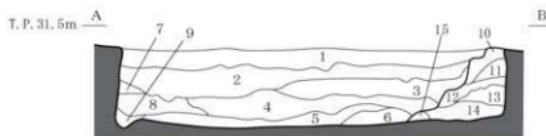
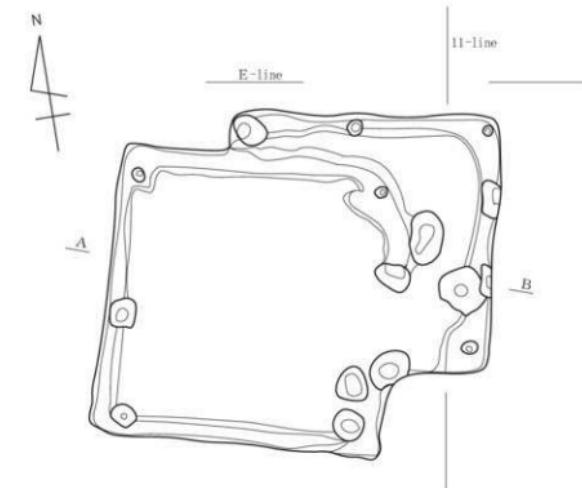
深さは 2 基ともに現状 0.6 m ほどで、壁面は垂直に立上っている。床面は平坦で、壁際に沿って幅 10cm、深さ 5 cm 程度の溝が巡るが、部分的に途切れている。

地下蔵 II では、4 隅に柱穴が認められる。その中で構内に位置する柱穴は、検出面が下がっているため掘方本来の形状より縮小している。

平面的には 2 基の地下蔵には前後関係が窺われたが、遺構内堆積土の状況にはそれが明確に表れていない。地下蔵 II ではローム土を僅かに含む暗黒褐色土（5 層）が床上を広く覆った後にローム土をさらに多く含んだ黒褐色土が堆積している。一方、地下蔵 I の堆積土のうち現存するのは 10 ~ 15 層である。本来はさらに上部まで埋まっていたが、地下蔵 II の構築により堆積土の多くが除去された。その後、地下蔵 II の崩壊により地下蔵 I の堆積土も崩落し、ローム層の壁面までの間が一体の落込みになったと考える。

この遺構について地下式土坑墓ではなく地下蔵と考える構造上の特徴が 2 点ある。第 1 点目は床面に

III 発掘調査の成果



- 1 黒褐色土（ローム粒若干含む、縮まり欠く）
- 2 黒褐色土（ローム粒含む、縮まりやや欠く）
- 3 黒褐色土（ローム粒含む、縮まりあり）
- 4 黒褐色土（茶色味あり、ローム土多包、縮まりあり）
- 5 暗茶褐色土（ローム土僅かに含む、縮まりあり）
- 6 暗黄褐色土（ローム土僅かに含む、縮まり欠く）
- 7 暗黒褐色土（ローム土若干含む、縮まりあり）
- 8 暗黄褐色土（ローム土僅かに含む、縮まりあり）
- 9 暗黒褐色土（ローム土僅かに含む、縮まり欠く）
- 10 黒褐色土（ローム粒若干含む、縮まりあり）
- 11 黒褐色土（茶色味あり、ローム粒含む、縮まりあり）
- 12 黒褐色土（ローム粒若干含む、縮まりあり）
- 13 黒褐色土（暗味あり、ローム粒僅かに含む、縮まりあり）
- 14 暗黒褐色土（ローム土僅かに含む、縮まりあり）
- 15 暗黄褐色土（黒褐色土若干含む、縮まりやや欠く）

0 2 m

第 13 図 Ab 1 地下蔵（平面、土層）

残る柱穴である。素掘りの掘方に天井を架構するための柱の可能性がひとつはあるが、いまひとつは室内の内壁に木板をわたすために壁際に打たれた柱であった可能性も考えられる。これに対して、この調査地点で検出された地下式土坑墓に柱穴や柱跡がみられるものはなかった。

第2点目は、地下蔵IIおよび地下蔵Iとともに共通して認められる、東壁中央付近の0.9m、半間ほどの間隔をもって設けられた1対の柱穴の存在である。これが梯子を固定するための構造だとすれば、堅坑が付設された4基の地下式土坑墓とは出入り方法が異なる。さらに、推定された梯子の位置から、地下蔵内へは東方向から入ったことになる。これに対して、Bc4地下式土坑墓を除く3基では南辺に開口部が設けられていた。この室内との出入り方向の違いは、単に向きが異なるというだけでなく、地下式土坑墓の南開口部は宗教的意識を背景にするが、地下蔵の東開口部は屋敷地内の位置と関わっているといえる。

堆積土内から土器42点、土師器皿4点、須恵器5点、縄文土器19点、陶器1点および瓦5点が出土した。縄文土器を除く土器類52点はいずれも復元困難できない小破片であるため、この地下蔵の時期を特定することはできないが、状況からは近世に比定できる。



写真5 Ab 1地下蔵全景（南から）



写真6 Ab 1地下蔵全景（西から）

(3) 火葬墓

Ba1火葬墓 火葬骨や焼土を片付けた掘方の規模は長径2.2m、短径1.4m、現状の深度は約0.4mを測る。平面形は東西方向に長軸をとる梢円形を呈する。掘方底は平坦に近いが、南東方向に若干下降している。

底面上に黒色土粒を含む(5・6層)、あるいは焼土粒を少量含む(4層)黒色土が20cmほど堆積し、その上に焼土の包含が顕著な1・3層が広がる。そのうちの3層には骨片や骨粉も含まれていた。焼土の平面的な広がりは、途切れることなく掘方西半を覆っているが、土層断面観察では断続的である。これは層厚に厚薄差があるためであるが、加えて2層により3層の一部が押圧されていることにも起因する。

焼土ブロックは掘方の西半に集中している。また北辺に平行して長さ40cm、幅10~20cmの炭化した板材が認められた。

出土遺物は銭貨2枚および土器、土師器皿、須恵器、縄文土器などの土器類の破片、そして鉄釘2点である。土器類は、ほとんどが器形や器種の判別ができない小破片であり、包含層から混入したものも

III 発掘調査の成果

表 8 Ba 1 火葬墓出土土師器皿観察表

第 22 図	法量	形状	調整	
			外面	内面
1	(口)9.4、(底)6.4、(高)2.2	口縁部にかけて僅かに外反	底部から胴部下半に回転ヘラナデ・ユビナデ、胴部上半以上回転ユビナデ	底部から口縁部にかけて回転ユビナデ、底部に静止ユビナデ加える
2	(口)9.4、(底)5.9、(高)2.6	胴部低く、口縁部にかけて直線的に外傾	底部から胴部下半に回転ヘラナデ・ユビナデ、胴部上半以上回転ユビナデ	底部から口縁部にかけて回転ユビナデ、底部に静止ユビナデ加える

(注) (口) 口径、(底) 底径、(高) 高さ

あるとみられる。ただし土師器皿の破片 5 点は炭化板材の南西付近からまとまって出土していて、意図的に廃棄された可能性が窺われる。鉄釘 2 点は炭化板材の北西端に接して出土したことから、板材を結合するためのものであったと考えられる。

銭貨 2 枚は焼土ブロック内から出土した。ともに燕寧元宝である。

出土遺物のうち土師器皿 2 点、鉄釘 2 点、銭貨 2 枚を掲示した (第 21・22 図)。土師器皿は法量および調整方法から、15 世紀後半から 16 世紀前葉に年代比定できる。

Ba 2 火葬墓 長径 1.1 m、短径 0.9 m、現状の深度は約 0.16 m を測る。平面形はほぼ北西—南東方向に長軸をとる梢円形を呈する。掘方底はやや丸味がある。

掘方底に明黒褐色土 (4 層) が 5 ~ 10cm 程度堆積した上に、骨片・骨粉を含んだ焼土主体の赤褐色土 (3 層) が広がる。層厚は、厚い部分でも 5 cm ほどしかない。しかし 3 層上面に沿って骨片が広がっていることから、上層からの削平が及んでいる可能性は低く、本来的に薄い焼土層であったとみられる。

人骨は破片化が進んでいるが、北東の下頸骨とみられる部分は比較的残りがよい。一方、南西の小破片となつた一群も頭骨の一部と推定されるが、これらは本来の形状を留めていない。

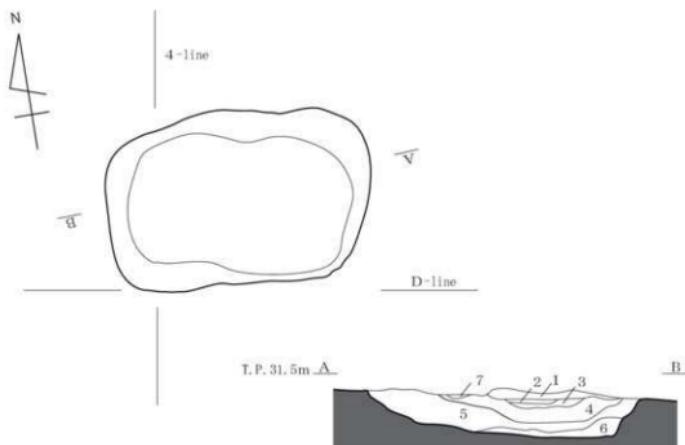
検出面で土器 3 点、炻器 1 点が出土した。いずれも図化ができない小破片であり、この火葬墓に本来伴つたか不明である。

Ba 3 火葬墓 掘方規模は長径 1.1 m、短径 0.8 m、現状の深さ 0.2 m ほどを測る。平面形は南北方向に長軸をとつた長円形である。底面は緩やかに湾曲する舟底形を呈している。炭化材も顯著に認

表 9 火葬墓出土銭貨

銭貨名	祥符元宝	天禧通宝	景祐元宝	燕寧元宝	元豐通宝	元祐通宝	政和通宝	洪武通宝	永樂通宝	宣德通宝	不明
国・王朝	北宋	明	明	明							
初鑄年	1009	1017	1034	1068	1078	1086	1111	1368	1408	1433	
Ba 1				1・2							
Ba 3											1・2・3

(注) 表中の番号は銭貨検出状況の番号と一致



- 1 黒褐色土（焼土含む、ローム土部分的に混入、縦まり欠く）
- 2 黒褐色土（焼土・炭化物含む、縦まり欠く）
- 3 赤褐色土（焼土主体、骨片・骨粉若干含む）
- 4 黒色土（焼土粒僅かに含む、縦まりあり）
- 5 黒色土（黒色土粒多包する、縦まりあり）
- 6 黒色土（黒味強い、黒色土粒若干含む、縦まりあり）
- 7 黒褐色土（ローム土含む、縦まり欠く）

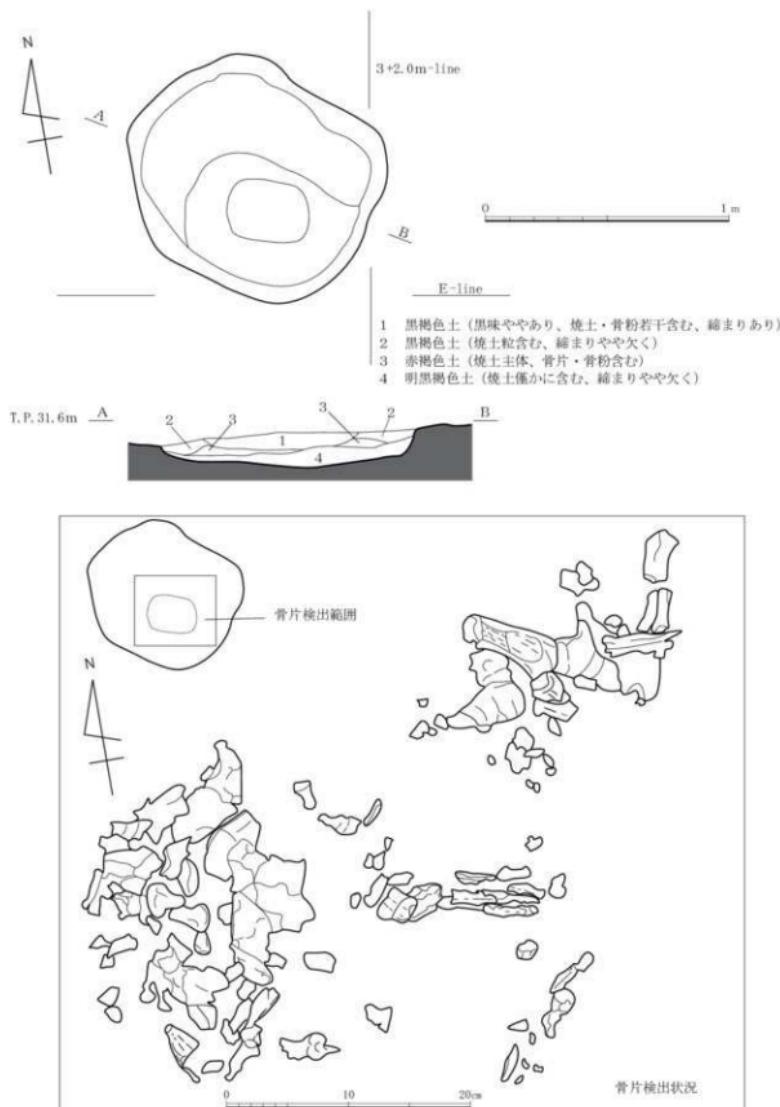


炭化物・焼土検出状況

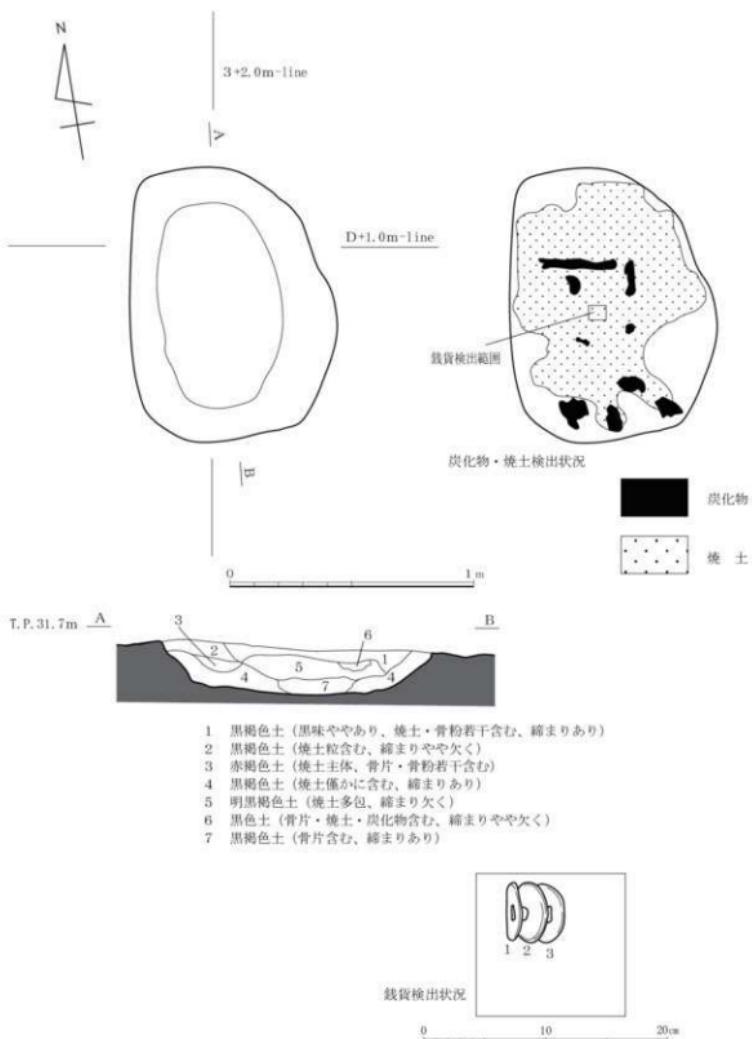
0 2m

第14図 Ba 1火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土検出状況）

III 発掘調査の成果

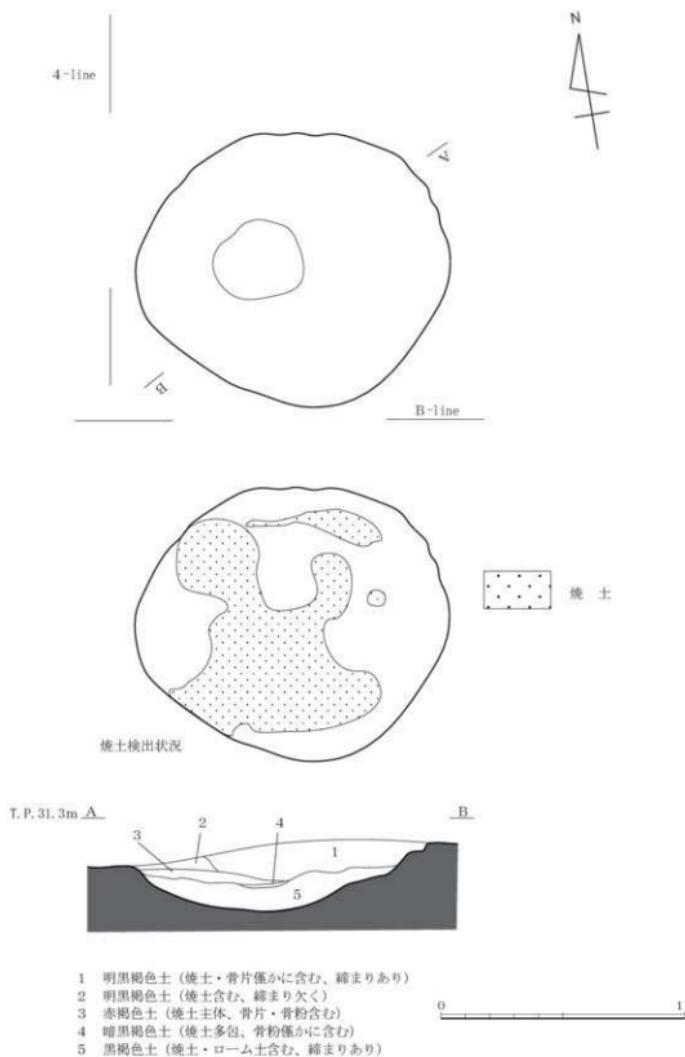


第 15 図 Ba 2 火葬墓（平面、土層、骨片検出状況）

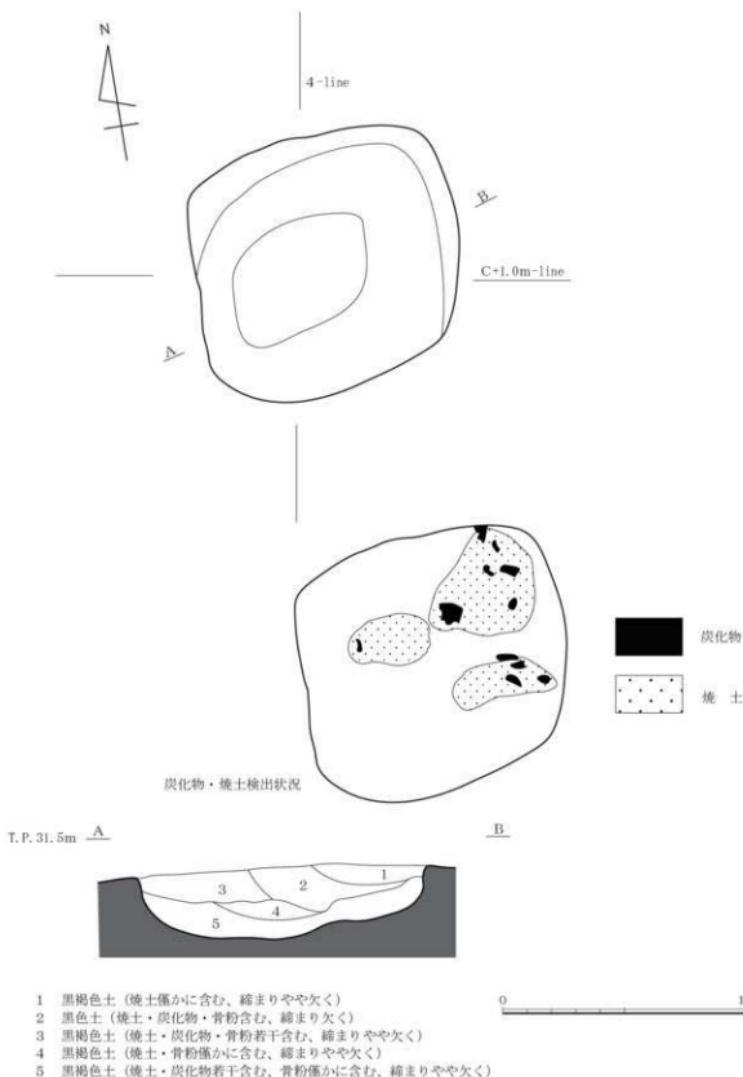


第 16 図 Ba 3 火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土・銭貨検出状況）

III 発掘調査の成果

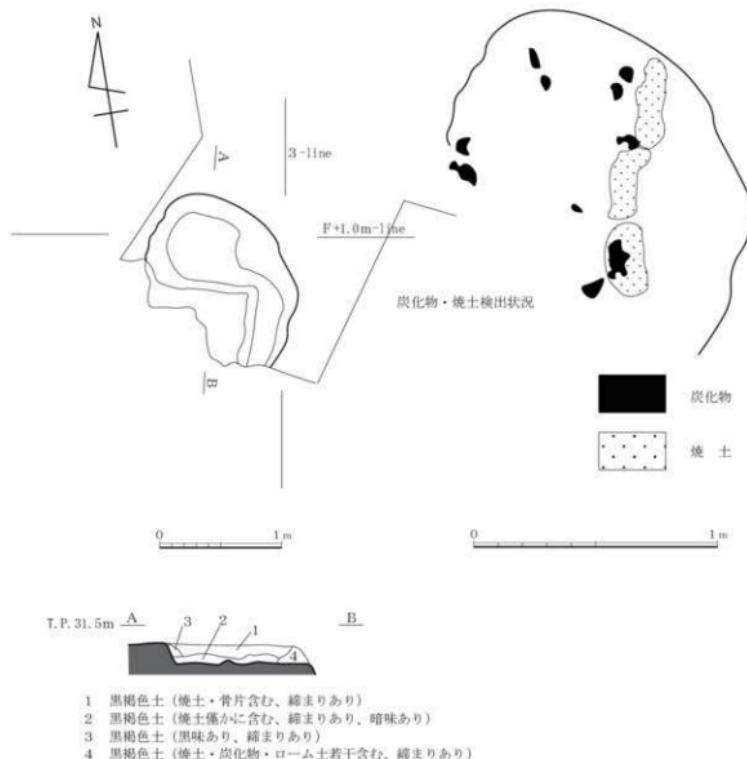


第 17 図 Ba 4 火葬墓（平面、土層、焼土検出状況）

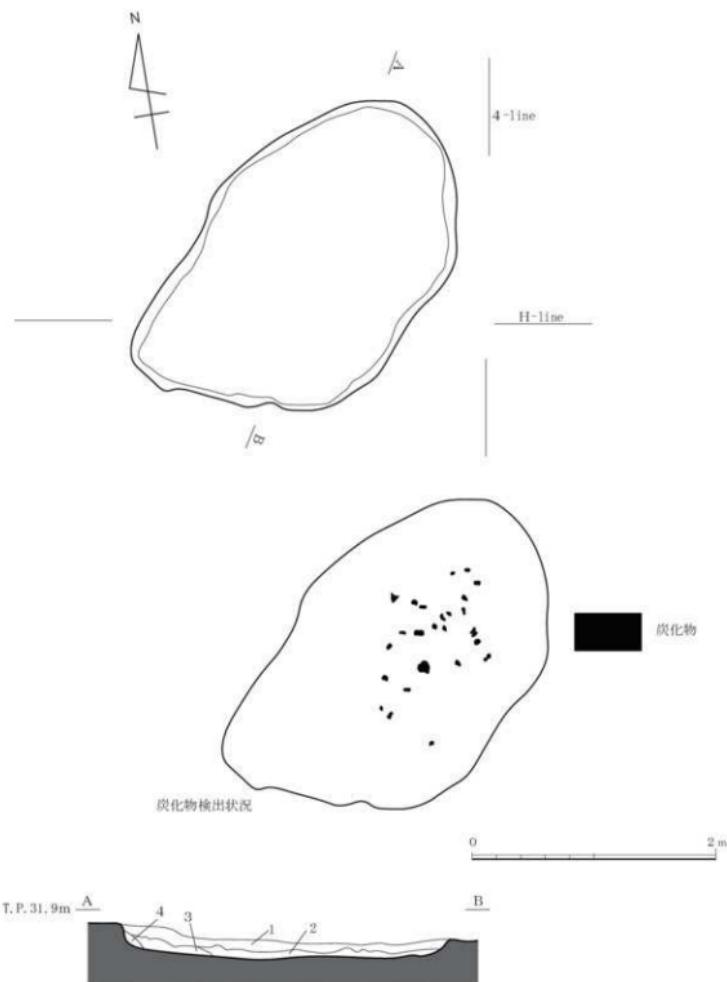


第18図 Ba 5火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土検出状況）

III 発掘調査の成果



第 19 図 Ba 6 火葬墓（平面、土層、炭化物・焼土検出状況）



- 1 暗茶褐色土（焼土・骨片若干含む、ローム土多包。締まりあり）
- 2 黒褐色土（ローム土若干含む。締まりあり）
- 3 黒褐色土（ローム土僅かに含む。締まりあり）
- 4 黒褐色土（ローム土多包。締まりやや欠く）

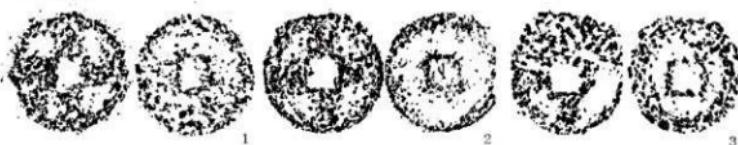
第20図 Ba 7火葬墓（平面、土層、炭化物検出状況）

III 発掘調査の成果

Ba 1 火葬墓



Ba 3 火葬墓



銭貨右下番号は各墓の検出状況図中番号と一致

0 5cm

第 21 図 火葬墓検出の銭貨



写真 7 Ba 1 火葬墓全景（北から）



写真 8 Ba 2 火葬墓全景（東から）



写真 9 Ba 2 火葬墓掘方全景（南西から）

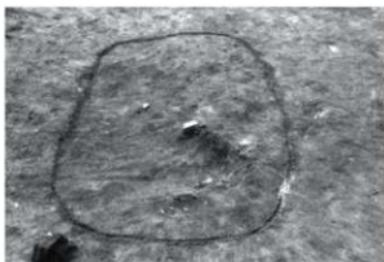


写真 10 Ba 3 火葬墓全景（北から）



写真11 Ba 4火葬墓全景（南から）



写真12 Ba 5火葬墓全景（南東から）

められた。

焼土は掘方のほぼ全域に広がっていて、骨片・骨粉も堆積土の上下いずれかに集中することはなく、焼土全体に含まれていた。

炭化物もまた広く分布しているが、掘方北寄りで炭化材が直交する状況がみられたことから、箱状の木製品の存在が推測される。しかもその南約20cmで銭貨が出土した。副納されたものとみられる。銭貨はすべて銹着していたが、3枚を数える。通し紐の痕跡はみられず、繩錢であったかは不明である。銹化が著しく、いずれの銭種も不明である。銭貨以外に土器の小破片1点が出土した。3枚の銭貨については第21図に掲示した。

Ba 4火葬墓 掘方規模は長径1.3m、短径1.1m、現状の深さ0.3mを測る。平面形は円形に近く、底面は丸味がある。

焼土主体の3層や焼土を多包する4層は、掘方直上に堆積する5層の上に形成されていた。3層の広がりは断続的であるが、焼土の存在は顕著である。焼土に比べると、炭化物や炭化材は少量であった。

人骨は主として3層上面で検出されたが、1層や4層に混じり込んだものもある。出土遺物は縄文土器1点だけであった。

Ba 5火葬墓 掘方規模は長径1.1m、短径1.0m、現状の深さ0.3mを測る。平面形は隅丸長方形に近い。底面は幾分丸味があり、壁面にかけて湾曲する。

5分層された堆積土の中では焼土が多い2層は、掘方底に堆積した4・5層の上に形成され、焼土・炭化物とともに骨片や骨粉も含まれていた。ただ、焼土や炭化物は層中よりも層上で顕著に確認できた。

2層上面に広がる焼土は掘方の北東寄りで3ブロックに分かれている。また長さ10cm近い炭化した板材が点在しているが、本来の形状は不明である。

出土遺物はなかった。

Ba 6火葬墓 Ba 6火葬墓は、土手状に掘り残した調査範囲際の南西隅付近に位置している。その掘り残した部分を拡張して大方の形状を捉えたが、南端は崖線にかかり、消失していた。現状規模は、北西-南東1.5m、北東-南西1.0m、深さは0.16mを測る。掘方底はほぼ平坦である。

掘方底上に2層、壁際に3層が堆積したのち、焼土と骨片を含んだ1層が形成される。この1層上面に炭化物、焼土が点在していた。骨片や炭化物にまとまりではなく、人骨本来の形状を捉えることができない。これらは2次的に動いているとみられる。

この火葬墓からも遺物の出土はなかった。

III 発掘調査の成果

Ba 7 火葬墓 挖方規模は長径 3.0 m、短径 2.0 m、現状の深さ 0.2 m ほどを測る。平面形は北東—南西方向に長軸をとるやや不整な長円形を呈する。掘方底はほぼ平坦である。

堆積土はローム土を多包する暗茶褐色土（1 層）とそれよりはローム土の混入が少ない黒褐色土（2 層）に大まかに分かれる。上層である暗茶褐色土には焼土と骨片が若干含まれ、その上面では炭化物の散在が認められた。他の 6 基の火葬墓に比べても焼土や炭化物が多いとはいえないが、規模の大きさからすると埋葬するだけでなく遺体を火葬する場でもあったのではないかと推測する。

縄文土器 5 点とともに土器 5 点、土師器皿 2 点および不明鉄製品 1 点が出土した。土器類はいずれも小破片であり、図示できない。

(4) 土葬墓

Bb 1 土葬墓 約 30cm 四方の範囲で頭骨が検出された。さらに 25cm 離れて銭貨 6 枚がまとまって出土した。頭骨と銭貨は、現状規模南北 1.0 m、東西 0.6 m、深さ 0.05 m の掘方を埋めた 1 層の上面で検出した。頭骨は掘方の北寄り、銭貨は南寄りに位置している。

頭骨は頸骨が外れて 5 cm ほどの隙間が生じている。上歯は並びが良好に残っているが、下歯は散乱している。遺体は掘方を埋めた暗茶褐色土（1 層）の上に仰向けで置かれた。頭骨上部に焼土の塊が認められるが、骨片は混じらない。また削平により掘方上面が本来よりも低くなっているとしても、頭骨の残存状況からみると、掘方は当初から浅く、さらに遺体安置後に盛土を行った可能性もある。

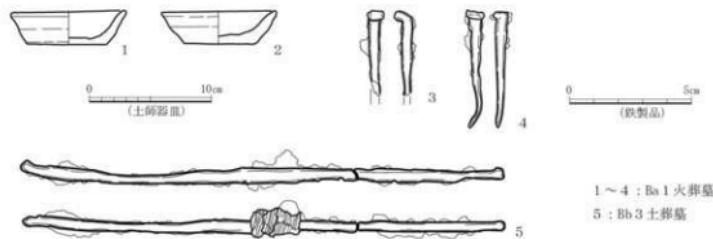
銭貨は東西 8 cm、南北 5 cm ほどの範囲にまとまっていた。5 枚は重なって検出されたことから、副納時には 6 枚とともに重ね置きされていたとみられる。

頭骨と銭貨との間には人骨はまったく認められなかった。さらに Bb 2 土葬墓や Bb 5 土葬墓でも類似する様相がみられた。これらの事例も含め、こうした在り方にあっては、やはり掘方内に 1 体分の遺体が埋葬されたのか、それとも部分的な部位のみを埋めたか検討を要する。

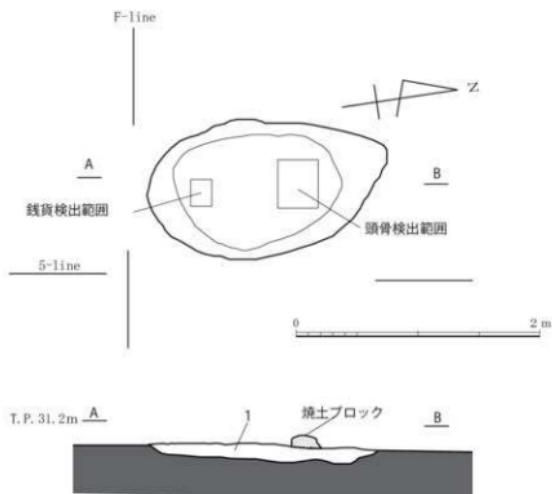
6 枚の銭貨の銭種について表 10 に示しているが、初鋳年が最も下るのは宣徳通宝の 1433 年であるので、この土葬墓は 15 世紀前葉より以降に形成時期が求められる。なお第 23 図の銭貨検出状況の取上げ番号と銭種との関係は、表 10 の注に示している（Bb 3・4 についても同じ）。

Bb 2 土葬墓 長径 0.6 m、短径 0.5 m、深さ 0.1 m ほどの現状掘方の南東寄り、1 辺 15 ~ 20 cm ほどの範囲で歯牙を中心とする頭骨部分が検出された。歯牙は若干散乱しているものの上下の関係が捉えられる部分もあることから、埋葬時の状況を比較的保っている。ただし歯牙を除くと、頭骨はほとんど残っていない。また頭骨上部に焼土ブロックが認められるが、骨片は混入していない。

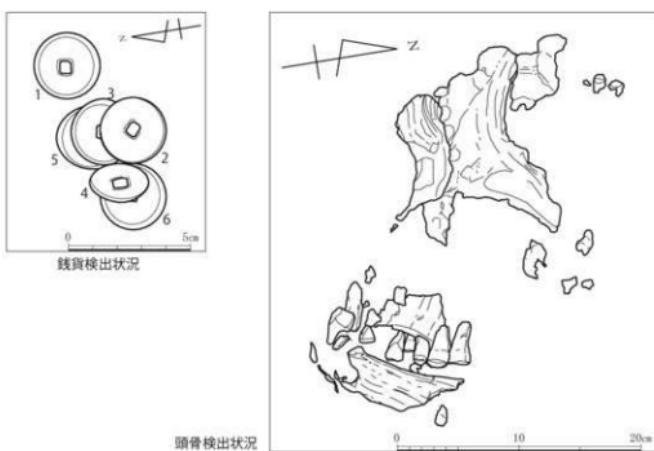
歯牙などの頭骨部分は掘方底を埋めた明茶褐色土の上面で検出された。遺構検出作業の開始と同時に



第 22 図 副納された土師器皿、鉄製品

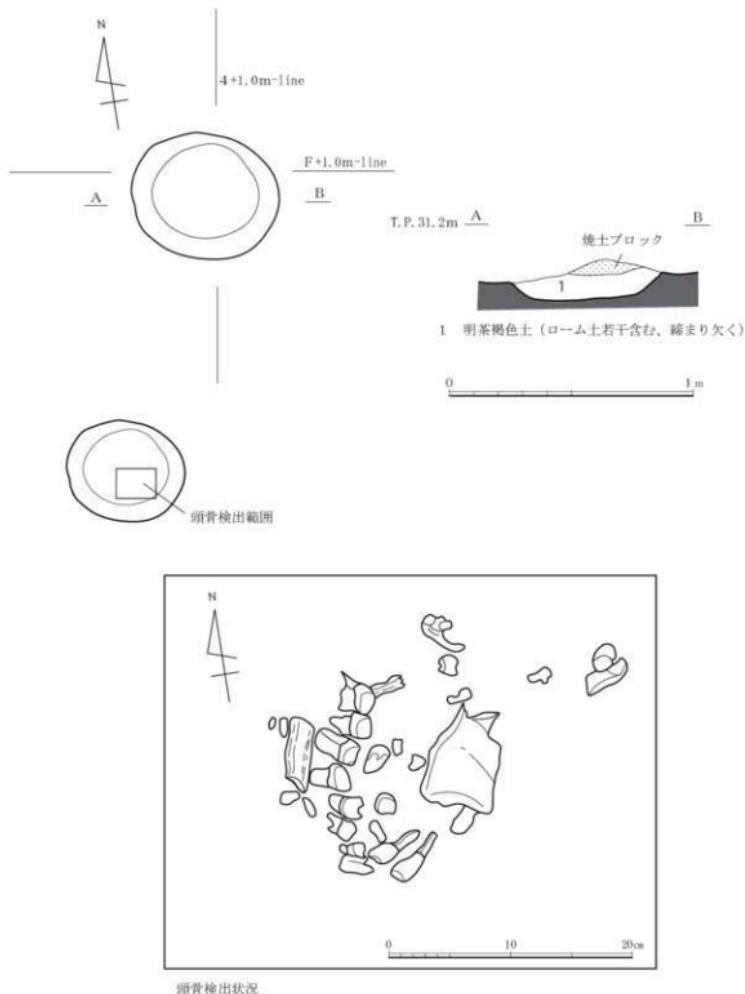


1 暗茶褐色土（部分的に明度あり。締まりやや欠く）



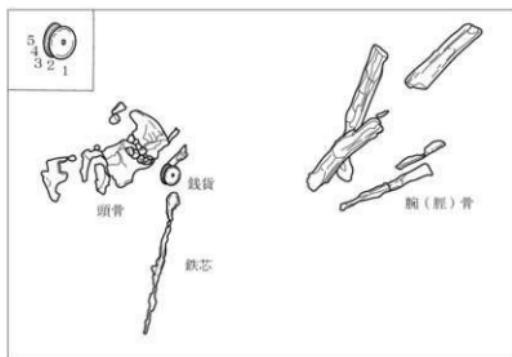
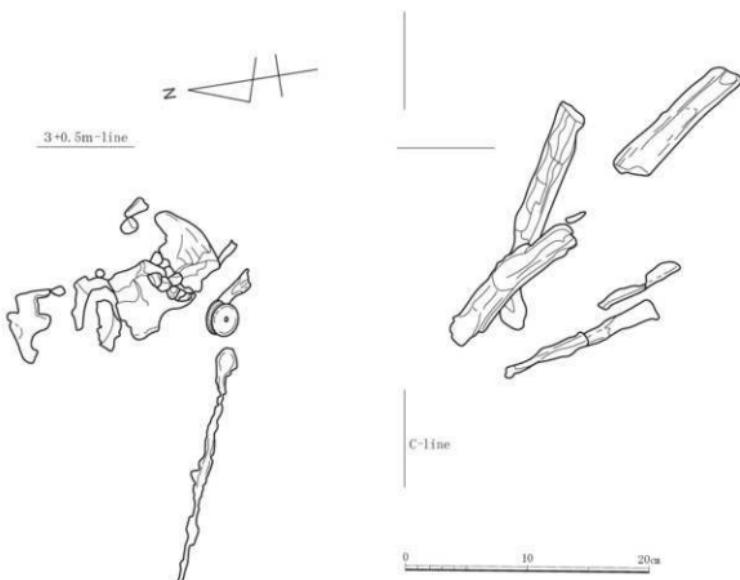
第23図 Bb 1土葬墓（平面、土層、頭骨・銭貨検出状況）

III 発掘調査の成果



第 24 図 Bb 2 土葬墓（平面、土層、頭骨検出状況）

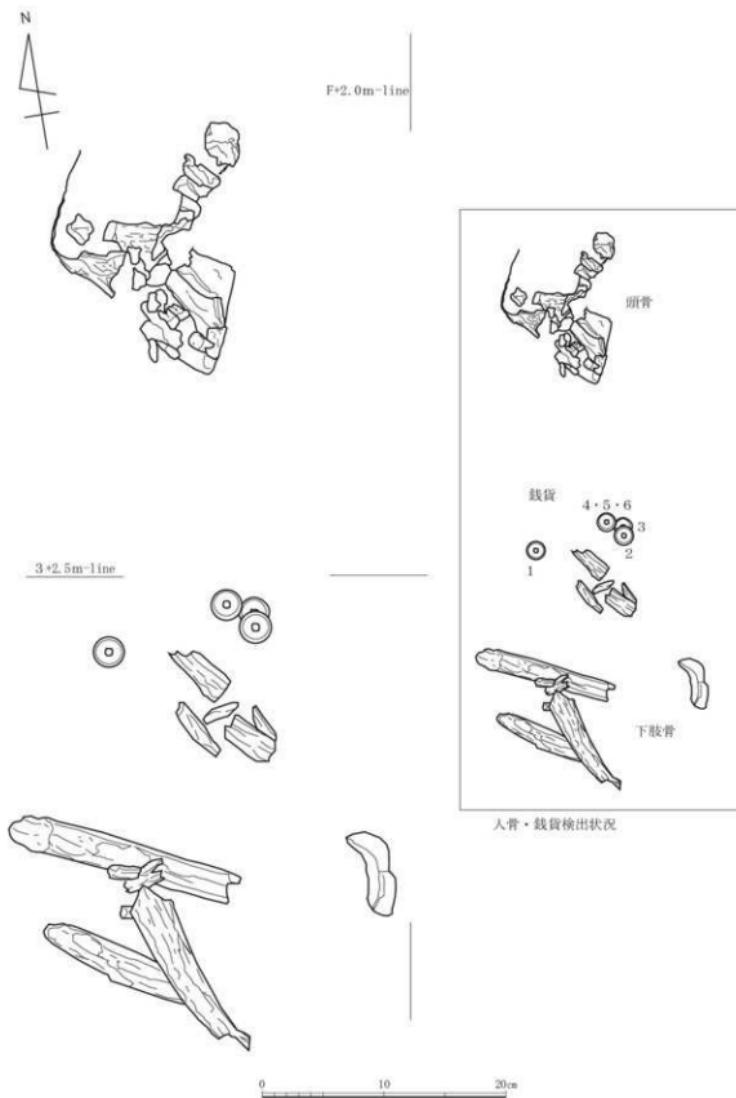
3. 検出した遺構・遺物



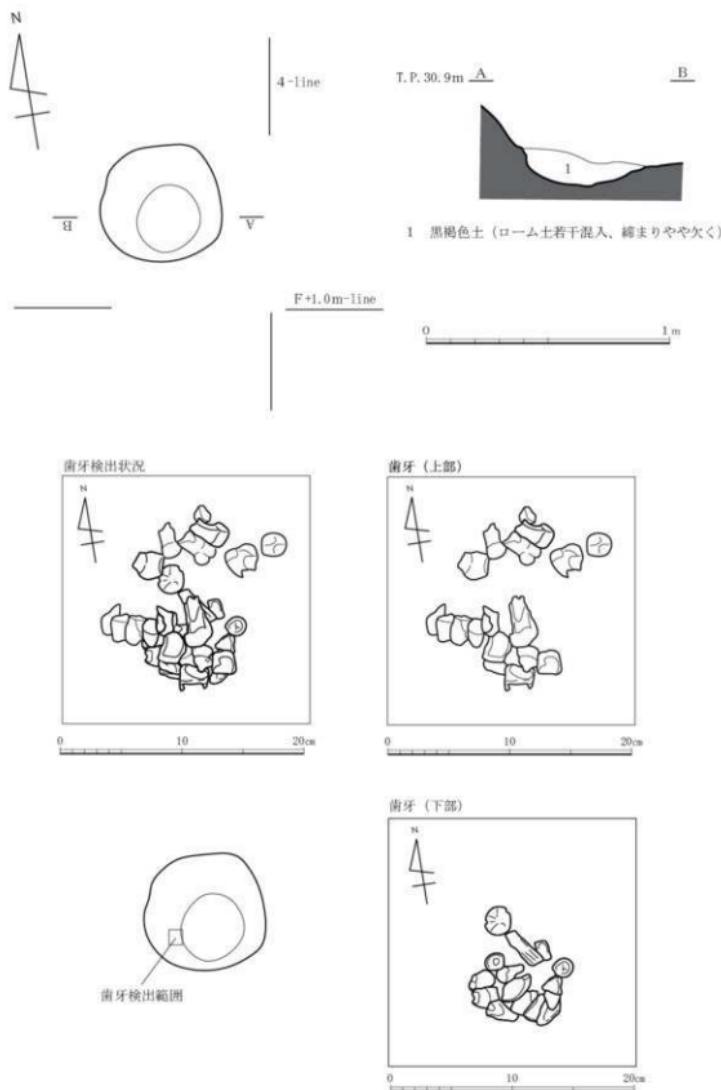
人骨・副納品検出状況

第25図 Bb 3土葬墓（平面、人骨・錢貨・鉄芯検出状況）

III 発掘調査の成果



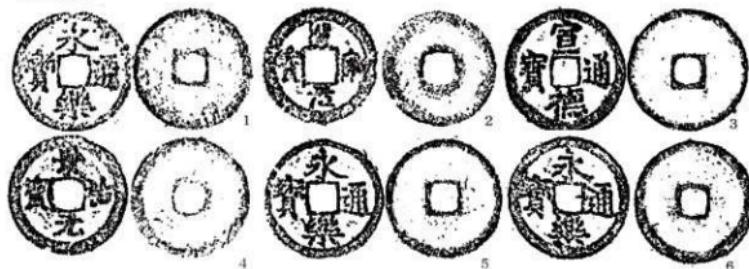
第26図 Bb 4土葬墓（平面、人骨・錢貨検出状況）



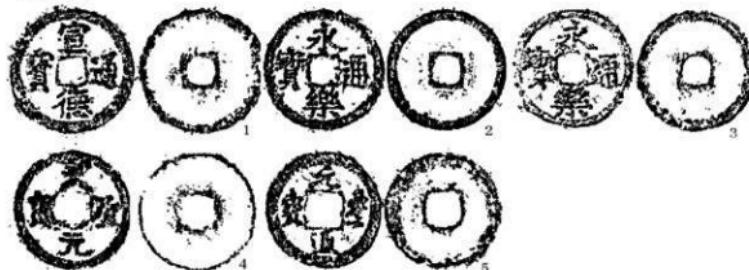
第27図 Bb 5土葬墓(平面、土層、歯牙検出状況)

III 発掘調査の成果

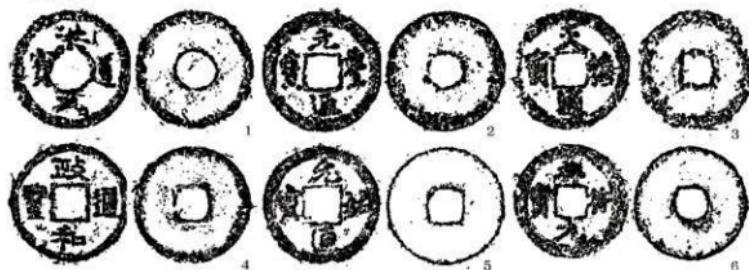
Bb 1 土葬墓



Bb 3 土葬墓



Bb 4 土葬墓



錢貨右下番号は各墓の検出状況図中番号と一致

0 5cm

第 28 図 土葬墓検出の錢貨

表 10 土葬墓出土銭貨

銭貨名	祥符元宝	天禧通宝	景祐元宝	熙寧元宝	元祐通宝	元祐通宝	政和通宝	洪武通宝	永樂通宝	宣德通宝	不明
国・王朝	北宋	明	明	明							
初鋳年	1009	1017	1034	1068	1078	1086	1111	1368	1408	1433	
Bb 1			4	2					1・5・6	3	
Bb 3				4	5				2・3	1	
Bb 4	6	3			2	5	4	1			

(注) 表中の番号は銭貨検出状況の番号と一致



写真 13 Bb 3 土葬墓全景 (東から)

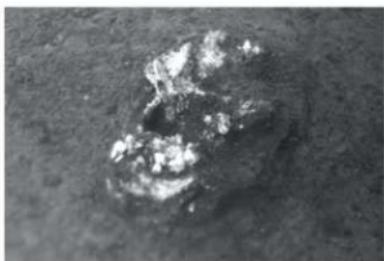


写真 14 Bb 1 土葬墓頭骨 (南東から)



写真 15 Bb 2 土葬墓頭骨 (南東から)



写真 16 Bb 4 土葬墓全景 (北西から)

歯牙が現れたことから、掘方上部が削平を受けているとしても、掘方は本来浅かったとみられる。

上歯3～4本、下歯8本を認め、北寄りで奥歯、南寄りで前歯が出土していることから、頭骨は北向きに傾いていたとみられる。このことから、横臥屈葬の可能性がひとつはある。しかし、歯牙と微細な頭骨片が遺存しているのに対して、大腿骨などは認められなかった。よって、頭骨のみが切り離されて埋葬された可能性がいまひとつとして浮上する。

III 発掘調査の成果

出土遺物はなかった。

Bb 3 土葬墓 頭骨と腕あるいは脛の部分と推定される骨、そして副納された銭貨5枚が南北0.7m、東西0.4mほどの範囲で検出された。頭骨は北寄りに置かれ、上顎骨および下顎骨が一部分ではあるが比較的の形状を保って遺存していて、歯牙の残りもよい。

頭骨から20cm南で、太めの骨3点ほかが認められた。その太さから脛骨の可能性が考えられるが、鑑定を受けていないので不確実である。ただ脛骨だとすれば、ひざを強く曲げた状態で埋葬されていたことになる。

このBb 3土葬墓では、遺構検出時に掘方を確認することができず、人骨取上後に改めて精査を行つたがやはり掘方を認識することはできなかつた。このことから、極めて浅い掘方の底に密着して遺体を納めた。旧地表面上に直接遺体を置き盛土を行つた、あるいはそれらの中間的な在り方など幾つかの可能性が考えられる。

銭貨5枚は重なつて出土した。紐の痕跡は確認できなかつたが、紐通しされていた可能性はある。銭貨の銭種について表10に示しているが、初鋳年が最も下るのはBb 1 土葬墓と同じく宣徳通宝の1433年であり、この土葬墓も15世紀前葉より後に形成時期が求められる。

さらに、銭貨の西脇で長さ19.6cm、直径0.2～0.4cmほどの細い棒状の鉄製品が出土した。「鉄芯」と仮称する。遺体と鉄芯は直交する向きに置かれていた。鉄芯の中央に木質が付着しているが、本来付随するものかは不明である。また片端(22-5の左端)が鉤状に屈曲しているように観察される。これに対して他端は僅かに肥厚しているようであるが、これは錆化によるためかも知れない。この鉄芯の実態は不明である。

Bb 4 土葬墓 頭骨および下肢骨とみられる太い骨、そして銭貨が南北80cm、東西40cmほどの範囲で検出された。この土葬墓も、Bb 3 土葬墓と同じく掘方を確認することができなかつた。

頭骨は検出範囲の北寄りに位置し、西に顔面を向けている。頭骨から約40cm南に離れて下肢骨とみられる3本の太い骨が認められる。遺体の中軸に対して直交あるいは斜交することから、横座あるいは胡坐状態で埋葬されたとみられる。

頭骨と下肢骨との中間位置で銭貨6枚を検出した。1枚だけが約10cm西に離れているが、残り5枚はまとまり、そのうち3枚(4・5・6)は重なつてゐた。これらの銭貨は、出土位置から、遺体の胸部付近に置かれていたと推定される。

頭骨の遺存状態は比較的良好で、特に下顎骨の残りがよい。また後頭部付近の骨は土壌化しているものの、前頭部にかけて本来の輪郭を捉えことができる。

銭貨の銭種について表10に示しているが、6枚の中で初鋳年が最も下るのは洪武通宝の1368年である。しかしながら古い初鋳年の銭貨が含まれていることから、洪武通宝もまたこの土葬墓の形成時期を示すとは限らない。検出の状況からすると、Bb 1 土葬墓やBb 3 土葬墓と同じく15世紀前葉以降の形成とみられる。

Bb 5 土葬墓 約8cm四方の範囲から上下の歯牙が出土した。上歯は若干動いているが、下歯は比較的揃つていて本来の形状を留めている。しかし歯牙を除くと、人骨はほとんど確認できなかつた。

この歯牙は、南北0.5m、東西0.5m、深さ0.1mほどの掘方に堆積した黒褐色土上面の西に寄つた位置で出土した。Bb 2 土葬墓と同じく、上面が削平されているとしても、1体の遺体を埋納するには掘方規模は小さい。

出土遺物はなかった。

(5) 地下式土坑墓

Bc 1 地下式土坑墓 主室が調査区外に位置しているため、開口部以下の堅坑を約 1.2 m の深さまで掘り下げたに留まった。したがって主室の規模や構造については不明である。

開口部が北西—南東方向に横軸をとっていることから、主室の主軸も斜方位にあるとみられる。開口部の横幅は約 2.6 m を測る。また開口部上辺は、現状方形を呈していて、堅坑はそのやや西寄りに設けられている。

検出面下 1.2 m までの堅坑内の堆積土を確認した。開口部の肩から中央に向かう流入土は、中央付近の水平堆積（3・4・5 層）と互層をなしていることから、一定の堆積時間があったと推定される。堆積土は主にローム土を含んだ茶褐色系土である。なお最上部に堆積した茶褐色土（1 層）には宝永期のものとみられる火山灰が含まれていた。この 1 層を開口部の最終堆積層とみるのか、あるいは宝永期の前後に形成された遺構が重なっているとするか検討を要するが、極めて部分的な存在であり、堅坑内には火山灰を含む堆積土がみられないことから後者であった可能性が高い。

開口部から 1.2 m 下までの堅坑の一部分を調査しただけであったが、この地下式土坑墓からは比較的多くの遺物が出土した。いずれも破片ではあるが土器 20 点、土師器皿 2 点、繩文土器 2 点、合計 24 点の土器類を認めた。しかしだ半は小破片であり、この地下式土坑墓の構築時期を決める根拠とするには難しい。

Bc 2 地下式土坑墓 天井部の一部を欠失しているが、主室はほぼ本来の形状を留めている。一方、上面の削平が天井部にまで及んでいることから、堅坑のほとんどが消滅しているとみられる。後述する **Bc 3 地下式土坑墓** と同様の長い堅坑が付設されていたとすれば、この付近では 3 m 近く削平を受けたことになるが、むしろ、この地下式土坑墓の堅坑は短かったと考えておく。

開口部は主室の南辺に付設されているが、上述したように上面の削平が影響しているため、検出されたのは堅坑下部の一部分だけであった。

主室は主軸をほぼ北—南方向にとり、床面規模は南北方向の長軸が 1.9 m、短軸が 1.6 m を測り、平面形は隅丸長方形を呈している。堅坑が付く南壁を除いた 3 壁に沿って、幅 10cm、深さ 5 cm ほどの溝が巡っている。床面は北方向に僅かに下降していく、南北で約 16cm の高低差がある。

入口部が付く南壁は比較的垂直に立上っているが、東西両壁は丸く内湾して立上り、奥壁は外傾が顕著である。天井部はドーム状で、床面から最大 1.4 m の高さがある。

出土遺物は、土器 2 点と陶器 1 点であった。ともに復元図化できない小破片である。

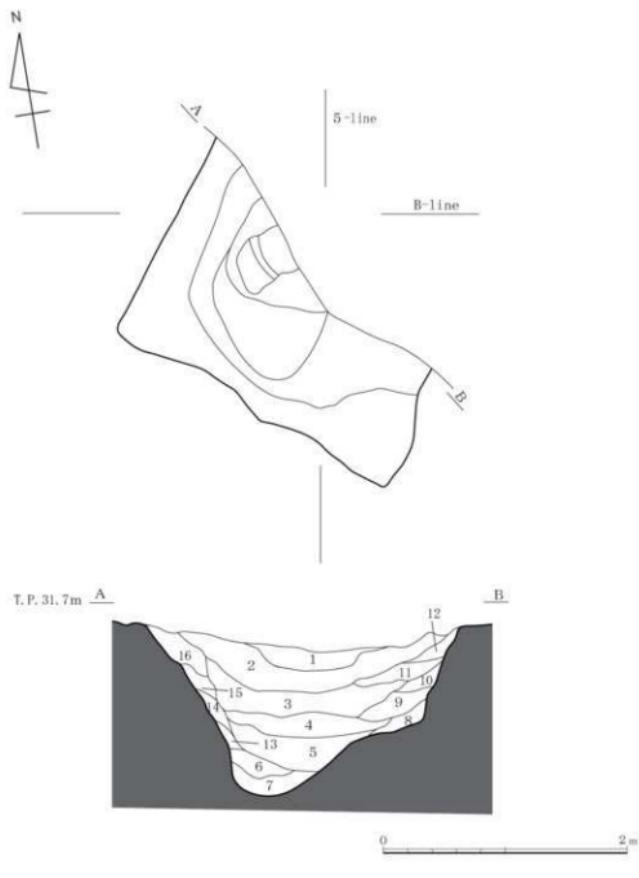
Bc 3 地下式土坑墓 開口部から堅坑、そして主室に至るまで、地下式土坑墓の全体形状が極めて良好に遺存している。南に開口部を設けた主室は正方位に軸をとり、縦長 2.6 m、横幅 3.0 m を測る。平面形状はほぼ正方形を呈している。床面の壁際には幅 10cm、深さ 5 cm ほどの浅い溝が全周する。

西壁は僅かに外傾するが、他の 3 面はほぼ垂直に立上る。天井部は緩やかなドーム状を呈している。床面から天井部までの高さは壁際で 1.7 ~ 1.8 m、最も高い中央付近で 2.0 m を測る。

主室入口は検出面下およそ 4.0 m を測る。堅坑は 2.8 m まで素掘りのままであるが、それ以下にはステップが 3 段設けられている。開口部は南北 1.5 m、東西 1.4 m で、平面方形を呈する。この開口部付近では、堅坑は若干広くなる。

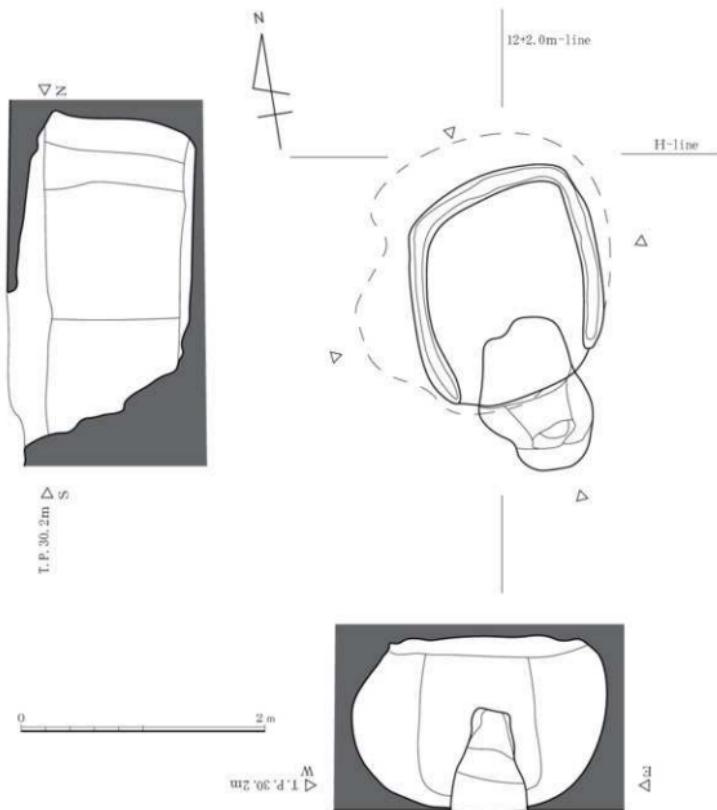
主室はローム層中に設けられていて、4 壁面や天井部にはローム層掘削時の工作痕が明瞭に残っている。また西壁には、幅 30cm、奥行 10cm ほどの掘り込みがある。灯明具を置くための棚かも知れないが、煤の付着などは確認されなかった。

III 発掘調査の成果



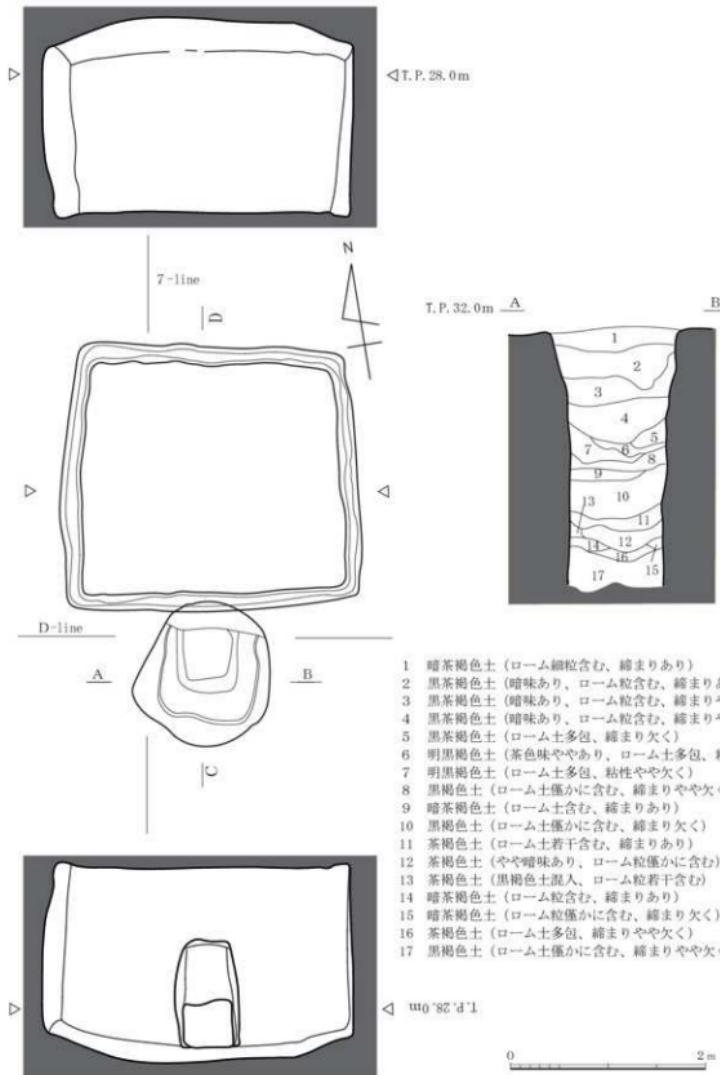
- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| 1 茶褐色土（火山灰含む、ローム土若干含む、締まり欠く） | 9 暗茶褐色土（ローム土多包、締まりあり） |
| 2 灰黒色土（火山灰僅かに含む、締まり欠く） | 10 暗茶褐色土（ローム土僅かに含む、締まりあり） |
| 3 茶褐色土（ローム土若干含む、締まりやや欠く） | 11 暗茶褐色土（暗味あり、ローム土僅かに含む、締まりあり） |
| 4 暗茶褐色土（ローム土若干含む、締まりあり） | 12 暗茶褐色土（暗味あり、堅固） |
| 5 暗茶褐色土（ローム土含む、締まりあり） | 13 黒褐色土（ローム土若干含む、締まりやや欠く） |
| 6 茶褐色土（ローム土多包、締まりやや欠く） | 14 暗茶褐色土（ローム土含む、締まり欠く） |
| 7 明茶褐色土（ローム土多包、締まり欠く） | 15 暗茶褐色土（ローム土僅かに含む、締まりあり） |
| 8 茶褐色土（ローム土若干含む、締まりあり） | 16 茶褐色土（ローム土僅かに含む、締まりあり） |

第29図 Bc 1 地下式土坑墓（平面、土層）

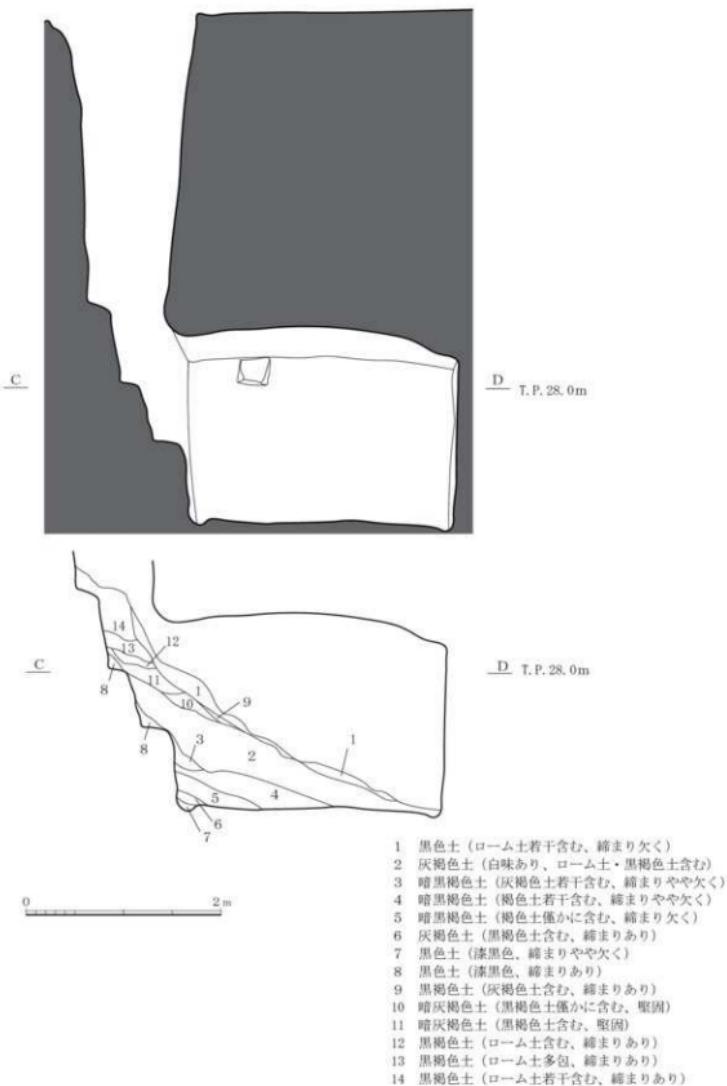


第30図 Bc 2 地下式土坑墓（平面、土層）

III 発掘調査の成果

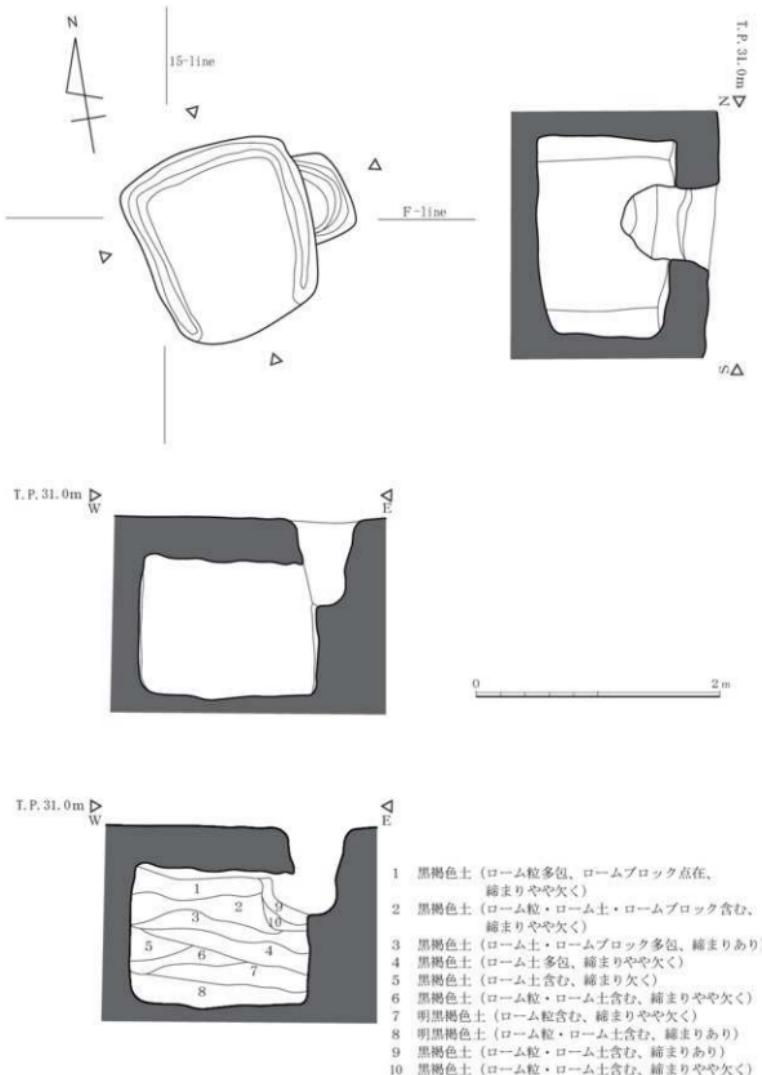


第31図 Bc 3 地下式土坑墓（平面、断面、土層）



第32図 Bc 3 地下式土坑墓（断面、土層）

III 発掘調査の成果



第33図 Bc 4 地下式土坑墓（平面、断面、土層）



写真17 Bc 2 地下式土坑墓主室内（南から）



写真18 Bc 3 地下式土坑墓開口部（南から）



写真19 Bc 3 地下式土坑墓主室内堆積土（東から）



写真20 Bc 3 地下式土坑墓主室内（南から）

開口部から主室入口にかけては堆積土により完全に埋まっていたが、主室では入口からの流入土が傾斜堆積している。ただ、奥壁付近では流入土はほとんどみられない。堆積土は堅坑で17層、堅坑下部の階段付近から主室にかけては14層に分かれる。堅坑流入土は主にローム土を含んだ黒褐色系土、主室流入土は黒褐色土を含む灰褐色土と褐色土を含む黒褐色系土である。

遺存状況のよさに比べて出土遺物量は少なく、土器5点、土師器皿1点および陶器と瓦の破片各1点である。土器のうち時期が判明するのは古墳時代前葉のもので、その他の遺物もこの地下式土坑墓の構築時期を決める根拠とはなり得ない。

Bc 4 地下式土坑墓 上部が削平され、本来の開口部および堅坑の一部を欠失しているとみられるが、主室は当初の形状を留めている。この地下式土坑墓で留意されるのは堅坑の位置である。Bc 1～Bc 3 地下式土坑墓の3基は、いずれも南壁に堅坑を付設していた。これに対してこのBc 4では東壁に堅坑を設けている。東壁に開口部がある遺構としてはAb 1 地下蔵がある。そのことからBc 4 もまた地下蔵として捉えるべきとの見方もあり得る。しかしAb 1 地下蔵でみられた柱穴がBc 4 では認められない。さらにAb 1 地下蔵に比べて規模が小さく、その点でBc 2 地下式土坑墓に近い。こうしたことから、開口部の位置に課題を残すが、地下式土坑墓として捉えた。

東壁に堅坑を付設するが、主室は南北方向にやや長く、南北1.6m、東西1.4mを測る。床面の壁際には幅10～20cm、深さ5cmほどの溝が南壁を除く3面に巡っている。主室の高さは1.1mを測る。各壁面は垂直に立上り、天井部はほぼ水平である。堅坑の深度は現状0.7mを測り、途中で段がみられ

III 発掘調査の成果

るが階段状にはならない。天井部上には現状 35cm の厚さでローム層が残っている。

主室内の大部分が流入土で埋まっていた。堆積土は 10 層に分かれ。床面上にローム土・ローム粒を含む明黒褐色土（7・8 層）が 30～40cm 堆積し、その上から天井部近くまで黒褐色土（1～6 層）で埋まっている。黒褐色土には明黒褐色土よりもローム土・ローム粒が多く、また全体的に締まりに乏しい。堅坑下部にも黒褐色土（9・10 層）が認められるが、状況から 2 次堆積の可能性がある。

出土遺物はなかった。そのためこの地下式土坑墓の時期を比定することは難しいが、状況からは他の 3 基も含め中世と推定される。ただ、開口部の方向が異なる点を肯定的に評価すれば、この Bc 4 地下式土坑墓のみは近世に属する可能性も否定できない。

（6）古墳

Bd 1 古墳 調査地点北西の調査範囲外に「灯塚」（かがりづか）と呼ばれている墳丘状の高まりが存在する。高塚古墳、あるいは中世の塚であるとの推測もなされているが、実態は不明である。この灯塚は調査範囲外に位置しているものの隣接していて、墳丘裾が調査地点内に延びていることが判明したことから、調査地点内から写真測量を行い、墳丘図を作成した。

なお後述するように、墳丘出土土に含まれていた土器は、古墳時代初頭よりも遡る可能性があることから、「古墳」とするより「墳丘墓」と捉えるのが適切かも知れない。しかし本書では、第 2 節で記したように、遺構名を「Bd 1 古墳」と統一的に表記する。

灯塚の現状 灯塚の現状は、ほぼ南北方向に主軸をとった長方形に近い平面形状を呈しているが、北方向に緩やかに延びているようにもみえる。現状規模は、長径 12m、短径 9m、高さ 3m を測る。頂部は南北 4m、東西 3m ほどの平坦面になっていて、祠が設けられていた。

盛土部分が調査範囲外に位置しているため、その表面観察や転落物の確認などは行わなかった。一方調査範囲内においては、灯塚の南に 2 本の土層観察用ベルトを設定し、墳丘構築土などの確認を行った。また周辺一帯から出土する遺物に関して、灯塚に帰属する可能性の高いものの抽出に努めた。

土層観察 A-B ライン 2 本の土層観察ベルトのうち A-B ラインでは、ベルト北東端から 2.4 m 付近で III b 層を切り込んで比高差 0.8 m の急傾法面が形成されている。しかもその下端には幅 0.2 m、深さ 0.1 m ほどの溝状の窪みが認められ、法面下端を強調している。こうしたことから、この法面下端が灯塚の本来の裾に該当すると考えられる。一方、法面の上部では既述したように包含層である III b 層を切り込んでいるので、III b 層は墳丘下に取り込まれていたといえる。

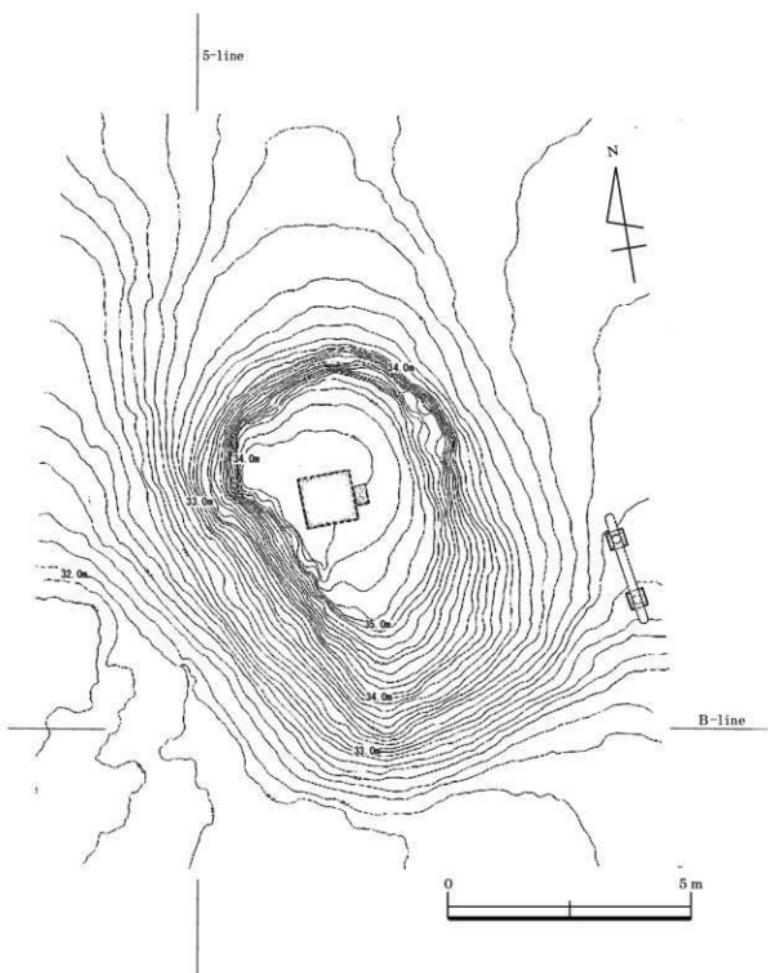
III b 層の上には旧耕作土である II a 層が覆っているので、調査範囲内にあっては墳丘構築土の遺存はなかったと理解する。

法面下端から南西方向にかけては、基盤層上面は緩やかに下降しつつもほぼ平坦に整えられている。また法面を肩にして堆積する 1～7 層は、崩落した灯塚の墳丘構築土の 2 次堆積である。

土層観察 C-D ライン C-D ラインでは、ベルト北東端から不整な基盤層の下降状況が認められ、2.0 m 付近で傾斜角度が変化し、その先では基盤層上面は平坦になる。こうした状況から傾斜角変換点が墳丘裾に当るとみられる。また C-D ラインで観察された堆積土はいずれも灯塚から流出した墳丘構築土の 2 次堆積と考えられる。

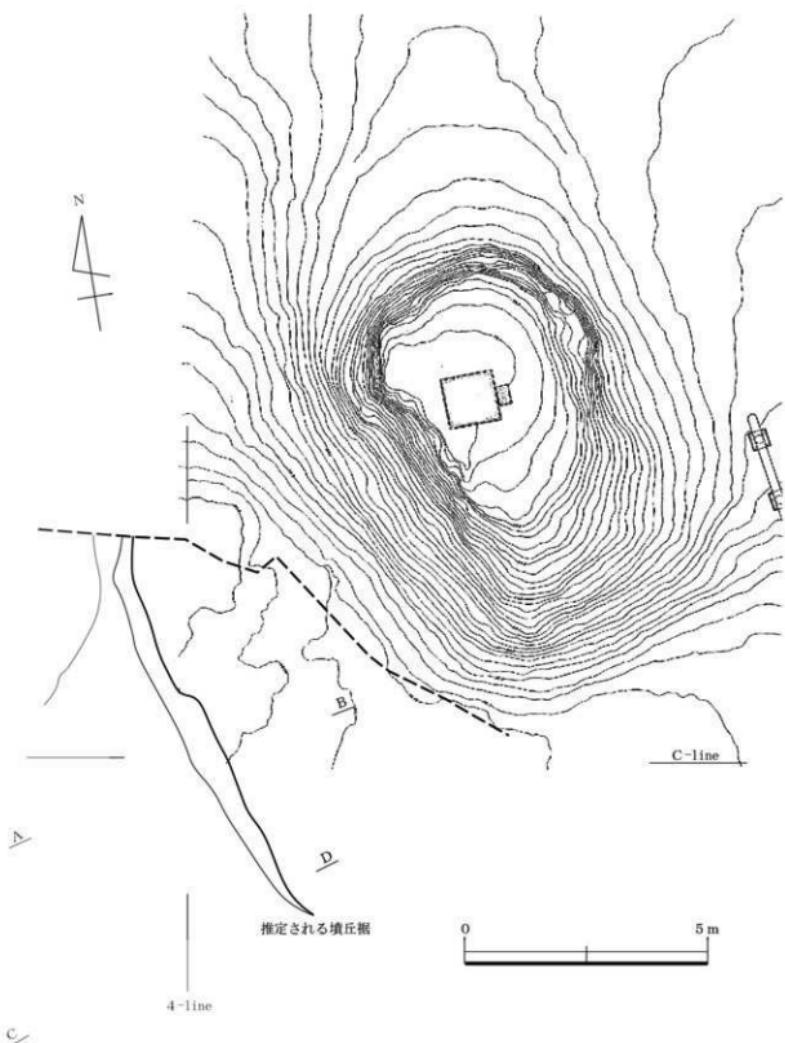
墳丘裾 2 本の土層観察ベルトで確認された墳丘裾は平面的に捉えることができた。灯塚の西辺に平行するように南北方向に基盤層が直線的に切り落とされている。ただし、南は次第に比高差を減じて基盤層と同化する。また北方向は調査範囲外に延び出している。確認できる裾部の距離は 8.5 m である。現状の墳丘頂部中心から裾部まで約 9 m を測る。

推定形状・規模 写真測量による墳丘図と発掘調査の成果から、灯塚の墳丘形状・規模について推定する。

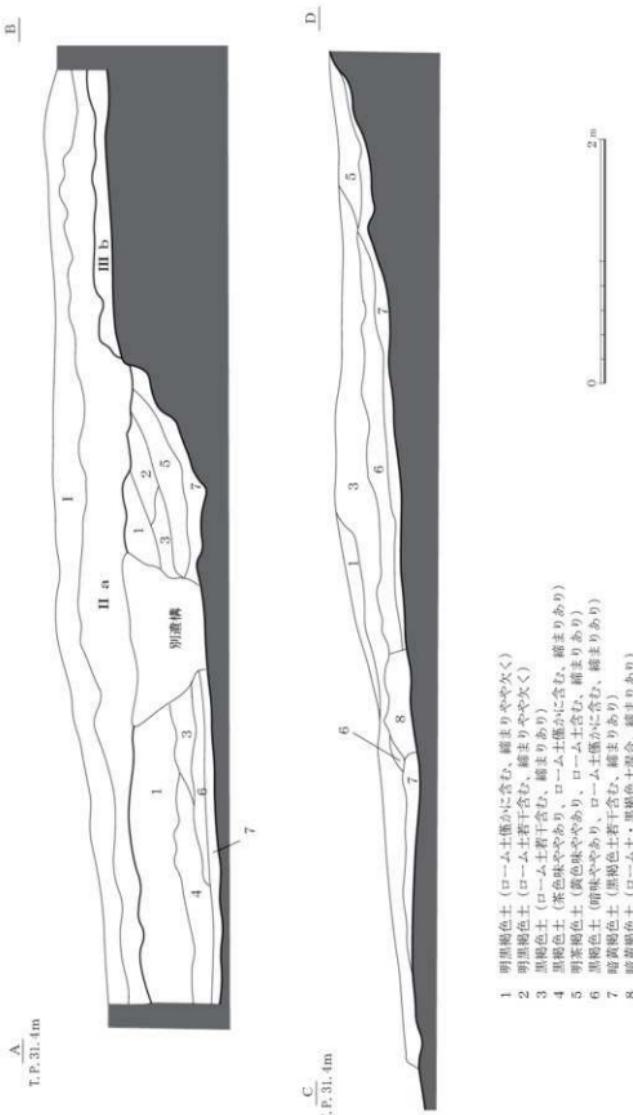


第34図 灯塚墳丘（写真測量図）

III 発掘調査の成果

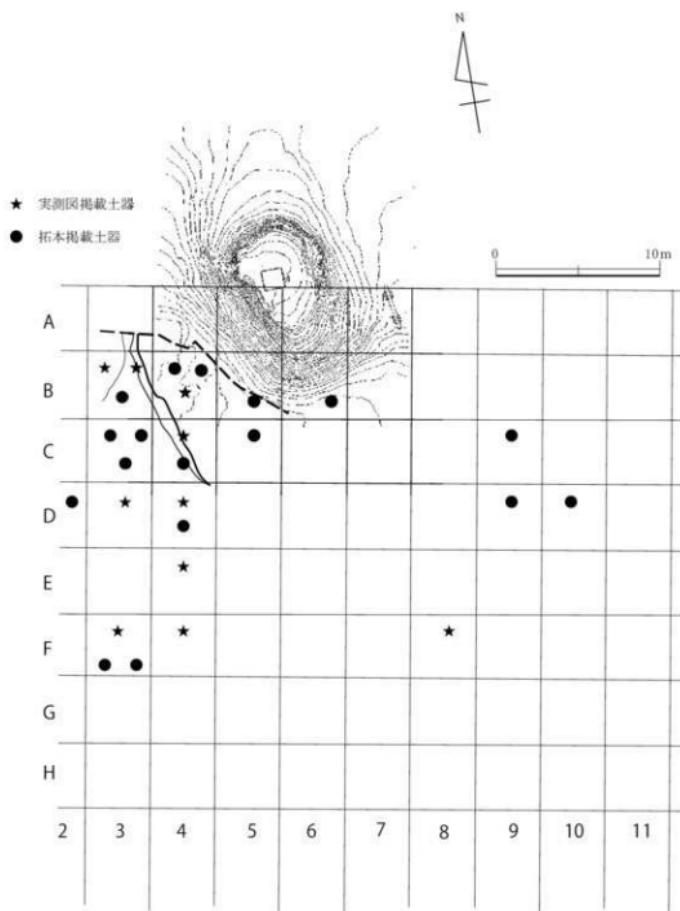


第35図 灯塚墳丘標



第36図 灯塚周辺の堆積土状況

III 発掘調査の成果



第37図 灯塚周辺の土器出土状況

墳丘測量図をみると、北を除く3方向では比較的直線的に等高線が延びている。後出的な改変による可能性もあるが、発掘調査により検出した墳丘裾と等高線が平行している状況を踏まえれば、等高線は灯塚の墳丘本来の状態を反映しているとみることができる。

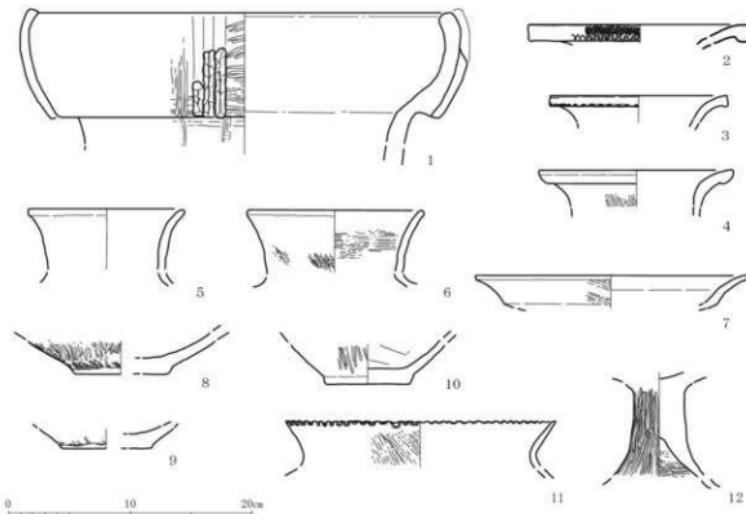
とすれば、北を除く3方向で等高線が直線的に延びていることから、墳丘の3辺もまた直線であったと考えられる。これに対して北辺では、上述したように等高線がさらに北方向に緩やかに張り出す。墳丘の崩れによる可能性とともに、テラス状の付設部が存在したとの見方ができる。後者だとすれば、灯塚の本来の形状は方形、長方形、あるいは前方後方型であった可能性が高い。

規模については、先に現状の墳丘頂部中心から墳丘裾部まで約9mであることを示した。したがって東西方向は18mとなる。現状の等高線で示された墳丘南下辺から墳丘頂部中心までの距離は、西下辺から墳丘頂部中心までの1.2倍なので、方形、あるいは長方形であれば南北方向は21.6mとなる。前方後方型の場合はその大きさが後方部規模に該当する。

墳丘周辺の土器出土状況 崩落した墳丘土の再堆積層で土器5点の出土を確認した。それ以外に墳丘周辺で複数の土器片の出土が認められた。その大半は墳丘土の再堆積層に含まれていると調査の状況から判断できるが、出土位置の詳細な確認はできなかった。

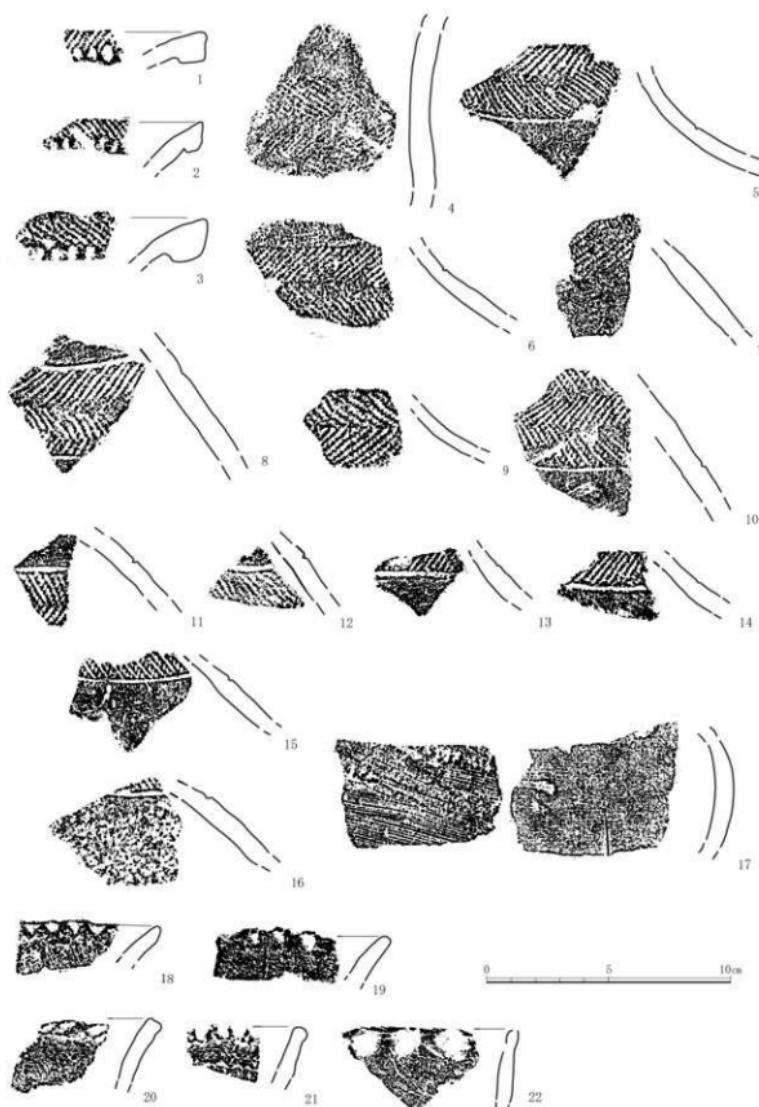
出土土器のうち、文様や器質などから縄文土器、土師器皿、中世の土師質土器とは異なり、弥生時代以降、古代までの土器であるとみられた一群を「大別」とし、一括で扱った。総数195点を数える。

195点の中で古墳時代後期の可能性が考えられる土器破片は5点、文様や器種推定などに基づき弥生時代後期～古墳時代初頭の土器と認識したものは34点を数えた。残りの156点については、弥生時代から古代にかけての土器と捉えたものの詳細不明の小破片である。



第38図 灯塚周辺出土の土器（1）

III 発掘調査の成果



第39図 灯塚周辺出土の土器（2）

表 11 灯塚周辺の土器出土状況

種別		遺構										一括	グリッド			
遺構・グリッドNo.		墳丘	Ba1	Ba2	Bc1	Bc2	Bc3	Ca4	Cb3	Da1	Da2		3A	4A	3B	4B
大別	一括	4	2	1	6	2	4	5	1	8	1	13	6	2	18	1
細別	A	1			1		1								2	
	B	1	1	1	1				1					1	1	

種別		グリッド														
遺構・グリッドNo.		5B	6B	7B	8B	9B	3C	4C	5C	6C	8C	9C	2D	3D	4D	9D
大別	一括	1	17	9	5	1	16	11	9	5	6	2	6	1	2	2
細別	A							1						1	1	
	B	1	1				3	1	1	1		1	1		1	1

種別		グリッド														
遺構・グリッドNo.		10D	3E	4E	6E	10E	E14	2F	3F	4F	5F	7F	8F	10F	11F	計
大別	一括	1	1	1	1	5	3	1	10	3	1	1	1	3	1	195
細別	A			1					1	1			1			12
	B	1							2							22

(注)「墳丘」はグリッド4Bで出土位置を確認して取り上げた土器

「大別」は陶文土器、土師器小皿、土師質土器とは異なる文様や器質の土器で、類似例が複数点あるもの。弥生時代から古代の土器

に該当。表示点数は接合前の確認数

「細別」は文様および器形基準に基づき弥生時代後期～古墳時代初頭の土器として認識したもの

A：部分的に器形復元できる破片、復元実測図を掲示

B：部分的でも器形復元が難しい破片、拓影を掲示

その34点のうち、遺構に混入したもの以外について出土位置をグリッド単位で示した（第37図）。土器の分布は、C9、D9、D10グリッドの各1点、計3点のまとまり域を除けば、明らかに墳丘の南から西に広がっていて、ことにB3、B4、C3、C4グリッドで顕著である。この分布の在り方は、墳丘構築土の流出状態を反映していて、墳丘と土器との関連性を示していると評価できる。

34点の土器は、部分復元が可能な破片（細分A）とできない（細分B）とに分かれ。前者は12点、後者は22点を数え、前者については復元実測図、後者については拓影を掲示した（第38・39図）。

出土土器について 第38図に復元実測図を掲示した12点には、壺、甕、高杯の器種がみられる。そのうち

III 発掘調査の成果

表 12-1 土器観察表

遺物番号	出土位置	器種	部位	形状	調整	法量	備考
第 38 団	1 4 C	壺	口縁部	大型壺、受口状の口縁部は内溝強い	(外) ハケ調整のちヨコ・タテミガキ(内)ユビナデ	(口) 33.6	3本1対の棒状浮文、外面に赤彩
	2 8 B	壺	口縁部	口縁部水平に張り出す	(外) 端面单點彫文(内)ヨコヘラナデ・ユビナデ	(口) 18.4	口縁部下辺にヘラ状工具による刻目
	3 4 E	壺	口縁部	口縁部水平に張り出す	(外) 端面ヨコヘラナデ(内)ヨコヘラナデ・ユビナデ	(口) 14.6	口縁部下辺にヘラ状工具による刻目
	4 4 F	壺	口縁部	口縁部大きく外反、端部貼付け	(外) ヨコユビナデ(内)ヨコユビナデ	(口) 16.0	
	5 3 B	壺	口縁部	口縁部緩やかに外反	(外) 器面摩滅のため不明(内) 器面摩滅のため不明	(口) 10.8	
	6 3 D	壺	口縁部	口縁部緩やかに外反	(外) ナナメハケのちヨコナデ(内) ヨコハケのちヨコヘラナデ	(口) 14.4	
	7 3 F	高杯	杯部	棱をなしたのち上半大きく外反	(外) ナナメハケのちタテミガキ(内) タテミガキ	(口) 20.5	
	8 墓丘	壺	底部	底部若干突出	脚下部(外) ナナメハケのちタテミガキ(内) ヨコナデ	(底) 7.6	
	9 3 B	壺	底部	底部平坦	(外) タテハケのちユビナデ(内) ユビナデ	(底) 7.2	
	10 Be 3 地下式土坑墓	壺	胴部～底部	底部突出	脚下部(外) タテミガキのちユビナデ(内) ヘラナデ・ユビナデ	(底) 6.6	
	11 Be 1 地下式土坑墓	(台付) 壺	口縁部	口縁部直線的に外反	(外) ナナメハケのちヨコナデ(内) ヨコヘラナデ	(口) 12.0	口縁部端に棒状工具による刻目
	12 4 D	高杯	脚部	やや柱状	(外) タテミガキ(内) ヨコハケのちユビナデ	-	
第 39 団	1 6 B	壺	口縁部	折返し口縁、口縁部は水平に張り出す	(外) 単節彫文(内) ヘラナデ・ユビナデ	-	口縁部下辺にヘラ状工具による刻目
	2 3 C	壺	口縁部	折返し口縁、口縁部はやや外傾気味	(外) 単節彫文(内) ヘラナデ・ユビナデ	-	口縁部下辺に刻目
	3 10 D	壺	口縁部	折返し口縁、口縁部は水平に張り出す	(外) 単節彫文(内) ヘラナデ・ユビナデ	-	口縁部下辺に棒状工具による刻目
	4 9 D	壺	胴部	頸部は外反気味に立上がる	(外) 羽状单節彫文(内) タユビナデ	-	
	5 Be 1 地下式土坑墓	壺	胴部	肩部は緩やかに内溝する	(外) 沈線を抉んで上に羽状单節彫文(内) ユビナデ	-	外面に赤彩痕
	6 Cb 3 土坑	壺	胴部	肩部は緩やかに内溝する	(外) 沈線を抉んで下に羽状单節彫文(内) ユビナデ	-	

表 12-2 土器観察表

遺物番号	出土位置	器種	部位	形状	調整	法量	備考
第39回	7 Ba 1 火葬壺	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 単節縄文・ヨコミガキ (内) ユビナデ	-	
	8 3 B	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 2条の沈縫間に羽状單節縄文 (内) ヘラナデ・ユビナデ	-	
	9 4 B	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 羽状単節縄文 (内) ユビナデ	-	
	10 4 D	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 沈縫を挟んで上に羽状単節縄文 (内) ヘラナデ・ユビナデ	-	
	11 3 C	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 沈縫を挟んで下に羽状単節縄文 (内) ヘラナデ・ユビナデ	-	
	12 4 C	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 沈縫を挟んで下に単節縄文 (内) ヘラナデ	-	沈縫下は羽状縄文とみられる
	13 2 D	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 沈縫を挟んで上に単節縄文 (内) ヘラナデ	-	沈縫上は羽状縄文とみられる
	14 3 C	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 沈縫を挟んで上に単節縄文 (内) ヘラナデ・ユビナデ	-	沈縫上は羽状縄文とみられる
	15 5 C	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 沈縫を挟んで上に単節縄文 (内) ヘラナデ	-	沈縫上は羽状縄文とみられる
	16 5 B	壺	胴部	頸部は直線的に内傾	(外) 沈縫を挟んで上に単節縄文 (内) ヘラナデ・ユビナデ	-	沈縫上は羽状縄文とみられる
	17 墳丘	壺	胴部	胴部は丸底がある	(外) タテミガキ (内) ハケ	-	外面に赤彩痕跡
	18 3 F (台付) 壺	口縁部	口縁部は外反する	(外) ハケ (内) ユビナデ	-	口縁部端に棒状工具による刻目	
	19 3 F (台付) 壺	口縁部	口縁部は外反する	(外) ハケ・ヨコユビナデ (内) ハケ・ユビナデ	-	口縁部端にヘラ状工具による刻目	
	20 Ba 2 火葬壺 (台付) 壺	口縁部	口縁部は外反する	(外) ヘラナデ (内) ヘラナデ	-	口縁部端に棒状工具による刻目	
	21 Ba 1 火葬壺 (台付) 壺	口縁部	口縁部は外反する	(外) ヘラナデ (内) ヘラナデ	-	口縁部端にヘラ状工具による刻目	
	22 9 C (台付) 壺	口縁部	口縁部は直立気味	(外) ヘラナデ (内) ハケ・ユビナデ	-	口縁部端に指頭押圧加える	

(注)「壇丘」はグリッド4 Bで出土位置を確認して取り上げた土器

出土位置の数字・ローマ字表示はグリッド番号を示す

法量の(口)は口径、(底)は底径を表す

壺については複合口縁壺(38-1)、折返し口縁壺(38-2~4)、單口縁壺(38-5・6)に分かれる。複合口縁壺は復元口径33.6cmを測る大型品であり、39-17が同一個体の胴部破片とみられる。

折返し口縁壺(38-2)は口縁部外端面に単節縄文を施し、下辺にヘラ状工具による刻目を加えている。39-1~3と文様構成が等しく、39-4~16の胴部破片とも同系統といえる。また壺の底部破片のうち38-9は平底だが、38-8・10は突出する。

高杯のうち38-7は杯部の破片で、上半が一稜をなしたのち外反して立上る。

III 発掘調査の成果



写真21 灯塚墳丘概観（南西から）



写真22 灯塚周辺の土器出土状況（南西から）

甕（38-11）は口縁部に刻目が施されていて、同様の甕には39-18～22がある。いずれも台付甕とみられる。刻目を施すための工具がいくつかの種類に分かれれる。

拓影を掲示した22点は、甕の口縁部（39-1～3）と胴部（39-4～17）、甕の口縁部（39-18～22）である。甕の口縁部は、端面に単節繩文を施しているが、39-1が向かって左下りであるのに対して39-2・3は右下りである。胴部破片のうち39-4～16の13点には、現状では単節繩文のみ、また片辺の沈線のみしか残存していない破片もあるが、羽状繩文を沈線で上下区画する文様構成を基本とするといえる。既述したように、これらの胴部破片と38-2や39-1～3の口縁部破片は同系統の個体として捉えられる。

5点の甕の口縁部については、刻目の施工工具として棒状工具（38-11, 39-18・20）、ヘラ状工具（39-19・21）を想定することができ、さらに指頭押圧（39-22）によるものもある。

(7) 土坑、廃棄土坑、集石、溝、小穴、柱穴

土坑は6基（Cb 1～6）、廃棄土坑は3基（Cd 1～3）、集石は3基（Ce 1～3）、溝は6条（Ca 1～6）、小穴は44基（Cc 1～44）を数える。それぞれの状況については表13にまとめた。

土坑には繩文時代の貯蔵穴および陥穴と推定されるものがある。集石についてもCe 1は繩文時代、Cc 3もその可能性が高いが、Cc 2については時期不詳である。

3基の廃棄土坑（Cd 1～3）は、出土した磁器から19世紀前半に比定できる。また6条の溝のうち3条で宝永の火山灰が覆土中に認められ、先行する溝からも磁器破片が出土していることから、いずれも近世に位置付けることができる。

小穴は、土坑より小規模であるが柱穴よりは大きなものを指し、44基を数える。Ce29小穴で覆土に宝永の火山灰が検出されたが、それ以外では確認できなかった。また、覆土の土質から中世と推定される小穴は5基、さらに検出面との関係から中世に遡る可能性のある小穴は7基、遺構の重複関係から近世とみられるものは3基を数える。

中世に構築された可能性のある12基の小穴は、調査地点内の広い範囲に分布するが、比較的南寄りに多い。また火葬墓や土葬墓が密集する調査地点西寄りには広がらない。ただ、分布状況から一定の傾向性を求めるることは難しい。

柱穴としたものは、多くが方形の平面形を呈し、土層断面において柱の痕跡、あるいは柱を抜取った痕跡の認められる掘方を指す。多少の規模差はあるが、平面の1辺はおよそ20～50cm、深さは30～60cmである。

なお溝と柱穴についてはIV章4節で改めて取り上げ、遺構としての性格について検討を行っている。

表 13-1 土坑、廃棄土坑、集石、溝

遺構	位置		規模			形状		覆土	出土遺物	機能	時代
	東西	南北	長径	短径	深	平面形	形状				
Cb 1 土坑	6 + 0.7 m-line	E + 1.7 m-line	1.2	1.1	1.2	長円形	袋状土坑に近いが縁出面下 0.6 mで中膨らみとなる	ローム土を含む黒褐色土を基調	土器、回石	貯蔵穴	縄文
Cb 2 土坑	9 + 0.4 m-line	D + 2.2 m-line	1.3	1.1	0.5	隅丸長方形	壁面はほぼ垂直に立上り、 底面平坦	ローム土を含む茶褐色土を基調	なし		不明
Cb 3 土坑	11 + 3.8 m-line	H + 1.4 m-line	2.6	1.9	1.3	隅丸長方形	壁面はほぼ垂直に立上り、 底面平坦	黒褐色土・黄褐色土・ 茶褐色土が瓦層に堆積	土器		不明
Cb 4 土坑	3 + 2.0 m-line	B + 3.2 m-line	1.9	1.5	1.0	長方形	壁面はほぼ垂直に立上り、 底面平坦	ローム土を含む黒褐色土を基調	なし		不明
Cb 5 土坑	4 + 1.3 m-line	F + 1.0 m-line	2.6	1.6	1.1	長方形	壁面はほぼ垂直に立上り、 底面平坦	ローム土を含む黒褐色土を基調	なし		不明
Cb 6 土坑	10 + 1.3 m-line	D + 0.6 m-line	1.6	1.1	1.3	長方形	断面袋状を呈する	ローム土・ローム粒 を含む茶褐色土・黒褐色土を基調	土器、縄文土器	陥穴	縄文
Cd 1 廃棄土坑	14 + 0.0 m-line	E + 0.0 m-line	0.8	0.6	0.3	長円形	平面は丸味があるが振り込 みはほぼ直角。底面平坦	壁際にローム土を含 む茶褐色土がみられ る以外、ローム土が混じる黒褐色土を基調	土器、磁器		近世
Cd 2 廃棄土坑	15 + 0.2 m-line	E + 2.0 m-line	1.7	1.1	0.1	楕円形	平面は丸味があるが振り込 みはほぼ直角。底面は平坦	全体に黒褐色土基調 だが、ローム土が多 い下層と少ない上層 に分離	磁器、陶器、 伝化器、土師器皿、瓦、鐵釘		近世
Cd 3 廃棄土坑	14 + 1.0 m-line	E + 2.3 m-line	1.5	1.1	0.4	楕円形	平面は丸味があるが振り込 みはほぼ直角。底面平坦	ローム土を含む黒褐色土を基調	磁器、陶器、 伝化器、鐵釘		近世
Ce 1 集石	7 + 1.5 m-line	F + 0.5 m-line	5.0	4.0	—	長円形	掘方はなく、長径 5.0 m・ 短径 4.0 m の範囲に縦 300 点など分布。礫は直径 1 ~ 10cm の河原石主体	—	礫、石皿、磨石、縄文土器		縄文
Ce 2 集石	7 + 0.9 m-line	D + 0.5 m-line	0.6	0.5	0.2	長円形	掘方埋蔵に長さ 20cm の河 原石を立て並べ、掘方底に も平置きする。やや大きめ の河原石で閉塞	河原石組み間に黒褐色土が埋入	礫、石皿、加 工のある礫、経壠状 縄文土器		不明
Ce 3 集石	7 + 3.0 m-line	C + 3.5 m-line	2.6	1.8	—	長円形	10 点ほどどの礫が分布	—	礫		縄文

III 発掘調査の成果

表 13-2 土坑、廃棄土坑、集石、溝

造構	位置		規模			形状		埴土	出土遺物	機能	時代	
	東西	南北	長径	短径	深	平面形	形状					
Ca 1 潟	14 + 2.0 m-line	H + 0.0 m-line	21.0	2.0	0.8	Ca 2 潟と 連接し、 やや湾曲 する	両壁ともに2段振りに近い	火山灰を含む暗茶褐色土・灰黑色土（上層）とローム土は含むが火山灰を包含しない黒褐色土・黄褐色土（下層）、および最上層に大別	礁石	区画	近世	
Ca 2 潟	11 + 0.0 m-line	I + 0.0 m-line	25.4	2.0	0.8	Ca 1 潟と 連接し、 現状やや 湾曲する	南北壁ともに2段振りに近い。底面平坦	火山灰を含む暗茶褐色土（上層）とローム土は含むが火山灰を包含しない茶褐色土（下層）、および最上層に大別	圓文土器、須 恵器、土師器皿、 陶器、鉄 針	区画	近世	
Ca 3 潟	5 + 2.0 m-line	D + 0.0 m-line	33.0	1.2	0.6	北から延 びてコ字 状を描く	両壁ともに2段振りに近い。底面やや丸味あり。Ca 4・5 潟を切込む	火山灰を含む暗茶褐色土・灰黑色土（上層）とローム土は含むが火山灰を包含しない黒褐色土・黄褐色土（下層）、および最上層に大別	圓文土器、土 器、土師器皿、 須恵器、瓦	区画	近世	
Ca 4 潟	5 + 0.5 m-line	E + 0.0 m-line	13.0	0.8	0.4	直線的に Ca3 潟の 西辺と重 複	両壁は直線的に立上る (Ca3に切込まれる)	ローム土を含む茶褐色土・灰褐色土が水平状堆積（火山灰含まない）	圓文土器、土 器、土師器皿	区画	近世	
Ca 5 潟	5 + 2.5 m-line	D + 0.0 m-line	19.0	0.8	0.5	Ca3 潟の 東辺に 沿って重 複	両壁は直線的に立上る (Ca3に切込まれる)	ローム土を含む茶褐色土・灰褐色土が水平状堆積（火山灰含まない）	圓文土器、土 器、須恵器、 土師器皿	区画	近世	
Ca 6 潟	5 + 3.0 m-line	E + 0.0 m-line	8.0	0.4	0.2	直線的に Ca5 潟の 東辺と重 複	壁面は開き気味に立上る (Ca5に切込まれる)	ローム土多包する茶褐色土の單一層	土師器皿、磁 器、瓦	区画	近世	

(注) 潟の長径は現状長、Ca4・5・6 の短径は現状幅

位置はグリッド番号+グリッドからの距離を表示

表 14-1 小穴

遺構	位置		規模			形状		覆土	出土遺物	時代
	東西	南北	長径	短径	深	平面形	形状			
Ce 1 小穴	11 + 2.0 m-line	H + 0.6 m-line	1.8	1.0	0.1	不整長円形	底面起伏あり	ローム土・ローム粒含む暗褐色土の單一層		
Ce 2 小穴	4 + 3.5 m-line	D + 2.1 m-line	0.2	0.2	0.3	円形	断面すり鉢状を呈する	黒褐色土を基調		
Ce 3 小穴	4 + 3.5 m-line	D + 3.0 m-line	0.6	0.5	0.3	方形	壁面はほぼ垂直に立上り。底面平坦	ローム土・ローム粒含む黒褐色土を基調		
Ce 4 小穴	9 + 1.5 m-line	E + 1.5 m-line	1.0	0.8	0.1	隅丸方形	断面すり鉢状を呈する	黒褐色土單一層		
Ce 5 小穴	9 + 3.5 m-line	E + 1.0 m-line	1.5	1.5	0.2	隅丸方形	壁面は外傾して立上り。底面ほぼ平坦	ローム土含む茶褐色土を基調		
Ce 6 小穴	8 + 2.5 m-line	D + 1.5 m-line	1.4	1.3	0.3	方形	壁面は垂直に立上り、底面平坦	ローム土・ロームブロック含む暗茶褐色土を基調		
Ce 7 小穴	11 + 3.0 m-line	E + 0.5 m-line	1.8	1.7	0.5	方形	壁面は垂直に立上り。底面は緩やかに湾曲	茶褐色系土(上層)と黒褐色系土(下層)に大別		
Ce 8 小穴	11 + 3.0 m-line	E + 1.5 m-line	0.9	0.4	0.3	不整形	壁面は緩やかに外溝し、底面平坦	ローム土の混入少ない黒褐色土を基調		中世か
Ce 9 小穴	11 + 3.0 m-line	E + 2.4 m-line	0.5	0.5	0.3	円形	壁面は直線的に外傾し、底面は緩やかに湾曲	茶褐色系土(上層)と黒褐色系土(下層)に大別		中世か
Ce10 小穴	11 + 2.5 m-line	G + 0.5 m-line	1.4	1.0	0.9	隅丸長方形	壁面はやや内溝し、底面僅かに起伏あり	ローム土含む黄褐色土を基調とし黒褐色土が間隔となる		中世か
Ce11 小穴	11 + 2.0 m-line	G + 3.0 m-line	1.6	1.0	0.5	隅丸長方形	壁面は外傾気味に立上り、底面は平坦	黄褐色土(上層)と茶褐色系土(下層)に大別		中世か
Ce12 小穴	12 + 1.2 m-line	G + 3.5 m-line	1.4	0.7	0.3	長方形	壁面は外反し、底面平坦	黄褐色土(上層)と茶褐色系土(下層)に大別		中世か
Ce13 小穴	12 + 2.5 m-line	G + 3.0 m-line	1.5	1.0	0.5	隅丸長方形	壁面は緩やかに外溝し、底面湾曲	ローム土・ロームブロックを含む黒褐色土を基調		中世か
Ce14 小穴	13 + 1.0 m-line	H + 1.0 m-line	1.0	1.0	0.3	円形	壁面はほぼ垂直に立上り。底面平坦	ローム粒多包する茶褐色土(上層)とローム粒少い黒褐色土(下層)に大別	鐵文土器、土器、陶器	中世か
Ce15 小穴	10 + 1.5 m-line	G + 3.4 m-line	2.0	1.8	0.3	不整円形	壁面は外傾気味に立上り、底面ほぼ平坦	ローム粒・ローム土含む黒褐色土(上層)と黒褐色土、黄褐色土・茶褐色土の互層(下層)に大別	鐵文土器、土器	中世か
Ce16 小穴	9 + 2.5 m-line	G + 3.0 m-line	2.1	1.3	0.3	長円形	壁面は緩やかに外溝し、底面平坦で北に下降	ローム粒多包する黒褐色土を基調	土器	

III 発掘調査の成果

表 14-2 小穴

遺構	位置		規模			形状		覆土	出土遺物	時代
	東西	南北	長径	短径	深	平面形	形状			
Ce17 小穴	13 + 3.0 m-line	G + 3.0 m-line	1.6	1.3	0.4	楕丸方形	壁面は外反し、底面やく溝曲	ローム土・ローム粒含む茶褐色土（上層）とローム土混入少ない黒褐色土（下層）に大別		
Ce18 小穴	8 + 2.5 m-line	G + 0.3 m-line	1.2	0.8	0.2	長方形	壁面ほぼ直立に立上り、底面起伏あり	茶褐色系土（上層）と黒褐色系土（下層）に大別	錢貨	
Ce19 小穴	9 + 2.4 m-line	E + 3.2 m-line	1.1	0.8	0.1	楕丸長方形	断面寝状を呈する	黒色土（上層）と黒褐色土（下層）に大別		中世か
Ce20 小穴	9 + 2.4 m-line	F + 0.6 m-line	2.3	1.3	0.3	楕丸長方形	壁面は外傾気味に立上り、底面ほぼ平坦	ローム土含む黒褐色土上に茶褐色土が堆積	土器、土師器皿	中世か
Ce21 小穴	8 + 0.0 m-line	F + 2.0 m-line	2.2	1.5	0.4	長方形	壁面は外傾気味に立上り、底面ほぼ平坦	ローム土含む黒褐色土を基調	鐵文土器、土器、土師器皿	
Ce22 小穴	10 + 1.0 m-line	F + 1.5 m-line	1.5	1.2	0.3	方形	壁面ほぼ直立に立上り、底面平坦	ローム粒含む黒褐色土を基調		
Ce23 小穴	8 + 2.0 m-line	G + 2.0 m-line	2.0	1.0	0.2	楕丸長方形	壁面は外傾して立上り、底面ほぼ平坦	黒褐色土を基調とし、上部に茶褐色土が堆積	土器	
Ce24 小穴	8 + 1.5 m-line	G + 0.5 m-line	1.1	1.1	0.3	楕丸方形	壁面は外傾して立上り、底面ほぼ平坦	茶褐色土を基調とし、壁面に黒褐色土混在		
Ce25 小穴	9 + 1.2 m-line	F + 0.7 m-line	0.8	0.5	0.2	長方形	壁面は外傾して立上り、底面ほぼ平坦	ローム土若干含む黒褐色土を基調	土器	
Ce26 小穴	12 + 2.5 m-line	C + 1.5 m-line	1.6	0.5	0.3	長円形	壁面は緩やかに外反し、底面西に下降	黒褐色土を基調		中世か
Ce27 小穴	13 + 2.5 m-line	C + 0.8 m-line	1.3	1.1	0.2	楕丸方形	壁面から底面にかけて溝曲	黒褐色土（上層）と茶褐色土（下層）に大別		中世か
Ce28 小穴	9 + 2.5 m-line	F + 3.5 m-line	1.1	0.8	0.2	長方形	壁面は外傾して立上り、底面ほぼ平坦	黄褐色土を基調とし、上部に昂揚色土が堆積		
Ce29 小穴	16 + 1.0 m-line	F + 0.0 m-line	1.4	1.3	0.2	不整円形	壁面は外傾して立上り、底面ほぼ平坦	褐色土を基調とし、中間層に火山灰を含む		近世
Ce30 小穴	14 + 3.8 m-line	E + 2.2 m-line	1.1	0.9	0.2	楕丸長方形	壁面直立上り、底面ほぼ平坦	ローム土含む茶褐色土を基調		
Ce31 小穴	13 + 3.0 m-line	D + 2.5 m-line	1.4	1.0	0.2	不整長方形	壁面は外傾して立上り、底面ほぼ平坦	ローム土・ローム粒含む茶褐色土を基調		近世か
Ce32 小穴	14 + 0.3 m-line	D + 3.0 m-line	0.6	0.5	0.3	不整円形	壁面直立上り、底面ほぼ平坦	ローム土・ローム粒若干含む黒褐色土を基調		

表 14-3 小穴

遺構	位置		規模			形状		覆土	出土遺物	時代
	東西	南北	長径	短径	深	平面形	形状			
Ce33 小穴	14 + 0.7 m-line	B + 3.3 m-line	0.7	0.5	0.1	不整長円形	壁面から底面にかけて窪曲	ロームブロック点在する黒褐色土單一層		
Ce34 小穴	10 + 0.0 m-line	F + 3.0 m-line	1.9	0.9	0.3	長方形	壁面はほぼ垂直に立上り、底面南に下降	ローム土若干含む黒褐色土を基調	陶器	
Ce35 小穴	8 + 2.5 m-line	F + 3.3 m-line	1.6	1.0	0.3	不整長方形	壁面は外傾して立上り、底面はほぼ平坦	ロームブロック点在する茶褐色土(上層)と黒褐色土(下層)に大別		
Ce36 小穴	9 + 3.6 m-line	G + 3.2 m-line	0.6	0.6	0.1	長円形	壁面は緩やかに外溝し、底面中央に下降	黒褐色土を基調とし、底面上に黄褐色土堆積		近世か
Ce37 小穴	10 + 0.2 m-line	G + 1.7 m-line	1.1	0.8	0.4	長円形	壁面は外傾して立上り、底面はほぼ平坦	ローム土・ロームブロック含む黒褐色土を基調		
Ce38 小穴	10 + 3.5 m-line	M + 0.0 m-line	4.3	2.4	0.6	不整長方形	壁面は外傾して立上り、底面起伏あり	少量のローム土含む黒褐色土を基調		近世か
Ce39 小穴	11 + 0.0 m-line	G + 1.5 m-line	1.8	1.0	0.3	不整長方形	壁面は外傾して立上り、底面窪曲	黄褐色土(上層)と黒褐色土・茶褐色土(下層)に大別		
Ce40 小穴	11 + 0.8 m-line	F + 0.5 m-line	0.9	0.7	0.2	方形	壁面はほぼ垂直に立上り、底面平坦	茶褐色土(上層)と黒褐色土(下層)に大別		
Ce41 小穴	11 + 2.2 m-line	F + 0.5 m-line	1.6	1.2	0.1	不整長円形	壁面は内溝して立上り、底面ほぼ平坦	黒褐色土を基調とし、底面上に黄褐色土堆積		
Ce42 小穴	10 + 1.0 m-line	G + 1.0 m-line	2.1	1.5	0.6	不整長円形	壁面は内溝して立上り、底面起伏あり	黒褐色土を基調		
Ce43 小穴	12 + 3.9 m-line	C + 3.9 m-line	1.1	0.6	0.1	扁丸長方形	壁面は外傾して立上り、底面起伏あり	ローム粒若干含む黒褐色土單一層		
Ce44 小穴	12 + 0.5 m-line	E + 2.0 m-line	1.2	0.8	0.2	扁丸長方形	壁面は内溝して立上り、底面ほぼ平坦	ローム粒含む黒褐色土を基調		

(注) 覆土や検出状況から時期を推定できる小穴は16基を数える

覆土の土質から中世と推定 (Ce 8・9・10・11・12)。検出面から中世と推定 (Ce13・14・15・19・20・26・27)

覆土に火山灰を含むことから近世に比定 (Ce29)。遺構の重複関係から近世と推定 (Ce31・36・38)

IV 調査の総括

1. 調査地点の時代変遷

この発掘調査では、500 基以上を数える柱穴を除いても 86 基の遺構が検出され、堅穴住居をはじめて 13 種類におよぶ。そしてその数と種類の多さに示されるように、遺構の時期もさまざまである。その一方で時期比定ができない遺構、明確な時期比定の根拠を欠く遺構も数多くある。こうした状況下ではあるが、現時点で考えることができる調査地点の時代変遷を示す。

縄文時代 最も時代が遡る遺構は Aa 1 堅穴住居と Ce 1 集石であり、土器の出土はないが Ce 3 集石も同時代の可能性がある。Aa 1 堅穴住居については第 9 ~ 12 図に遺構状況と出土遺物を掲示しているが、炉体土器に曾利式系統の深鉢が使用されていることから住居は縄文時代中期後半に位置付けられる。ただし住居内の覆土からは早期・前期・中期前半の土器も出土している。Ce 1 集石でも早期（2 点）・前期（9 点）・中期前半（3 点）の土器破片が出土している。点数の多さを評価するならこの集石は前期となるが、土器が遺構の下限時期を示しているとすれば中期前半と考えられる。さらにこの Ce 1 集石と Aa 1 堅穴住居との距離の近さからすれば、中期後半の土器は出土していないが、同時に位置付けられる可能性も捨てられない。

3 基の集石のうち Ce 2 からは縄文土器 1 点と石皿 1 点、加工のある礫 1 点が出土しているが、石組みの状態が経塚状であることから、縄文時代に位置付けることを保留する。これに対して Ce 3 集石は、土器・石器ともに出土していないが、焼けた自然礫の散布状況から縄文時代の遺構の可能性は高い。

堅穴住居および 2 基の集石以外に縄文時代に比定できる可能性のある遺構としては、Cb 1 土坑と Cb 6 土坑があがる。前者からは土器 1 点と回石 1 点、後者からは土器 2 点が出土した。いずれの土器も時期比定できない小破片であったが、検出した形状から Cb 1 土坑は貯蔵穴、Cb 6 土坑は陥穴と推測する。

ところで Aa 1 堅穴住居出土の 74 点を除いても 371 点の縄文土器が出土している。そのうち包含層出土は 267 点を数えるが、残りの 104 点は 20 基の遺構からの出土である。ただしその内には中世の火葬墓、近世に位置付く地下蔵や溝もみられることから、遺構内覆土へ混入した縄文土器も少なくなかったとい

表 15 遺構・包含層出土の縄文土器 (Aa 1 堅穴住居を除く)

型式	包含層	Cc1	Cb6	Da1	Da4	Ce14	Ce21	Ac27I	Ba7	Ab1	Ca2	Ca3	小計
井草	1								1				2
夏島	13	9					1	1	1		1		26
稻荷台		1											1
押型文	1					1							2
関山	12	1	1	2									16
諸磯 a	1												1
諸磯 c	1				1	1				1			4
五領ヶ台	1									2			3
勝坂	1										1		2
阿玉台	1	3											4
加曾利 E	15			1						5			21
称名寺	3												3
小計	50	14	1	4	1	1	1	1	2	8	1	1	85

える。

調査地点で出土した縄文土器のうち型式の判明する 85 点についてみる（表 15）と、最も時期が遅るのは井草式であるが、出土点数は 2 点に留まる。ところが同じく早期の土器である夏島式は 26 点を数え、一定量が認められる。したがって調査地点における人の活動は縄文時代早期には始まっていた。そして 3 点ではあるが称名寺式土器が出土していることから、当該地での人の活動は後期まで断続的にあったとみられる。

弥生時代 弥生時代に比定できる明確な遺構および遺物がほとんど見当たらない中で、看過できないものに灯塚の墳丘とその周辺を中心に出土した土器がある。それらに関しては本章次節で扱うが、弥生時代後期半から古墳時代初期までの間に灯塚を位置付けるかという課題からは、初現期の古墳とみるか、あるいは弥生時代の墳丘墓と理解するかの選択に迫られる。ただ、灯塚周辺から出土した土器には微妙な時間幅があるとしても、その差は短く、ほぼ同一期として捉えることができる。そしてこの一群を除くと、同じ時期の土器は認められなかった。

古墳時代 灯塚を除いて、弥生時代に引き続き古墳時代においても当該時代に比定できる遺構は見当たらなかった。しかしながら、少量だが後期の甕や杯とみられる土器が出土していることから、希薄ながらも当該地にも人の活動域が広がっていたと予測する。

古代 飛鳥・奈良・平安時代に比定できる遺構は確認されなかった。遺物については回転糸切りされた須恵器杯や須恵器の底部破片を転用した硯、さらに凹面に布目痕が残る平瓦などは古代に位置付けることができるとしても、当該時代に比定できる遺物の数は極めて少ない。

中世 中世に比定できる遺構としては、まず Ba 1 火葬墓があがる。この火葬墓では銭貨 2 枚とともに破片となった土師器皿が 5 点出土した。2 枚の銭貨はともに熙寧元宝で、初鑄は 1068 年である。土師器皿のうち復元図化が可能な 2 点（22-1・2）は 15 世紀後半～16 世紀前葉に時期比定できる。この土師器皿に示される年代観が Ba 1 火葬墓の時期といえる。また銭貨の流通期間の長さを改めて認識することができる。

火葬墓、土葬墓、地下式土坑墓の中で副納された土器類が復元図示できたのは Ba 1 火葬墓 1 基だけであった。そのため Ba 1 火葬墓を除くと時期を比定するための根拠に乏しいが、Ba 7 火葬墓を除く 6 基の火葬墓と土葬墓 5 基は調査地点の西寄りにまとまっている、まとまりがあるにもかかわらず重複関係がない、そして Bb 1・3 土葬墓に副納された初鑄 1433 年の宣德通宝からすると墓の形成時期は 15 世紀前葉を週らない、という点から火葬墓と土葬墓は Ba 1 火葬墓と同じく概ね 15 世紀後半～16 世紀前葉に形成されたと理解する。

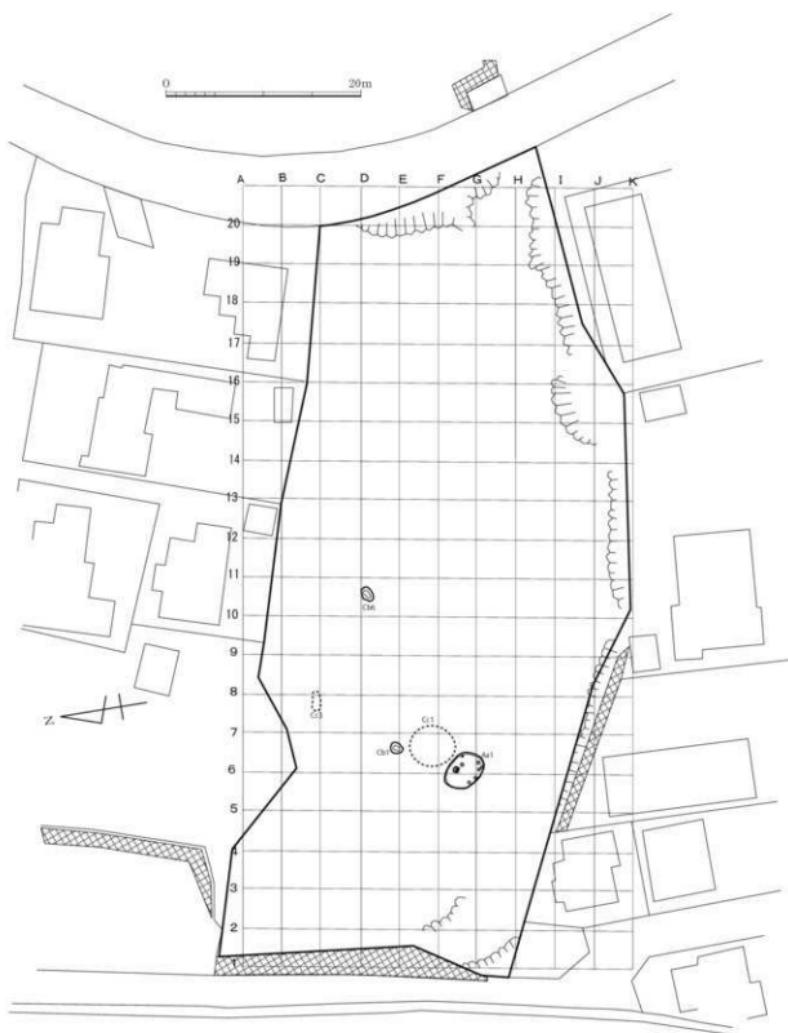
そして中世に関しては便宜的に 12 世紀後葉～14 世紀前葉の鎌倉期、14 世紀中葉～15 世紀中葉の室町前半期、15 世紀後葉～16 世紀中葉の室町後半期の 3 段階に分けるとすれば、火葬墓や土葬墓はそのうちの室町後半期に該当する。

地下式土坑墓に関しては、Bc 1 地下式土坑墓から土師器皿 2 点、Bc 3 地下式土坑墓でも 1 点、さらに Bc 1・2・3 地下式土坑墓から土器が複数点出土しているが、いずれも形状復元が困難な小破片であり、時期比定できない。また Be 1 地下式土坑墓は火葬墓や土葬墓の一組と近接するが、残りの 3 基は分散している。このように地下式土坑墓についてはさらに時期比定の根拠が乏しい。ただ、次の近世になると調査地点の広い範囲で建物群が構築されるが、地下式土坑墓も含めた墓群は建物群の形成以前に設けられていることから、その時期を中世、そのなかでも遅い段階に求めたい。

なお小穴のうち Ce 8～15・19・20・26・27 の 12 基は、遺構の土質や検出面の位置などから中世遺構と考えられる。

近世 この時期の遺構であると認定する根拠のひとつに、宝永 4（1707）年の富士山噴火により生じ

IV 調査の総括



第40図 調査地点の縄文時代

1. 調査地点の時代変遷

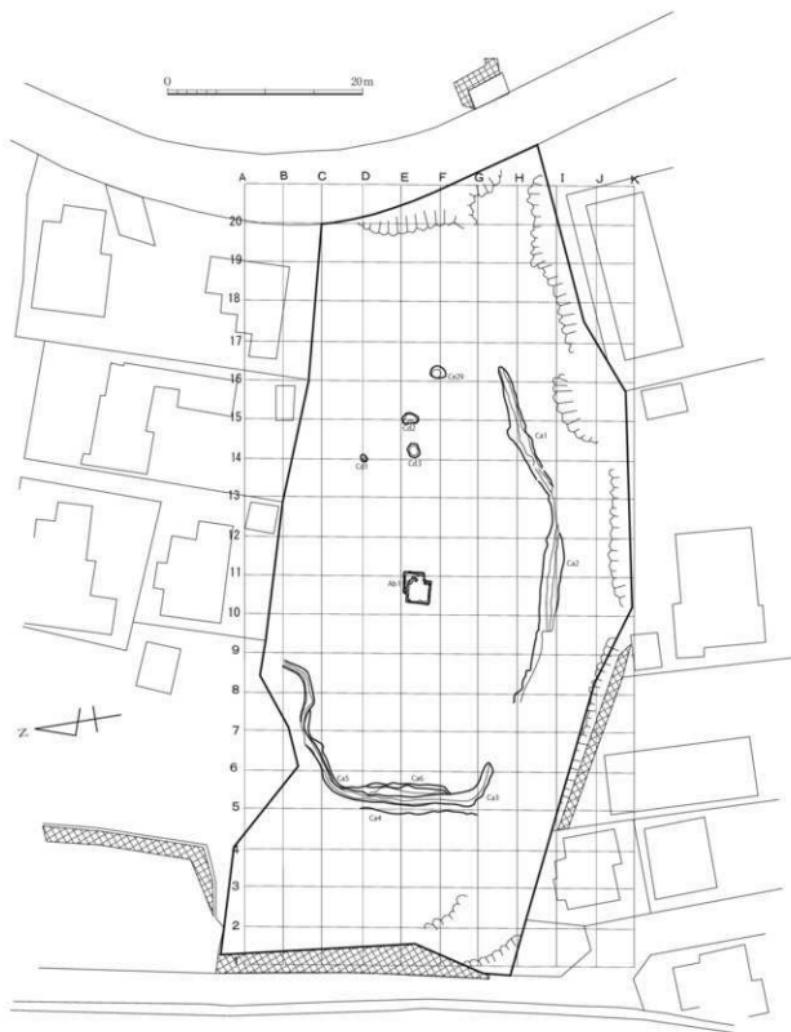


第41図 調査地点の弥生時代後期～古墳時代初頭



第42図 調査地点の中世

1. 調査地点の時代変遷



第43図 調査地点の近世

IV 調査の総括



第44図 調査地点の近世（時期不詳遺構含む）

た火山灰の堆積があがる。この火山灰の堆積がみられた遺構には、Ca 1・2・3溝、Ce29 小穴がある。これらは当時、開口状態にあったことになる。さらに Ca 3 溝に先行する Ca 5 溝あるいは Ca 6 溝から磁器が出土していることから、いずれの溝も近世に比定できる。また出土遺物から Cd 1～3 廃棄土坑は 19 世紀前半に位置付けることができる。

また 500 基を超える柱穴の多くでは、覆土の状況、掘方の形状や底部の痕跡から角柱が据えられていたとみられ、第 4 節で示すように近世の可能性が高い。

そうした遺構の分布をみると、調査地点の西から南にかけて区画のための溝が巡り、それに囲まれた内に建物を構成する多数の柱穴や地下蔵などが広がる。Ab 1 地下蔵は時期比定する手掛かりに乏しいが、建物群に附属するようにそのほぼ中央に位置する状況から同時期と判断する。このように 18 世紀初頭以前、17 世紀代に溝が接続して掘削され、その内部に複数の建物などが形成されたとみられる。

以上のことと、基本土層でみた地形変動の状況から、この調査地点では

- 1) 繩文時代早期に人の活動域となる
- 2) 繩文時代中期後半に住居が構築される
- 3) 弥生時代後期後半～古墳時代初頭に灯塚が築造される、周辺への地形変動の可能性がある
- 4) 古墳時代から古代にかけて人の活動痕跡は僅かに残る
- 5) 鎌倉時代、室町時代前半期では人の活動については不明
- 6) 室町時代後半期には主として調査地点の西寄りが墓域となる
- 7) 17 世紀代に区画溝が掘削され、内部に地下蔵などを伴う建物群が設けられる

表 16 調査地点の時代変遷

時代	時期	活動内容	同時代とみられる遺構
縄文時代	早期	人の活動域となる	土坑 (Cb 1・6)、集石 (Ce 1・3)
	中期後半	堅穴住居 (Ab 1) の構築	
弥生時代	後期後半～初頭	灯塚の築造、地形変動の可能性	
古墳時代	後期	僅かに人の活動痕跡残る	
古代		僅かに人の活動痕跡残る	
中世	鎌倉	不明	
	室町前半	不明	
	室町後半	火葬場 (Ba 1～7)・土葬場 (Bb 1～5) の形成、地下式土坑墓 (Bc 1～4) の形成?	小穴 (Ce 8～15・19・20・26・27)
近世	17 世紀	区画溝 (Ca 1～6) の形成、地下蔵 (Ab 1)、柱穴 (建物群)、小穴 (Ce29)	小穴
	18 世紀	地形変動を伴う耕作地化	
	19 世紀	廃棄土坑 (Cd 1～3) の形成	

- 8) 18世紀代に地形改変により耕作地となる
 9) 19世紀前半に廃棄土坑が形成される
 という変遷を想定することができる。

2. 灯塚の位置付け

出土土器の一括性 第38・39図に掲示した土器の一括性については、墳丘部の調査を行っていないことから確実とはいえないが出土分布の状況から、墳丘土の流出に伴って堆積土中に包含されたと判断できることはIII章で記述した通りである。さらに、土器に示される時期に対応する遺構が検出されていないことからも、灯塚に伴う一括した土器群であると捉える。

土器に示される時期 復元実測12点、拓影22点で示した土器群の中で、時期比定に有用なものとして折返し口縁壺(38-2)と高杯(38-7)があがる。

38-2については拓影を示した口縁部(39-1～3)および胴部の破片(39-4～16)と同系統であり、端面に単節縄文を施す折返し口縁部および羽状縄文を沈線区画した胴部で基本的に構成される壺である。久ヶ原式の系統を引く一群といえる。ただし沈線を挟んで上下に羽状縄文が確認できる資料は現状ではない。また羽状縄文帶に続く山形文や幾何学文も認められない。

38-7は、上半が強く外反し、比較的浅い杯部からなる。同形の高杯の中では、古い様相を留めているといえる。

これら以外に、複合口縁壺(38-1)や甕(38-11、39-18～22)なども留意される。38-1は口径33.6cmを測る大形品で、口縁部は受口状に内湾する。頸部は幾分直立気味である。口縁部端面に棒状浮文を付加するがそれ以外の施文はない。

甕については実測図および拓影で6点を示した。そのうち拓影の5点は小破片であるため、口縁部端の刻目以下の調整については現状範囲内での把握に過ぎない。そうした状況ではあるが、外面調整についてみると、ハケ調整(38-11、39-18・19)とヘラナデ調整(39-20・21・22)がある。また口縁部端の刻目に関しては指頭押圧(39-22)のほか棒状工具によるもの(38-11、39-18・20)、ヘラ状工具によるもの(39-19・21)がみられる。外面調整と口縁部端刻目との間には相関性は認められず、複数の調整技法が併存している。

久ヶ原式の系統を引く土器の中には古墳時代前期の土器と共に伴する事例もあるとされるが、この発掘調査においては図示した一群の土器を除くと、弥生時代後期あるいは古墳時代前期に比定できる土器は検出されなかった。したがって土器群に示された年代観が灯塚の時期を示していると判断できる。

そして一群の土器について、その総体的な様相から判断すれば、弥生時代後期後半に位置付けることになる。あるいは庄内式新相期に併行する可能性も含む。とすれば、灯塚を高塚古墳の範疇で捉えることができるかという根底的な課題が残る。さらに、そもそも墳丘部の調査を実施していない状況下で、可能性とはいえ灯塚の比定期を示すこと自体の正否もある。しかし灯塚周辺からまとめて土器が出土したという調査成果の意味付けを行う必要はあると考え、あえて時期の見通しについて触れた。現時点における調査成果に基づけば、灯塚は弥生時代後期後半、もしくは古墳時代初頭に該当すると捉えておく。

墳丘形状と規模 写真測量図および発掘による墳丘裾部の検出から、灯塚の形状と規模については先に推定したが、改めて示す。

また墳丘規模の点から灯塚を評価するために、海老名市内における相前後する時期で同程度の規模を測る墳墓をあげてみた。

表 17 灯塚の推定される墳形と規模

推定墳形	規模	備考
(長) 方形	長辺 21.6 m・短辺 18 m	現状の高さは、見かけ 3 m、検出した墳丘幅からは 5.2 m
前方後方型	後方部長軸 21.6 m・幅 18 m	

表 18 墳丘規模の比較

遺跡・古墳群	古墳・墓名	形状	規模	時期
秋葉山古墳群	3号墳	前方後円型	全長約 50 m	庄内式新
	4号墳	前方後方型	全長約 40 m	庄内式新?
	2号墳	前方後円型	全長約 50 m	布留式古
	1号墳	前方後円型	全長約 60 m	布留式新
	5号墳	方形	1辺約 20 m	布留式新
社家宇治山遺跡	YH21 号方形周溝墓	方形（方台部）	長辺 19.2 m	古墳前期
河原口坊中遺跡	P26 地区 YH 6 号溝状造構	方形（方台部）	1辺約 40 m	弥生後期

灯塚が方形であった場合は 1 辺 20 m 程度、現存している墳丘が後方部に当たる前方後方型であれば全長 40 m 弱の規模を想定できる。現在、この地域で最古段階の古墳と評価されている秋葉山 3 号墳は全長約 50m の前方後円型であり、灯塚とは 10 m ほどの差が生じ、3 号墳と同時期あるいは先行する可能性が示唆されている前方後方型の 4 号墳とはほぼ等しい。

また社家宇治山遺跡では、方台部規模が 5.0 ~ 11.5 m であった弥生時代後期～古墳時代初頭の方形周溝墓が古墳時代前期になると大型化し、1 边 20 m 近くを測るものも現れるとされている。

河原口坊中遺跡の P26 地区 YH 6 号溝状造構は方台部の 1 辺が 40 m 程度に復元できる可能性を示されていて、弥生時代後期の構築と考えられている。

秋葉山 3 号墳に対して灯塚は先行する可能性があるが、とすれば当該地域では比較的早い段階で首長墓大型化が進んでいたと理解できるかも知れない。

灯塚の位置付け 一群の土器群が灯塚に伴う一括性の高いものとしたが、それは状況からの判断である。その実態を明らかにするには墳丘部の調査が必要である。したがって、灯塚が古墳であるか、あるいは前段階のいわゆる墳丘墓と呼ぶべきものかはここでは確定できない。

さらには土器群が灯塚と関連するかという根本的な課題は未消化のままであることも事実である。墳丘盛土内に混入していた前段階の土器群の可能性を否定することは現状ではできない。しかしあえて積極的に灯塚を位置付けるなら、規模の点からみて、初現期の古墳として捉えておきたい。

3. 中世の墓群

調査地点では、火葬墓7基、土葬墓5基、地下式土坑墓4基を検出した。調査地点周辺の幾つかの遺跡においても地下式土坑墓をはじめ火葬墓や土坑墓が確認された事例はあるが、複数の葬送形態で構成された墓群の事例としてこの調査地点を評価することができる。そこでまず墓形態ごとに各墓の概要を以下にまとめる。

そうした中で留意点となるのは、墓群の同時性、および地下式土坑墓の位置付けである。時期については副納品などから火葬墓と土葬墓は室町時代後半期と捉えて大過ないと考える。地下式土坑墓についても、それらと同時期と推定できる。ただ異質な属性がみられたBc 4 地下式土坑墓は、近世に下る可能性もある。

表 19 火葬墓

No.	掘方			人骨・焼土・炭化物状況	出土遺物	時期
	長径	短径	軸方向			
Ba 1	2.2	1.4	東一西	掘方西半に焼土集中、北辺に炭化材、覆土中に人骨片	銭貨、土師器皿、土器、須恵器、縄文土器、鉄釘	室町後半
Ba 2	1.1	0.9	北西一南東	掘方南寄りに頭骨細片	土器、炻器	室町後半か
Ba 3	1.1	0.8	南一北	掘方全体に焼土、炭化物は箱状、覆土中に人骨片	銭貨、土器	室町後半か
Ba 4	1.3	1.1	東一西	掘方全体に焼土、覆土中に人骨片	縄文土器	室町後半か
Ba 5	1.1	1.0	東一西	掘方北東寄りに焼土集中、覆土中に人骨片		室町後半か
Ba 6	—	—	—	焼土・炭化物点在、覆土中に人骨片		室町後半か
Ba 7	3.0	2.0	北東一南西	炭化物点在、覆土中に人骨片	土師器皿、土器、縄文土器	室町後半か

表 20 土葬墓

No.	掘方		頭位	人骨・焼土・炭化物状況	出土遺物	時期
	長径	短径				
Bb 1	1.0	0.6	北	掘方北寄りに頭骨、南寄りに銭貨（頭骨のみ）	銭貨	室町後半か
Bb 2	0.6	0.5	南？	掘方南東寄りに頭骨（頭骨のみ）		室町後半か
Bb 3	—	—	北	北に頭骨、南に脛骨、頭骨脇に銭貨と鉄芯	銭貨、鉄芯	室町後半か
Bb 4	—	—	北	北に頭骨、南に下肢骨、中間付近に銭貨	銭貨	室町後半か
Bb 5	0.5	0.5	不明	掘方南西寄りに歯牙（頭骨のみ）		室町後半か

表 21 地下式土坑墓

No.	主室			開口部	平面形	断面形	柱穴	周溝	出土遺物
	長径	短径	高						
Bc 1	—	—	—	南	—	—	—	—	土器、土師器皿、織文土器
Bc 2	1.9	1.6	1.4	南	長方形	薙鉢形	なし	南除く3辺	土器、陶器
Bc 3	3.0	2.6	2.0	南	長方形	天井ドーム状	なし	4辺	土器、土師器皿、陶器、瓦
Bc 4	1.6	1.4	1.1	東	長方形	方形	なし	南除く3辺	

地下式土坑墓と地下蔵 地下式土坑墓の位置付けについては、ことに残存形態が類似する Ab 1 地下蔵との関係に注意される。そこで両者を比較するために、表 21 に沿って地下蔵の属性を表示する（表 22）。

地下式土坑墓と地下蔵で明らかに異なる点は、柱穴の有無と入口構造の違いである。柱穴に関しては地下蔵ではその存在が認められ、室内に柱が立てられている。これに対して地下式土坑墓には柱穴はみられない。この違いは天井あるいは壁面の仕様差によると考える。

入口構造については、地下式土坑墓ではいずれも竪坑が設けられていたが、地下蔵においては梯子が使用されたとみられる。これは日常性と関わる相違点かも知れない。また入口部は、地下蔵 2 基ともに東壁に位置していて、Bc 4 地下式土坑墓でも同様の位置に竪坑が設けられていた。ただし地下式土坑墓の中では例外的であり、残り 3 基の地下式土坑墓は南壁に沿って付設されている。これは葬送観と関わる点と考える。

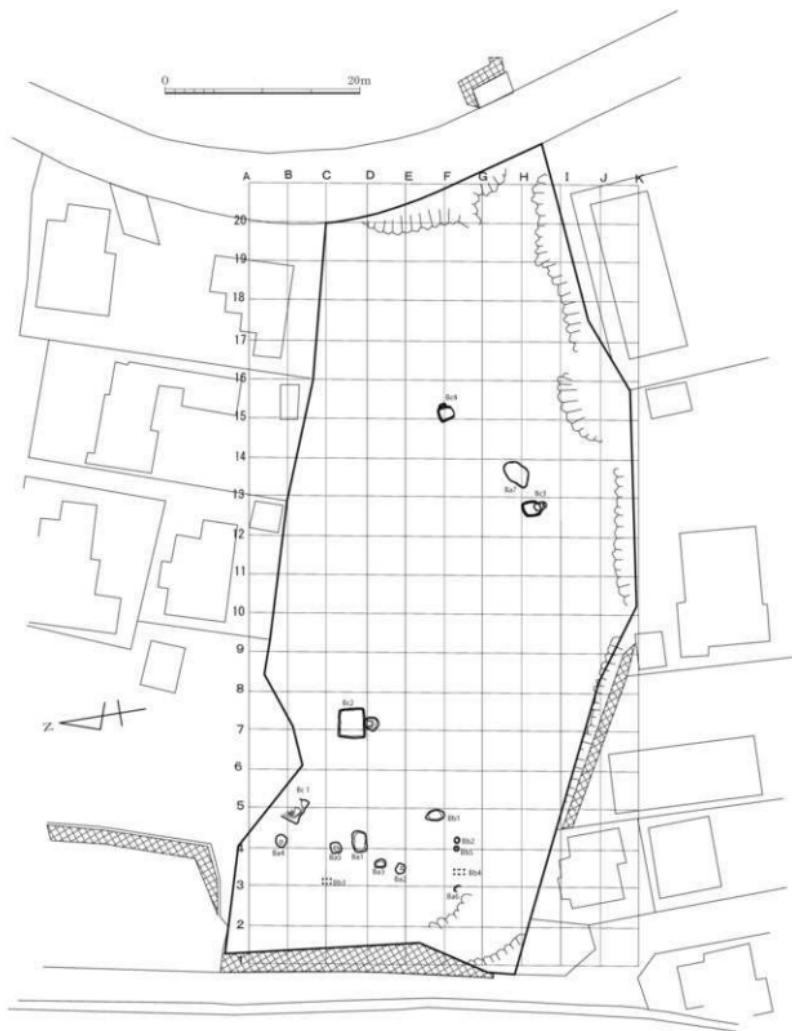
規模に関しては Bc 3 地下式土坑墓が地下蔵を上回る一方、Bc 2・4 地下式土坑墓の 2 基は下回っていて、室内の大きさに一定の基準はみられない。ただし、Bc 2・4 地下式土坑墓 2 基の間では規模は比較的等しい。

したがって総体的に捉えれば、地下式土坑墓と地下蔵との間に構造上の違いを認めることができ、Bc 1～4 の一群は地下蔵と分離される。

表 22 地下蔵

No.	主室			入口部 (梯子)	平面形	断面形	柱穴	周溝	出土遺物
	長径	短径	高						
Ab 1 I	2.2	2.1	—	東	方形	壁垂直	西隅・梯子部	4 辺か	土器、土師器皿、須恵器、陶器、織文土器、瓦
Ab 1 II	2.4	2.3	—	東	方形	壁垂直	西隅・梯子部	梯子部除く 4 辺	

IV 調査の総括



第45図 調査地点の中世墓群

周辺の中世墓 近藤 1986 により示された集成に、中世研究プロジェクトチーム 1995 があげた市内 4 遺跡のうち近藤 1986 で扱われていない海老名本郷遺跡の 4 基を加えると、20 遺跡・地点、40 基以上の地下式土坑墓が海老名市内に存在しているとみられる。

海老名本郷遺跡では地下式土坑墓のほかに火葬墓や土葬墓（土坑墓）も発見されていて、本報告の調査地点と同様に墓形態は複数種類に及んでいる。ただし墓群の密集度は本調査地点ほど高くない。

海老名本郷遺跡以外でも、火葬墓は上郷中世墓群、土葬墓（土坑墓）は社家宇治山遺跡で検出されている。しかし海老名本郷遺跡のように複数種類の墓形態が共存する遺跡は稀少であり、しかも火葬墓と土葬墓が群在し、地下式土坑墓が近在する墓群の在り方は、本書の調査地点にほぼ限られる。

調査地点の墓群の特徴を浮き上がらせるためにも、周辺の中世墓について概観する。

尼寺遺跡の地下式土坑墓 調査地点の東に接して南北に延びる道路上で 2 基の地下式土坑墓が発見された。それぞれの属性は表 23 に示す。形状と規模の点で、尼寺遺跡 1 号地下式壙は Bc 3 地下式土坑墓と近似している。なお「尼寺遺跡」の 2 基は、「鎌倉時代後半以降」の構築とされているが、具体的な時期には触れられていない。

表 23 「尼寺遺跡」の地下式土坑墓（地下式壙）

No.	主室			開口部	平面形	断面形	柱穴	周溝	出土遺物
	長径	短径	高						
1 号	3.4	3.3	1.7	南	(長) 方形	蒲鉾型	なし	4 辺	須恵器、瓦
2 号	2.5	—	1.8	南	—	蒲鉾型	なし	あり	陶器

上郷中世墓群の火葬墓 蔵骨器に火葬骨を納め、土坑内に埋納するとともに板碑あるいは五輪塔を立てた痕跡が 15 箇所発見された。さらにその上面に多量の礫が覆い被っていて、この礫も葬送に関わったものであると示唆されている。板碑に刻まれた年銘には嘉暦 3 (1328) 年から応永 29 (1422) 年までみられる。さらに報文に掲示された 14 枚の銭貨は、初鋳年が 1034 年の景祐元寶 (北宋) から 1408 年の永樂通寶 (明) まであり、下限は板碑とほぼ一致する。このことから、この墓群は 14 世紀初頭から 15 世紀中葉にかけて形成されたとみられる。

表 24 周辺の中世墓形成

時期	鎌倉期	室町前半期	室町後半期
	12 世紀後葉～14 世紀前葉	14 世紀中葉～15 世紀中葉	15 世紀後葉～16 世紀中葉
本調査地点			火葬墓、土葬墓、地下式土坑墓
尼寺遺跡		— 地下式土坑墓 —	
上郷墓群		火葬墓	
社家宇治山遺跡		土葬墓 (土坑墓)	

社家宇治山遺跡の土葬墓 点在する土葬墓（土坑墓）3基が検出されている。そのうち2基には銭貨が副えられていた。銭貨以外の出土遺物はなく時期の決め手を欠いているが、初鑄1408年の永楽通宝（明）が含まれているCK1号土坑墓は15世紀を廻ることはない。

少数事例を概観したに過ぎないが、本調査地点における中世墓群の形成は市域内の中でも後出的である。比較的遅れて墓群が形成されたこと、そして墓形態の種類が多様であることは、近世まで存続したとの伝えがある湧河寺あるいは清水寺の歩みと関連しているかも知れない。その点で留意されるのが建物群の痕跡である500基を超える柱穴と建物群を囲う溝である。この溝と柱穴について次節で検討し、遺構の性格に関して評価を行う。

4. 溝と柱穴（近世前半期の土地利用）

上述したように、17世紀代に形成され、18世紀代に地形改変によって廃絶したと大枠で捉えた溝や柱穴について、改めて形成時期や構造的な特徴に言及し、近世前半期の土地利用状況を確認しておきたい。

溝の状況 6条の溝のうちCa1・2・3溝は、調査地点の70%ほどを囲む区画溝である。それに対してCa3溝に先行するCa4・5・6溝は、Ca3溝に部分的に沿っているだけで、一定範囲を区画するまでに至っていない。したがって溝群の本来の機能を果たしているのはCa1・2・3溝である。

先行するCa4・5・6溝の機能については不明であるが、現状でCa4溝とCa5溝は深さが40～50cmを測り、ことにCa4溝では側面壁が垂直気味に立上っていて、その形状からみるとCa1・2・3溝に近似した機能をもった可能性もある。

既述したように先行溝の廃絶は少なくとも宝永4（1707）年以前の近世前期であるが、Ca1・2・3溝との同一地点での形成状況を勘案すると、6条の溝はさほど時間的に隔たることなく順次掘削されたと考えられる。

区画溝となる3条の溝の覆土の上部には宝永噴火による火山灰が含まれるが、さらにその上部を火山灰が混じらない褐色系の堆積土が覆う。このことから、溝の掘削は宝永4年以前であり、火山灰下降までの間に下半が埋まる程度の時間があったこと、火山灰下降後に上部の火山灰の一部が除去され復旧が図られた可能性のあることが推測される。

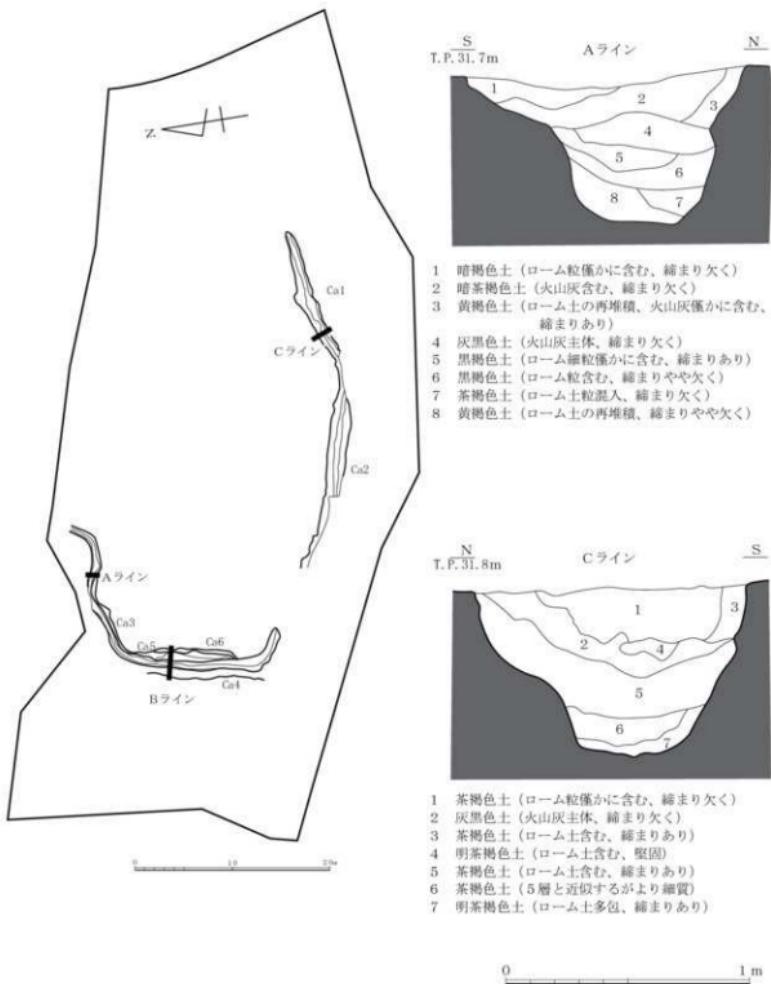
調査地点全体に溜まった火山灰が除去されたことは、調査地点内の包含層中に火山灰の集中堆積が見当たらないことから推定できる。火山灰片付けの時期を確実には示せないが、溝の復旧を考慮すると、火山灰下降後の早い段階で行われたとみられる。そしてその後に地形改変がなされたと考える。

ところで3条の溝は、調査地点の北西から南にかけて認められ現状では全周していないが、およそ南北25m、東西45mほどの範囲を囲っている。中世墓群とした各種の墓はその範囲内に収まらないが、500基を超える柱穴は、区画範囲不明の東を除いて溝の内側に位置している。このことから、区画溝と柱穴群とは関連していると考えることができる。

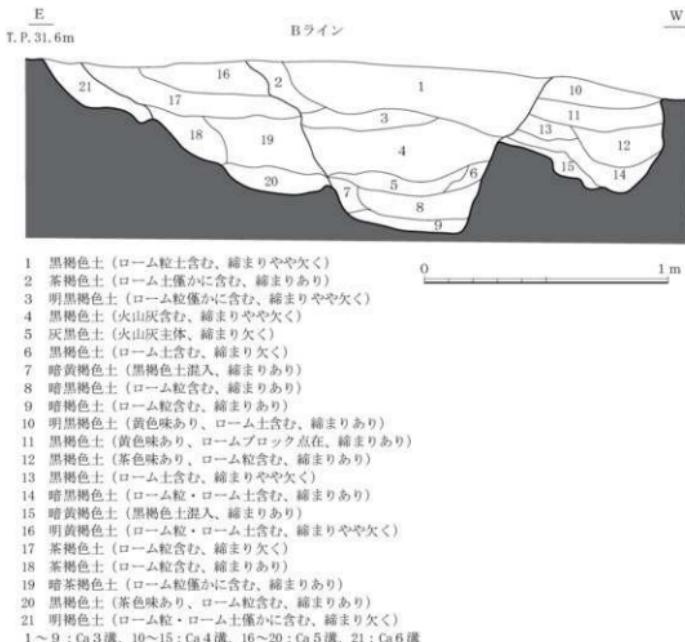
溝の年代 上述したように、Ca1・2・3溝については、開削は宝永4年以前、廃絶はその後としか示すことができないが、火山灰下降以前に溝内の約半分が埋没している状況から17世紀代の形成であったと推測できる。

またCa5溝・6溝一括で検出した遺物の中には磁器3破片が含まれていた。そのうちの肥前系丸底碗を近世前期に位置付けることができるすれば、溝の稼働時期の指標となる。

Ca1・2・3溝の廃絶時期に関しては、火山灰の片付け後に再度溝を埋めた堆積土は、溝の上部が削平されているとしても土層断面を見る限りではその量が多いとはいえないことから、片付け後からさ



第46図 Ca 1・3溝（土層）



第47図 Ca 3・4・5・6溝 (土層)

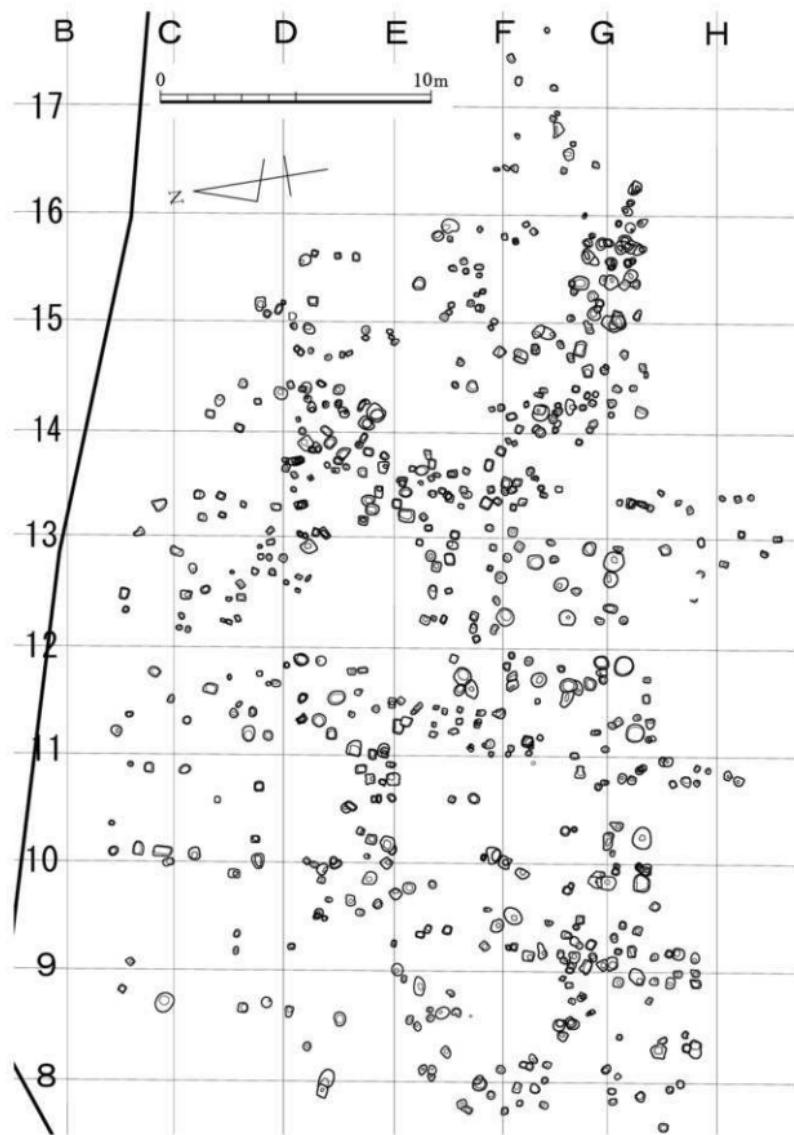
ほど時間をお経ない18世紀前半と推測する。

柱穴の状況 主として角柱を据えた掘方とみられる遺構は553基を数え、土層に柱痕、あるいは柱痕が観察される柱穴もある。柱穴と認定した掘方全てを第48図に掲示した。柱穴としたものの配列は不明である。そこで掘方の遺存状況も踏まえ、深度30cmを超える柱穴を対象として検討を進める(第49図・表25)。

検討対象となる柱穴は208基で、総数の38%である。平面規模のうち長径は12cmから120cmまでみられるが、20cm台が44基(208基中21.2%)、30cm台64基(30.8%)、40cm台49基(23.6%)を数え、長径20~40cm台が深度30cm以上の柱穴の4分の3を占める。

長径と深度については、長径100cmを超える3基は深度が40~50cmであり、平面規模と深度は必ずしも対応していない。深度30cm以上の4分の3を占める長径20~40cm台の柱穴の深度は、長径20cm台が深度30~70cm台、30cm台が深度30~80cm台、40cm台が深度30~90cm台であるが、いずれも30~40cm台が主流である。

このように深度に関しては、最大92cmを測る柱穴もあるが、30cm台66基(208基中31.7%)、40cm台54基(26.0%)、50cm台38基(18.3%)を数え、深度30~50cm台の柱穴が深度30cm以上の4分の3を占めている。こうしたことから、柱穴総数の40%弱からの傾向ではあるが、長径20~



第48図 柱穴分布状況

IV 調査の総括

表 25 分析柱穴の属性

No.	長径	短径	深	覆土	柱径	No.	長径	短径	深	覆土	柱径	No.	長径	短径	深	覆土	柱径	No.	長径	短径	深	覆土	柱径
4	30	28	31	A	13	128	20	18	30	B	303	60	40	59	E	413	42	30	42	B			
5	30	22	51	B		133	24	20	74	A	11	304	80	52	77	A	15	418	42	38	45	A	13
6	30	28	54	A	13	138	26	24	37	D		305	24	18	30	B		419	62	50	49	B	
7	30	26	42	B		153	40	24	83	B		307	26	22	54	A	16	423	22	20	47	E	
12	40	38	66	D		155	28	20	72	C		309	26	26	35	C		426	46	40	68	A	16
14	54	48	70	A	15	156	30	18	50	C		311	86	64	31	A	15	430	52	40	72	E	
15	28	26	30	C		163	42	26	41	B		314	68	24	63	B		433	36	30	59	D	
17	30	26	42	B		167	30	26	64	B		316	38	30	47	A	15	434	30	24	33	A	7
19	38	28	51	B		171	44	30	46	B	15	317	40	28	52	B		438	44	40	55	A	16
30	30	28	38	B		173	32	30	53	E		318	42	38	55	A	20	439	38	24	55	B	
32	24	22	50	B		176	22	20	42	D		321	72	46	45	E		440	24	30	32	E	
34	30	29	45	A	12	177	22	18	38	D		323	32	30	40	B		444	44	38	32	E	
37	70	66	31	B		188	24	20	31	C		324	56	52	64	A	15	447	46	42	63	B	
39	26	20	30	A	—	195	70	52	35	A	10	325	30	20	38	B		450	36	30	51	—	
44	32	30	49	B		198	42	30	55	B		326	44	40	38	E		451	60	20	53	A	15
45	26	24	50	A	13	199	40	34	67	B		328	36	30	32	B		452	34	30	73	A	15
46	26	24	50	B		200	36	26	80	B		329	48	42	62	A	15	453	22	20	56	B	
47	36	28	61	A	10	201	34	32	42	D		330	80	70	56	B		454	40	20	75	A	13
48	30	24	56	E		203	42	40	70	B		331	68	50	40	E		456	16	12	35	A	15
55	38	28	56	B		208	24	18	31	E		332	120	82	42	E		457	14	10	37	A	15
63	12	12	40	C		212	46	40	30	E		337	18	14	67	D		459	24	22	53	A	12
71	38	36	78	B		214	30	28	45	A	15	338	40	30	92	D		460	40	20	34	A	15
73	36	34	50	A	H	218	30	24	30	A	10	340	52	48	62	B		462	44	30	32	A	12
77	32	24	30	A	11	219	52	50	49	A	—	342	30	22	47	B		465	34	32	55	A	10
78	30	16	50	B		220	26	24	71	B		344	52	32	30	A	15	469	26	26	45	E	
79	24	16	50	D		222	58	48	74	D		345	62	56	50	A	15	470	40	32	54	—	
81	24	20	35	C		223	36	34	79	A	12	350	46	30	45	D		471	42	38	39	A	15
83	50	36	46	B		224	70	20	60	A	15	351	36	34	42	A	15	478	40	36	80	A	17
88	42	40	62	A	15	225	30	24	43	A	15	353	30	28	45	A	15	481	78	22	74	A	16
89	22	20	30	D		230	48	46	34	B		354	52	44	42	A	15	482	36	24	32	B	
91	40	26	36	B		232	30	30	75	A	15	357	30	28	30	A	10	483	20	18	30	B	
92	40	32	37	D		234	22	20	32	B		359	32	28	42	A	13	484	18	16	33	B	
96	30	26	35	C		242	42	40	51	B		360	30	30	62	B		487	50	34	61	A	10
97	40	30	55	D		244	30	22	32	D		362	50	40	44	A	20	488	34	30	75	A	—
98	24	22	42	C		246	76	40	66	B		363	56	50	45	B		490	26	24	36	B	
99	14	12	32	C		248	69	40	38	E		364	74	66	57	A	20	491	26	26	49	E	
101	32	30	35	C		250	50	44	41	E		365	30	20	36	D		492	26	24	40	E	
102	38	24	40	D		251	120	62	67	A		367	26	22	35	D		493	48	32	44	E	
103	56	46	40	D		252	44	26	43	B		368	38	36	64	A	20	494	30	30	38	E	
104	42	36	45	D		253	44	44	51	B		369	30	26	46	E		497	30	28	39	B	
106	42	40	30	B		254	70	52	79	A	10	371	22	18	38	B		501	52	50	33	A	
107	40	30	35	B		255	46	40	65	B		384	24	20	30	B		511	54	30	35	B	
109	36	30	42	B		256	40	34	70	B		396	28	24	56	B		512	40	22	30	B	
110	40	30	32	B		257	40	30	65	B		399	30	26	46	B		518	104	50	67	B	
114	24	22	30	B		260	36	30	34	F		404	40	26	70	B		525	30	24	44	B	
115	60	40	36	B		265	46	30	35	A	15	405	80	70	70	A	10	528	46	44	49	B	
117	30	24	32	A	15	277	40	34	55	A	15	406	80	50	90	A	15	530	64	40	70	A	20
119	26	20	30	D		290	39	20	45	A	15	407	36	30	31	D		531	38	30	49	B	
121	42	22	42	D		293	46	30	50	B		408	78	48	51	B		534	40	38	72	B	
123	24	22	52	B		298	30	28	72	B		409	24	20	30	B		544	36	30	42	D	
124	28	24	40	C		299	26	20	42	E		410	52	26	46	E		549	32	22	48	D	
125	24	22	51	D		302	50	32	70	A	13	412	84	50	81	A	20	550	29	26	37	C	
																	552	24	24	48	D		

覆土の分類

1) 建てられた柱が腐食したとみられる土層状況 (A)

2) 柱を抜き取ったとみられる土層状況 (B)

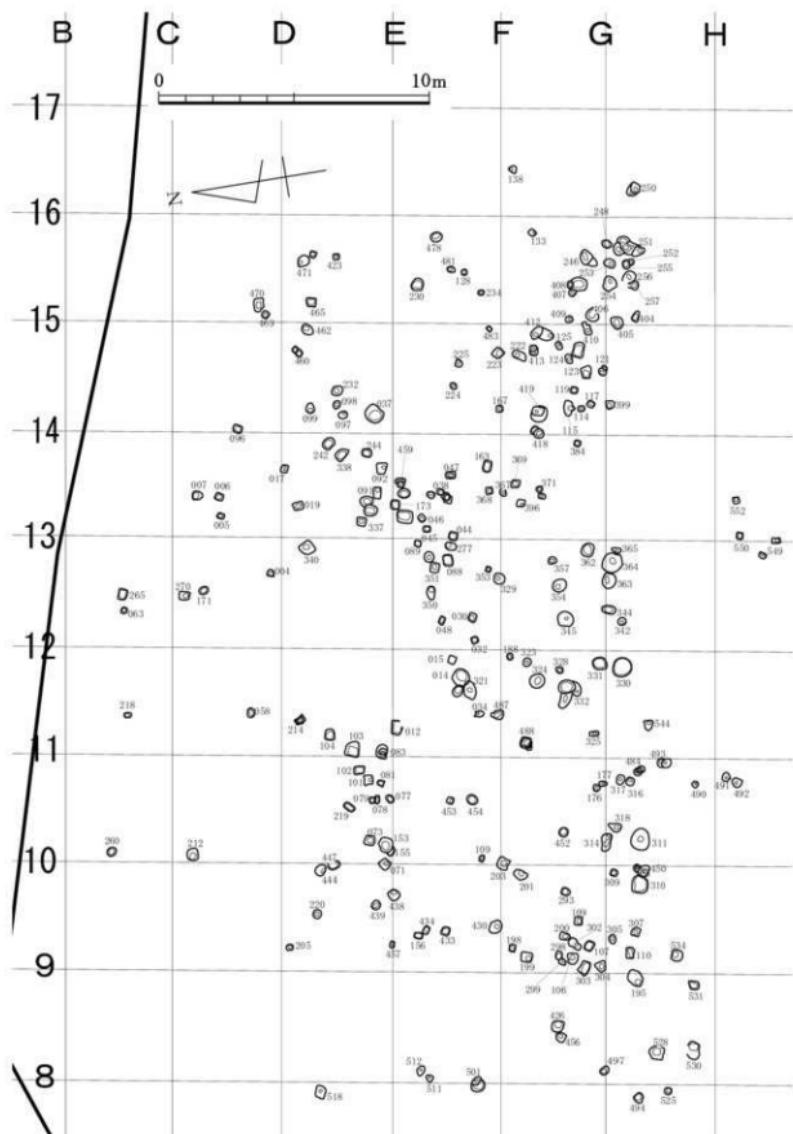
3) 柱底や抜け取り直路が不明瞭な土層状況

1. 単一層の堆積を基調とする (C)

2. 上下2層の堆積を基調とする (D)

3. 3層以上の水平堆積を基調とする (E)

4. 複数層の斜め堆積を基調とする (F)



第49図 柱穴（深30cm～）分布状況

IV 調査の総括

表 26 柱穴の長径と深度

深度	長径									
	10cm台	20cm台	30cm台	40cm台	50cm台	60cm台	70cm台	80cm台	100cm台	120cm台
30cm台	4	22	18	14	3	2	2	1		
40cm台	1	9	22	10	8	2	1			1
50cm台		10	13	9		3	2	1		
60cm台	1		4	8	3	1	2		1	1
70cm台		3	6	5	4	1	2	2		
80cm台			1	2				1		
90cm台				1				1		

48cm、深さ30～59cmに分布のまとまりを見出すことができる。

この208基の柱穴では、柱痕、あるいは柱抜取痕を確認できるものがある。柱痕は64基（2基は柱の太さ不明）、柱抜取痕は79基で確認でき、深度30cm以上の柱穴の69%にのぼる。

柱痕を手掛かりに柱の太さを推定すると7～20cmまでみられるが、そのうち直径15cmと計測される柱痕は、深度に関わらず28基の柱穴で確認された。柱痕の幅を捉えることのできる62基中の45%にのぼる。この柱痕の太さから、5寸角材が多用されたとみられる。

さらに柱痕については10cm（12基、19%）や13cm（6基）にも小さなピークがある。したがって3寸半や4寸の角材も使用されていたといえる。

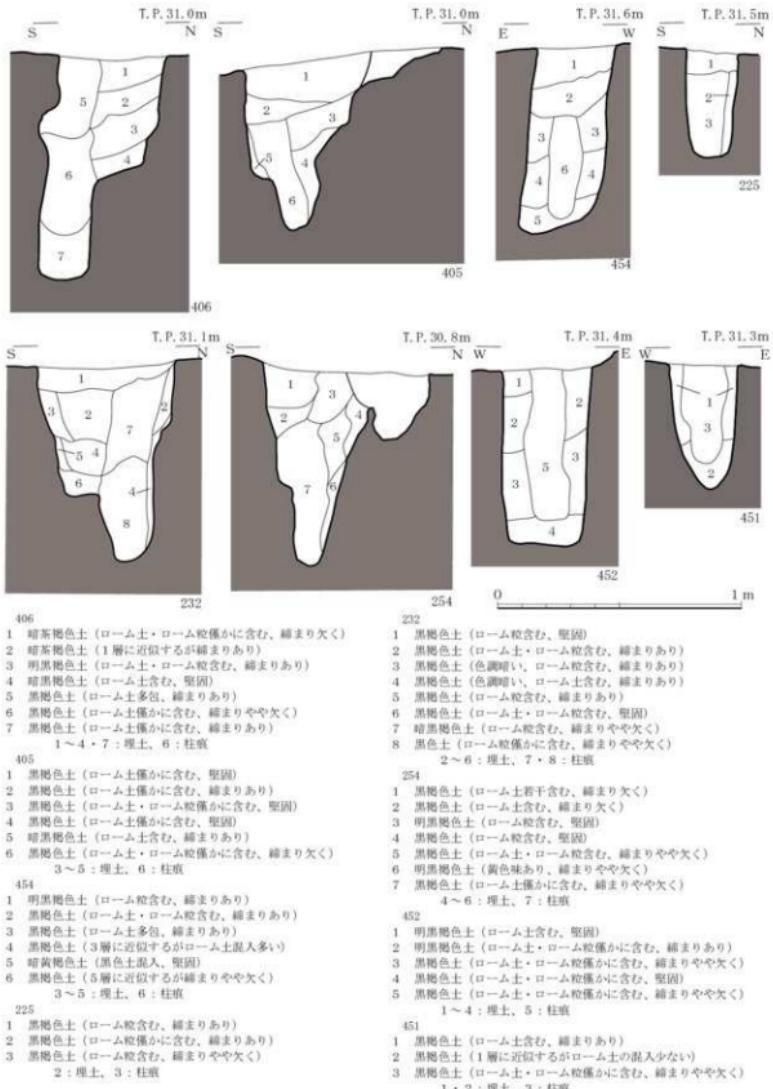
一方、柱痕の最大値は20cmを測る。この計測値は角材の1辺の幅ではなく、5寸角材の斜辺長であるとみられる。柱穴半裁時の掘削が柱の向きと斜交したことによるものと推定される。このことは、径15cm以上20cm未満の太さが計測された柱痕が1基しかなく、15cmをもって角材径が断続していることからも示される。このような5寸、4寸、3寸半を基本とする角材の使用は、現代の木造建築に通じる規格性である。

柱痕のみられる柱穴のうち16基の土層断面図を掲示した（第50・51図）。さらに柱抜取痕のみら

表 27 柱痕の直径（柱径）

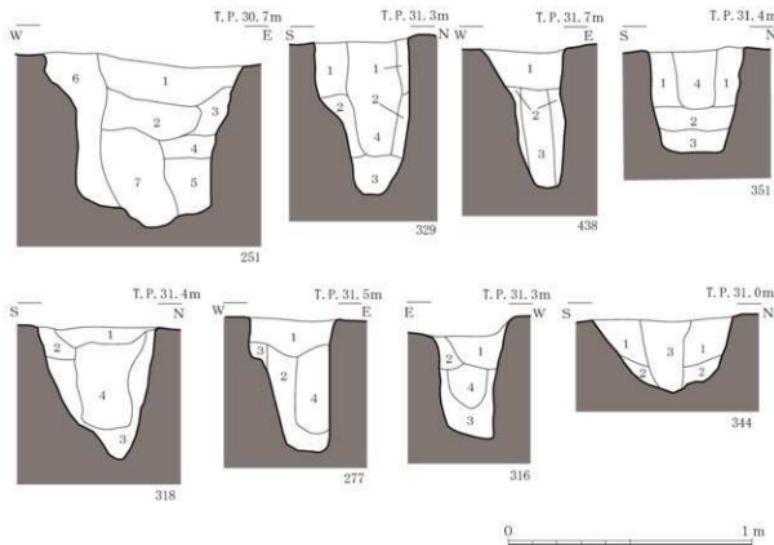
深度	基数	柱痕の太さ(cm)									
		7	10	11	12	13	14	15	16	17	18
30cm台	66	1	3	1	1	1		8			
40cm台	54				1	1		9			1
50cm台	38		3	2		2		2			2
60cm台	21		3					4			1
70cm台	23		3	1	1	2		4			1
80cm台	4								1		2
90cm台	2							1			

4. 溝と柱穴



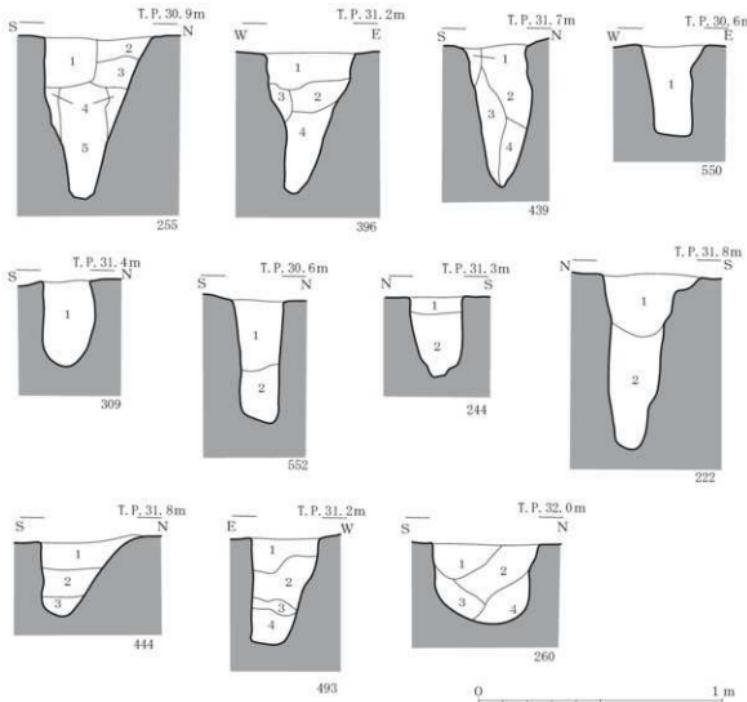
第50図 柱穴（土層）(1)

IV 調査の総括



- 251
 1 暗茶褐色土 (茶色味あり、ローム土含む、縮まりあり)
 2 黒褐色土 (茶色味あり、ローム土僅かに含む、縮まり欠く)
 3 黑褐色土 (ローム土僅かに含む、縮まり欠く)
 4 黑褐色土 (3層に近似するが縮まりあり)
 5 黑褐色土 (ローム粒若干含む、縮まりあり)
 6 明黒褐色土 (ローム土・ローム粒含む、縮まりあり)
 7 黑褐色土 (ローム土・ローム粒含む、縮まりやや欠く)
 3 ~ 6 : 理土。7 : 柱痕
- 329
 1 暗茶褐色土 (ローム土・ローム粒含む、縮まりあり)
 2 黑褐色土 (ローム土・ローム粒含む、堅固)
 3 暗茶褐色土 (黑褐色土混入、縮まりあり)
 4 暗黒褐色土 (ローム土含む、縮まりやや欠く)
 1 ~ 3 : 理土。4 : 柱痕
- 438
 1 黑褐色土 (ローム土・ローム粒含む、縮まりあり)
 2 黑褐色土 (ローム土多量、縮まりあり)
 3 黑褐色土 (ローム土僅かに含む、縮まり欠く)
 2 : 理土。3 : 柱痕
- 351
 1 暗茶褐色土 (ローム土・ローム粒僅かに含む、縮まりあり)
 2 黑褐色土 (ローム土含む、堅固)
 3 暗茶褐色土 (黑褐色土混入、縮まりあり)
 4 暗黒褐色土 (ローム土含む、縮まりやや欠く)
 1 ~ 3 : 理土。4 : 柱痕
- 318
 1 明黒褐色土 (ローム土含む、縮まりあり)
 2 黑褐色土 (ローム土・ローム粒僅かに含む、縮まりやや欠く)
 3 暗黃褐色土 (黒褐色土僅かに混入、縮まりあり)
 4 暗黒褐色土 (ローム土・ローム粒僅かに含む、縮まりやや欠く)
 2 ~ 3 : 理土。4 : 柱痕
- 277
 1 黑褐色土 (ローム土含む、縮まりあり)
 2 明黒褐色土 (1層に近似するが明度あり、ローム土多い)
 3 暗黃褐色土 (明黒褐色土含む、縮まりあり)
 4 明黒褐色土 (ローム土含む、縮まりやや欠く)
 2 ~ 3 : 理土。4 : 柱痕
- 316
 1 暗茶褐色土 (ローム土僅かに含む、縮まりやや欠く)
 2 暗褐色土 (ローム土僅かに含む、縮まりやや欠く)
 3 黑褐色土 (ローム土僅かに含む、縮まりあり)
 4 暗褐色土 (ローム土僅かに含む、縮まりやや欠く)
 3 : 理土。4 : 柱痕
- 344
 1 黑褐色土 (ローム土・ローム粒含む、縮まりやや欠く)
 2 黑褐色土 (ローム土含む、堅固)
 3 黑褐色土 (ローム土・ローム粒若干含む、縮まりやや欠く)
 1 ~ 2 : 理土。3 : 柱痕

第51図 柱穴（土層）(2)



255

1 喀茶褐色土 (ローム土・ローム粒含む。縮まりあり)

2 喀黃褐色土 (黒褐色土含む。縮まりあり)

3 黑褐色土 (ローム土含む。縮まりやや欠く)

4 黑褐色土 (ローム土含む。縮まりあり)

5 黑褐色土 (ローム粒含む。縮まりあり)

4 : 理土。5 : 住抜取底

396

1 喀黃褐色土 (黒褐色土僅かに混入。堅固)

2 黑褐色土 (黄色斑あり。ローム土・ローム粒含む。縮まり欠く)

3 喀黃褐色土 (黒褐色土僅かに含む。縮まりあり)

4 黑褐色土 (ローム土・ローム粒含む。縮まりあり)

3 : 理土。4 : 柱抜取底

439

1 喀黃褐色土 (黒褐色土僅かに混入。堅固)

2 喀黑褐色土 (ローム土・ローム粒僅かに含む。縮まりあり)

3 黑褐色土 (ローム土僅かに含む。縮まりあり)

4 黑褐色土 (ローム土僅かに含む。縮まりやや欠く)

3 : 理土。4 : 柱抜取底

550

1 黑褐色土 (ローム土含む。縮まりやや欠く)

399

1 黑褐色土 (ローム土・ローム粒・ロームブロック含む。縮まりやや欠く)

552

1 黑褐色土 (ローム土僅かに含む。縮まり欠く)

2 黑褐色土 (1層に近似するが色調暗い)

244

1 喀茶褐色土 (ローム土若干含む。縮まりあり)

2 黑褐色土 (ローム土僅かに含む。縮まりあり)

222

1 喀黑褐色土 (ローム粒含む。縮まりあり)

2 黑褐色土 (ローム粒僅かに含む。縮まりやや欠く)

444

1 黑褐色土 (ローム土・ローム粒僅かに含む。縮まり欠く)

2 喀黑褐色土 (ローム土僅かに含む。縮まりあり)

3 黑褐色土 (ローム土・ローム粒僅かに含む。堅固)

493

1 喀茶褐色土 (ローム粒含む。縮まりあり)

2 黑褐色土 (ローム土・ローム粒含む。縮まりあり)

3 黑褐色土 (ローム粒僅かに含む。縮まり欠く)

4 喀黑褐色土 (ローム土僅かに含む。縮まり欠く)

260

1 喀茶褐色土 (ローム土・ローム粒含む。縮まりあり)

2 黑褐色土 (ローム粒若干含む。縮まりやや欠く)

3 明黑褐色土 (ローム土・ローム粒含む。縮まりやや欠く)

4 喀黑褐色土 (ローム粒若干含む。縮まりあり)

第52図 柱穴(土層)(3)

れる3基（第52図Ac255・396・439）、柱痕や柱抜取痕のみられない柱穴8基を揭示した。後者には單一層の堆積を基調とした柱穴（第52図Ac550・309）、上下2層の堆積を基調とする柱穴（第52図Ac552・244・222）、3層以上の水平堆積を基調とする柱穴（第52図Ac444・493）、複数層の斜め堆積を基調とする柱穴（第52図Ac260）などがある。深度の深いものほど柱痕や柱抜取痕が高率で認められるが、これは深度50cm以上の柱穴が減少することにもよる。

柱穴の時期 553基の柱穴のうち、出土遺物が認められたのはAc46・91・217・250・271柱穴の5基であるが、そのうちAc91・217・271柱穴の3基は繩文土器の破片1点の出土であるので、柱穴とは直接関わらない。これに対してAc46柱穴からは陶器と磁器の破片各1点、Ac250柱穴からは磁器破片1点が出土している。いずれも小破片のため時期比定は難しいが、磁器については近世の遺物といえる。

柱穴の中には他の遺構と切り合い関係をもつものもある。主に小穴との切り合いで、小穴に切られる柱穴は5基、小穴を切る柱穴は9基を数える。柱穴と重複関係にある小穴は8基だがいずれも出土遺物がないことから、遺構状況から柱穴の時期を求めるることもできない。またCd2廃棄土坑は2基の柱穴を切り込んでいるので、柱穴は19世紀前葉以前に位置付く。

したがって、柱穴に関して明確な時期比定は困難である。また500基を超える柱穴が同時期であるとする保証は現実ではない。しかし、以下の点からおおまかな時期を推定することは可能ではないかと考える。

- 1) 柱穴はいずれも溝で区画された内部に収まる。しかも大半が溝から一定の距離を保ち、溝と重複しない
 - 2) 柱痕から、使用木材は5寸角柱を主として、3寸半、4寸の規格のある角柱と推定される
 - 3) 2基の柱穴から磁器が出土していて、少なくとも近世に比定できる
- という点である。1)に関しては、近世の区画溝に規制された配置状況から、溝と一体で形成されたと判断できる。2)については、今までつながる柱規格がどこまで過去に遡るか、そして掘立柱建物がいつまで下るかを把握しきれていないが、そうした状況が交差するのが近世前期と予測している。3)に関しては、1)・2)と矛盾をきたさない。

以上のことから、大半の柱穴はCa1・2・3溝とほぼ同時期、17世紀代であると推定する。

溝と柱穴の評価 溝と柱穴は一体で構成された遺構で、複数の建物跡とその屋地の区画であると位置付けることができる。そして形成時期は17世紀代と判断した。

建物については中世墓群の存在から、湧河寺や清水寺との関連を想定できなくはない。しかし以下の点から寺院関連の遺構であったとするには消極的にならざるを得ない。すなわち、

- A) 削平を受けているとはいえ、礎石建物の痕跡がまったく認められない
 - B) 調査地点で検出した柱穴の掘方底に礎石や礎盤を敷いたものもない
 - C) 瓦の出土が少量で、寺院、あるいは関連施設の跡とは様相が異なる
 - D) 寺院に関わる出土遺物がみられない
 - E) 使用されたとみられる5寸柱は太めとはいえ、民家規模の柱材である
- という点、さらに中世墓群との間に時期差があることからすると、既述したように掘立柱建物の下限時期の検討は残るが、17世紀代に溝で区画した有力農民の屋地であったと位置付ける。

参考文献

(論文・報告)

赤星直忠 1980 「海老名市上郷中世墓群調査概報」『神奈川県埋蔵文化財調査報告』19 (神奈川県教育委員会)

末木健 1988 「曾利式土器様式」『縄文土器大観3 中期II』株式会社小学館

中世研究プロジェクトチーム 1995 「神奈川県下における中世遺構の研究－地下式坑について－」『かながわの考古学第5集 かながわの考古学の諸問題（II）』(神奈川県立埋蔵文化財センター)

中世研究プロジェクトチーム 2002 「神奈川県内の「かわらけ」集成（6）」『研究紀要7 かながわの考古学』(公益財団法人かながわ考古学財団)

中世研究プロジェクトチーム 2016 「神奈川県の県央地域の中世集落（1）」『研究紀要21 かながわの考古学』(公益財団法人かながわ考古学財団)

中世研究プロジェクトチーム 2020 「神奈川県の県央地域の中世遺跡（5）－かわらけの検討I－」『研究紀要25 かながわの考古学』(公益財団法人かながわ考古学財団)

(単行本)

加納俊介・石黒立人 (編) 2002 『弥生土器の様式と編年 東海編』株式会社木耳社

草野和夫 1995 『近世民家の成立過程』中央公論美術出版

シンボジウム南関東の弥生土器実行委員会 2005 『考古学リーダー5 南関東の弥生土器』六一書房

東北・関東前方後円墳研究会 2005 『考古学リーダー4 東日本における古墳の出現』六一書房

永井久美男 (編) 1996 『中世の出土錢 補遺1』(兵庫埋蔵錢調査会)

中山毎吉・矢後駒吉 1924 『相模国分寺志』(1985 株式会社名著出版復刻)

(発掘調査報告書)

尼寺遺跡調査団 1986 『尼寺遺跡－地下式壙の調査－』(近藤英夫「第V章まとめ」)

公益財団法人かながわ考古学財団 2011 『社家宇治山遺跡』(かながわ考古学財団調査報告書264)

公益財団法人かながわ考古学財団 2014 『河原口坊中遺跡 第1次調査』(かながわ考古学財団調査報告書304)

有限会社吾妻考古学研究所 2017 『国分尼寺北方遺跡 第47次調査』

報告書抄録

国分尼寺北方遺跡

－昭和63年発掘調査の報告－

発 行 海老名市国分尼寺所在遺跡調査団

発行日 令和4年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

